



* 0000972000 *

0000972-000

302.33-1848g

現代英国論

伊東敬・著

三笠書房

1938

AAB

宇治田直義先生

紙下

供市高見乞市此止

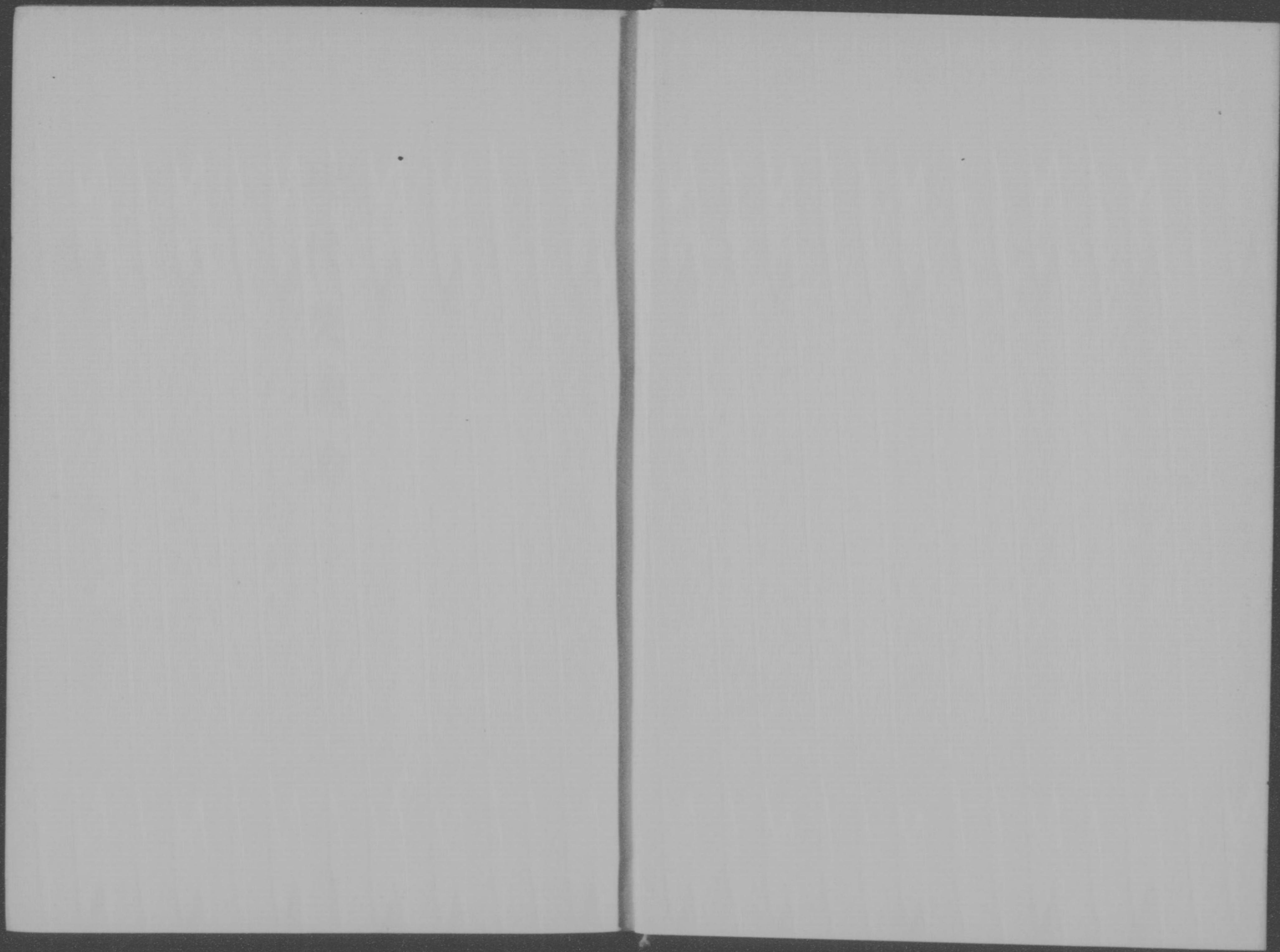
年東 敬

東京都千代田区丸の内二丁目十二番館六号四二室

芳澤中國記念事業財團

電話(28)四一〇八番





現代英國論

伊東敬著
三笠書房刊行

302.33
[848g]



509128

自序

薄い紙でも表裏ありとか、まして複雑な英帝國の現勢に表裏のなからう筈はない。

從來吾が日本に於ける英國研究は、非常に克明に行はれてゐる。然し残念な事には、日本の多くの人々は、稍もすればその英國の片面のみを視て、所謂現代英國の對日動向なるものを卜し易いやうである。

角力に勝つて勝負に負けると云ふ譬は、そのやうな吾が生一本な勞作の所産に外ならない。勿論、吾が日本として日英關係の検討は重要である。但しいくら吾が方が表裏ある態度を絶對に持たぬと力んだ處で、相手方の英國は、對日關係のみでこの世界に店を張つては居ないのであるから、自然と彼等の對日態度には表裏を生ずる譯である。

故に若し日英關係の前途を、より一層根本的に見極めようとすれば、どうしても英本國對各自治領諸國や英國對歐洲諸國又は英國の米大陸に對する關係の検討こそ、吾が日本として緊要缺くべからざる問題である。

英米關係・英歐關係が、英國の對日態度を左右してゐる事は、既に屢々直面させられてゐる現實である。

去る滿洲事變當時、倫敦に在つた私は、吾が日本の大勢が如何に、所謂のれんに力押しをや
らせられてゐるかを痛感した者であり、先頃の渡歐に際しても、益々その感を強くせしめられ
た。

今や吾が日本は全能力を傾けて、山積する對外問題の克服につとめてゐる。その眞摯な努力、
莫大な犠牲が從來稍もすれば陥つたのれんの力押しに終らざるよう希求する念や切、茲に不敏
菲才を顧みず本書を公刊した所以である。幸ひにして微志を諒とせられ、共に對外常識の向上
に精進せらるゝ事こそ、吾が日本及んでは日本の世界の爲め誠に望ましい。

尙、本書刊行に際し、外務省情報部長谷川了氏、大阪商船會社船長森勝衛氏、明治大學教授
中川富彌氏の御高導を、併せて萬謝申上げる次第である。

昭和十三年萌緑の頃

伊 東 敬

目次

序
自序

第一篇 英本國と自治領諸國

- 一、英帝國自治領群の前途……………二二
- 二、英本國經濟の非英帝國性……………一六
- 三、英帝國内の移民需給情態……………三三
- 四、各自治領の英帝國觀……………二八
- 五、英帝國防を搖す人口問題……………三四
- 六、礦物資源から見た英帝國……………四〇
- 七、移民需給を繞る英帝國網の解消……………四九

第二篇 英本國の現情一瞥

- 一、英吉利國防の第四線問題……………六

二、關稅障壁と英國朝野の體驗……………七三

三、英吉利政界を背負ふ人々……………七七

四、英吉利政界の選舉費……………八七

五、事變と日本の對英認識不足……………八九

第三篇 英本國と歐洲大陸……………九七

一、東部歐洲問題と英國の態度……………九八

二、英伊の對立とその前途……………一〇六

三、西班牙内亂と英伊の舞臺……………一一一

四、英伊の地中海競技……………一二四

五、地中海を繞る各國の立場……………一三一

六、地中海の前途……………一三三

第四篇 英本國と北米大陸……………一四一

一、英佛と獨伊に挟まる米國の苦惱……………一四三

二、英米提携強化の二大障害……………一五四

三、英米交渉とハル長官の横顔……………一六一

四、英帝國を賭する對米提携の強化……………一六六

五、英米提携とモルガン財閥……………一七六

六、英米佛提携強調の前途……………一八三

第五篇 英吉利とアラブ・猶太問題……………二〇一

一、英吉利政界に於ける猶太人……………二〇三

二、猶太母國問題と英國の苦境……………二〇六

三、倫敦のロスチャイルド家……………二二三

四、大アラビア再興王と英外交……………二二六

五、アラブ諸國を繞る英伊の角逐……………二三五

六、英帝國を揺がすアラブ猶太鬭争……………二四七

第六篇 自治領各地の趨勢……………二五三

一、英領南阿の三人種とその大望	三六四
二、英領北米人の實相	三七二
三、佛系カナダの分裂運動	三七八
四、濠洲人と新西蘭人	三八〇
五、濠洲政界の近情	二八七
六、英領西印度諸島の前途	二九三
七、溢れる印度の人々	二九六
八、印度の政情とその將來	三〇〇

第七篇 英帝國と舊獨領土問題 三〇七

一、英帝國と獨逸の舊植民地	三〇八
二、西南アフリカの前途	三二二
三、第二のラインランド	三二六
四、煙草まで動員の回收運動	三三二
五、獨伊提携と南阿の焦慮	三三三

第八篇 英帝國內の語り草 三三一

一、英帝國主義の最大支柱	三三一
二、英本國の背後を脅す獨裁者	三三八
三、英帝國の旅客機網	三四四
四、英帝國各地の所得税	三四八
五、英伊のイラク油田爭奪戰	三五四

第九篇 倫敦の舞臺裏 三六三

一、英吉利の大學と大學生	三六四
二、現代英吉利青年の氣力	三七二
三、英吉利のお百姓達	三七四
四、霧に包まれる倫敦橋	三七七
五、英吉利繁昌商店のぞ記	三七八
六、世界を走り廻る牛	三八四

七、	在英閑話五題	三六六
八、	倫敦の提灯屋達	三九一
九、	對英日本宣傳	三九六
十、	英京の街頭風景	四〇五

第一篇

英本國と自治領諸國

英帝國自治領群の前途
英本國經濟の非英帝國性
英帝國內の移民需給情態
各自治領の英帝國觀
英帝國防を搖す人口問題
礦物資源から見た英帝國
移民需給を繞る英帝國網の解消

一、英帝國自治領群の前途

「日本のお百姓は實に勤勉だ、あんな山の頂上近くまでも耕やしてゐる！」
「いや君、さうではないよ。山耕やされてその頂上までも失はんとす、國土の狹隘以つて認識せられ度し、なのさ。」

富士や櫻や鳥居に好感を持つ外國人と、産業躍進に反感を抱く外國人とが孫文口調よろしく、瀬戸内海航行中の船上で兩岸を眺め乍ら話し合つてゐた。

最近漸く表面化されて來た資源の再分配論や殖民地再分割の叫びに對し、ソ聯よりも葡萄牙よりも和蘭よりも佛蘭西よりも、先づ第一にその引き合ひに出される因果な英帝國。

一平方哩に僅か三十五人と云ふのが英帝國全體平均の人口密度であり、吾が日本全土の一平方哩當り三百四十六人と比較をするならば、殆ど空地に等しい存在なのである。

但し英本國だけの人口密度は流石に多く、一平方哩平均四百人を超へては居るが、それでも日本内地の四百三十六人から見れば一割近くの稀薄さを示してゐる。

その英帝國中、人口問題に就いて最も議論の對象とされ易いのは、肝心の殖民地と名のつく各屬領や王領ではなく、獨立國然としてゐる各自治領、とりわけ濠洲聯邦及びカナダ自治領に相違ないやう

である。

英吉利人に限らず自讚神聖白人達の獨占的な二大殖民地たるその濠洲・カナダに於ける殖民情態は、未だ一平方哩當りたゞの三人にも達して居らない。而もこれらの二自治領には、千古斧鑿を入れぬ廣大な開發可能地が徒らに將來の當てもなく擱保されてゐる。

同じ英帝國の内でも各殖民地は、名こそ殖民地ではあるが、その外來移民吸收率は各自治領と比較にならない程に低いやうである。例へば印度を除く各殖民地に於ける英吉利人及び所謂白人種は全部を合せても十七萬に充たず、それは土着民有色人種の四百分の一を占めるに過ぎない。即ち英帝國內に於いて通稱される各殖民地にはそれぞれ多數の有色人種が先住し現存して居り、これは或る意味に於いて各自治領よりも遙に先進開化してゐる事を物語るものである。

然し乍ら最近に至り各自治領に於いても漸く、その識者達は入殖民の過少による彼等子孫の危機を充分に理解し初めて來た。

現に濠洲聯邦のライオンズ首相達でさへも公然と、「若し吾々が濠洲全土を充分に開拓し活用し獨占の實を擧げる事もなく、この大地域を單に領有しつゞける態度は強ち公正なものだとは言ひ通せなくなるであらう。」と稱するに至つた。

濠洲はその移民草創時代、清教徒的なカナダ移民と甚だしく異り、恰も帝政露西亞のシベリアに等しい色彩が加へられたもので、爲めに今日と雖も濠洲民と英本國民とは殆ど祖先が同一であるにも

拘はらず、この二者の間には吾々第三者の想像も及ばない暗い對立的な感情が未だに強く支配してゐるのである。

英本國に濠洲移民の出戻り者が數多く居ると云ふ意外な現情は、果して何を物語るものであらうか。氣候風土に適しなかつたと云ふ理由も表面上尤もな話ではあるが、それは寧ろ印度や海峽殖民地に適切な辯明である。

英帝國主義唯我獨尊の信奉者達は、英本國民の濠洲移住に聲を嘖し、英吉利政府も亦毎年五千萬圓を超へる巨費を計上し、濠洲・カナダ向けの移民獎勵に全智を傾けて來た。

然るにその努力の結果はと見れば、從來極端に排他的な白人の天地を標榜する中心地濠洲に於いてすら、而もその要路當局者の舌端から既になかば諦めの言辭を聞くやうになつてゐる。

英帝國內の各自治領は一括して實に世界全陸地の七分ノ一を占めて居り乍ら、人口は僅か世界總數の七十五分ノ一に過ぎない。即ち彼等自治領は、尠くともその半分の天地を否應なしに解放せねばならない天命に置かれてゐる。

先頃、現代英帝國主義最大の支柱と稱せられる南阿聯邦のスマツツ將軍達すらも、「吾々はあらゆる天然資源に恵まれて居り乍ら、それを活用する文化移民の缺乏に瀕してゐる。」と長歎息を漏らした程である。

又一方、ニュージールランドのサベツチ首相等も、これら自治領の廣大な空地へ人間を殖へつける何

らかの方策決定をのみ目的とする英帝國會議の開催を提唱しつゝある。

處が英本國の政府側ではそれら各自治領の悲鳴を聞き流し、先頃移民獎勵費の半減を企てた。英本國として見れば、昭和六年のウェストミンスター條令によつて自分達から完全に獨立し去つた各自治領であり、とりわけ濠洲・カナダ邊りはオツタワ會議でも倫敦會議でも自分等の都合のよい要求ばかりを固執し尠しも母國を母國らしく尊敬せぬ自治領よりも、却つて英帝國以外に在るアルゼンチンやスカンディネヴィア諸國の方に親密さを感じ、又實質的にもそれを具現しつゝある實情である。

即ち近來の英本國に於ける人口問題は海外移民を考慮するとは逆な傾向が表はれて來て居り、且つ又折角出店を作る努力をしてやつても多少調子に乗ると却つて本店の老舗の取引先を脅やかすやうな事になり易い現狀に接し、英本國側のこの問題に處する態度が漸次消極化しつゝあるのは無理もない。勿論英本國にも英帝國の再強化論者は現存してはゐるが、英本國內多數の空氣は最早英吉利家族の自治領各地向け送り出しに氣乗り薄なのである。

吾々としてはその趨勢を視ると同時に、最近特に英吉利産業指導者達がその仇敵と目する日本の低賃銀攻撃に徒勞の時間を費ひやすよりも、その攻撃を實質的に一歩進めて日本全體の生活水準を寄せ手、搦め手から引上げるように仕向け、以つて日本の生産費を割高ならしめんとする方向に意を注ぎ初めた事をも併せて視なければならぬであらう。

外容の偉大を誇つた英帝國、その内部に於ける英本國と各自治領との人口需給問題は、遺憾乍ら英

帝國主義者の意に反する實勢は以上の通りである。名こそ未だに英自治領であれ、好んで自らが獨立化し、今やすべて獨自に解決せねばならない濠洲でありカナダでありニュージールランドである。

彼等は前途を如何に打開出來得るのであるか、それは敢へて吾々の容喙を俟たずとも、彼等自身の悲觀説なり諦めの文句なりが間接乍らその前途を指示してゐるやうだ。

即ち濠洲聯邦のライオンズ首相達の言辭を俟つまでもなく、尠くとも現住白人子孫の長久策こそは公正濠洲の徹底化であり、この趨勢は強ち外部からの作用によらずして、寧ろ内部から自發的に善處され具體化されなければならぬ時代が、最早目捷の前途に迫りつゝあるやうである。

二、英本國經濟の非英帝國性

去る昭和元年に行はれた英帝國會議は主として各自治領間の平等化が問題とされ、次いで昭和七年に催ふされた會議は英帝國內相互各自の特恵制度を議題としたに對し、昭和十二年の會議は結果に於いて終始英帝國の國防問題の協議に一貫したやうであつた。

そして寧ろ各自治領側からも強ひられた英帝國の軍備強化及び自治領物産の英本國向け通商助成等の暫定的取決めにより、表面上は如何にも英帝國群の一致團結振りの依然として堅固な事を強調しつゝ閉幕したのである。

然し乍ら英帝國の肝腎な中樞となつてゐる筈の英本國經濟界、特にその通商上日常必需の食糧及び原料品の貿易線に於いて、英帝國內の各領地よりも手近の歐洲大陸各地への依存性が強いと云ふ根本點は一向に變化せしめ得ないやうである。

歐洲大陸中でもとりわけ歐洲西北海岸の諸國が現今に於いてすら、如何に英吉利貿易の主要な取引先であるかと云ふ實績に接しては何人も些か意外の感に打たれる。然しこの状態は英吉利が過去數世紀以來常道としてゐる處であり、特に十九世紀中英吉利貿易は英帝國網に向つて大擴張を見たがそれと同時に對歐貿易も可成りの飛躍を告げた事は見逃せなかつた。

歐洲大戰以來の二十ヶ年を概算した英吉利總輸出入貿易の大勢に據れば、對英帝國內各自治領殖民地間に行はれた貿易額は三割一分に止まり、對歐羅巴諸國間に行はれた貿易額は實に三割六分までを占めてゐる。即ち英本國として直接の商賣上では、未だに英帝國內の各國そのものよりも歐洲大陸諸國の方が二割程大切な取引先となつてゐる譯なのである。

今それを英本國の輸入貿易のみに就いて見れば、その三割六分までが歐洲大陸の諸國から供給されて居り、各自治領や殖民地側では僅か二割七分しか供給して居らなかつた。

一方英本國の輸出貿易に於いては、各自治領殖民地側がその四割二分までを引き受けて居り、歐洲大陸側は三割を買ひ取る程度で流石英帝國側が上華客然と上座に構へて居るやうである。然しこれには英吉利貿易の特長とする保税貿易即ち再輸出が包含されて居らず、英吉利再輸出の六割九分まで占

める歐洲各國と僅か一割四分の英帝國各地てふ割合を考慮に入れると、英吉利總輸出の主客は各自治領殖民地なりと強ち明言は出來得ない實勢に在るのである。

即ち敢へてそれを稱するならば、英本國製造業者にとつて大事な華客は英帝國內の各地であり、英本國貿易業者にとつて最も重要な相手先こそは歐洲大陸の各地と云ふ事になり、又食糧品原料品の供給者としての歐洲大陸各國の存在は英本國として例へ如何なる内部的不都合があつたとしても夢疎そかには出來ないのである。

英吉利貿易を通し英帝國各地よりも重要な地位を占めてゐる歐洲大陸諸國中、とりわけ對英貿易の著しいのは英佛海峡及び北海に面する五ヶ國である。

獨逸が首位にあり次いで丁抹・佛蘭西・白耳義・和蘭の順で、この五ヶ國だけで歐洲大陸からの對英供給量の三分ノ二に及んでゐる。それら五ヶ國についで對英貿易に目立つ歐羅巴の國々としては、瑞典・ソ聯・西班牙・伊太利・芬蘭・挪威・瑞西等があり、以上の十二ヶ國のみで英吉利に於ける歐洲輸入品の九割五分を占め、且つ又これは英吉利の總輸入貿易の三割五分に相當してゐる。

濠洲の百八十分の一にも及ばない狹隘な丁抹が英帝國內の各自治領と伍して、對英供給線上に重要な地歩を占めてゐる事は偉觀に相違なく、丁抹としても總輸出の實に三分ノ二まで對英貿易に傾倒してゐるのである。

そして農牧國丁抹の對英輸出は云ふまでもなく農牧生産品であり、和蘭よりの對英輸出も亦牧畜生

産品が殆ど全部を占めてゐる。従つてこの事實のみより推しても英吉利が、殊にその日用食糧品に於いて絶對的に歐洲大陸へ依存して來てゐると云ふ事が明言され得るやうである。

英吉利の歐洲大陸向け輸出は英帝國各地へ輸出する額よりも尠いものであるが、決して輕視出來ない情勢に在る。英吉利總輸出の三分ノ一を引受けてゐる歐洲の近隣諸國の重要性は、それによつて輸入一方のみならず英吉利貿易全體としてのものである事が判然とならう。従つて歐洲大陸に最も接近する英吉利の國際港倫敦の位置は、例へ空襲を怖れ英國代表港の西北海岸移轉説が擡頭しては居るが、未だ世界最大の物資仲繼港である事に些かの動搖も示さず、そして英吉利再輸出品の五分ノ三はこの倫敦港から積み出されてゐる現況である。そして倫敦からの再輸出品は殆ど全部歐洲大陸へ向けられ、とりわけ獨逸・佛蘭西・白耳義によつて占められてゐる。

近來英吉利貿易の傳統的特長としてゐた再輸出貿易は、年々減少の傾向をたどり特に歐洲大陸相手の分は甚だしいやうである。

それら多くの國々は英吉利の仲繼貿易による事なくゴム・石油・皮革等の原料物資を生産國から直接に買ひつけるやうになり、或ひは又白耳義アントワープ港の如き新進仲繼港と老舗倫敦港との競争激化により、英吉利貿易の特異性は漸次薄らぐものと見なければならぬ。

歐洲戰爭當時まで英吉利の輸出石炭の八割餘は歐羅巴市場に吸収されて居たが、戦後各國の石油使用の激増及び水力電氣の開発は全般的に英國炭の需要を引下げ、且つ又低賃銀の武器を擁する波蘭石

炭の國際貿易界登場により、英吉利の獨占的地盤と誇るさしもの歐洲石炭市場の前途は甚だ悲觀材料が多いやうである。但し地理的關係もあり、佛蘭西・白耳義・和蘭に於ける英吉利炭の需要状態は大勢に逆行して増加を告げてゐる。

英吉利の輸入する鐵礦の殆ど全部は歐洲大陸からのものであり、生産費等の關係上自國品よりも格安な粗鐵半製品の輸入もすべて同様である。但しそれによる鐵鋼精製品の輸出先は、主として各自治領及び印度方面とされてゐる。

又纖維工業用機械類の歐洲大陸向け輸出状態は、アジア方面向けの減少率よりも遙に甚だしい衰退振りを示した。

元來歐洲大陸は英吉利毛織工業の上華客なものはあるが、羊毛價格の漸減及び代用品粗毛の増加に刺戟されて勃興する歐洲各國の毛織工業に、差し當り下級製品のみの影響としても漸く前途の不安を感じさせられて來てゐるやうである。

纖維工業中、綿糸のみが主として歐洲各地へ向けられ、綿布は歐洲以外の諸國へ輸出されてゐる。

又英吉利製麻業はその原料の五分ノ四までを歐洲大陸からの供給に仰ぎ、他にも非金屬鑛石工業等その原料を専ら歐洲大陸に依存する英吉利工業は決して二三に止まらないのである。

英吉利に於ける主要港の内で歐洲大陸と餘り密接な關係を持つてゐないのは、リバープール・グラスゴー・ブリストルの三港に過ぎない。

倫敦港の利害は世界的なものには相違ないが、それ程主要な位置に導いた第一歩こそは對歐洲大陸貿易に外ならなかつた。歐洲大陸からの對英供給物資は倫敦港に溢れ、倫敦港以外のテームス沿岸に陸揚げされるものも尠くない近狀を呈してゐる。

今や歐洲大陸以外の各方面に於いてあらゆる工業が勃興し發展しつゝある爲め、現状線に徘徊する限り英吉利の輸出貿易は致命的な後退を免れない。然し乍ら英帝國內の各自治領や殖民地に於ける英本國製品の需量率の好轉は、自治領殖民地の經濟進化を斷然中絶させ得ぬ以上望むべくもなく、現に王領錫蘭島の一小經濟界に於いてすら土民の燐寸工業が勃興しつゝある程である。

従つて貿易國英吉利として致命的打撃をやゝ免れ得る進路は、工業發展率が他の世界何れの地方よりも緩慢な歐洲各地に向つて相當量の輸出増加を強行するのみよりない。

英吉利の産業關係と云ふものは、若し歐洲以外からの輸入が増加を告げる場合には常に歐洲大陸からの輸入も比率こそ異れ増勢を示して居り、決して理論通り自治領等からの輸入増加を見ても歐洲大陸からの輸入分をそれだけ差引く譯には實情が許さなかつた。

即ち英吉利はとりわけ新鮮な食糧品の供給先をどうしても近接の歐洲大陸各國に仰がなければならぬ經濟的立場に在り、故に歐洲諸國との貿易關係は例へ英帝國主義強調の時代に曝らされても現實的には依然として英吉利貿易界に重要性を確保してゐるのである。

戰時に際しては他の列國よりも一層痛切に空襲十字火の恐威を感じる程あつて、英吉利島は歐羅巴

大陸と英自治領各地と南北米大陸との三者間に地の利を占め、それを全般的に活用したればこそ世界的な英吉利貿易界の基礎を築き上げたのであると云ふ事は、思慮ある英國朝野の指導者齊しく認める處である。而もそれら三者に加へて十數年以來石油資源に關聯シアジアの近東地方との密接さも、英吉利としては重要視せねばならなくなつて來てゐる。これは英帝國主義を英吉利甦生最善の途と信ずる人々にとつては甚だ不愉快な成りゆきには相違ないが、例へその當面の暫定的工作は如何なる形態を採るにせよ、經濟進化の根本義は國際的でなければ恒久的に成立し得ない事實を雄辯に物語つてゐるものであらう。

以上のやうに歐洲大陸の諸國を第一義とせねばならない英本國貿易の非英帝國的本性、及び別項に於いて詳述するが各自治領の非殖民地性と云ふ今日の組み合せ状態では、英本國の惱みも各自治領の怖のきも在來の英帝國と云ふ自發的な縮限世界の内輪だけでは解決され得ないものであらう。

何れにしても吾が日本と英吉利との提携が日本の發展上最も好ましい事は云ふまでもなく、唯從來のやうな各自治領を統率する英本國としての皮相な英國觀を捨て、寧ろスカンディネヴィア・アルゼンチン、近くは南方支那に質實的な歩道を確保せんとする英吉利として充分に認識仕直して善處せねばならない。これは從來兎角暖簾に腕押しさせられ易かつた吾が日本として緊要此の上もない事なのである。

三、英帝國內の移民需給情態

ジョージ六世の戴冠式を好機として開催された英帝國會議は、國防・通商・殖民に關する諸問題を秘密會議の形式で、一ヶ月に亘り殆ど連日討議を行つた。そして英本國としては各自治領の支持を兎も角も確保し、大體所期の目的を達成し終幕となつたやうである。

然し乍ら實質上に於いては國防問題に就いてのみ英本國と各自治領の一致合作が進められ、根本を成す通商問題も殖民問題も、恰も痛いところは絶對觸れぬと云ふやうな態度で敬遠仕通してしまつた。これは一面に於いて英本國と各自治領間の、利害一致が益々至難となつて來た事を物語るに外ならぬ。

云ふまでもなく先頃の會談取決めにより英帝國の國防は強化されるであらう、然しそれは決して眞の國防強化を期待出來ないのである。即ち事尠くとも英帝國に關する限り、各自治領に於ける殖民問題の根本的解決なくして、眞の國防強化なぞ望み得られないのである。

殷鑑還からず、かの英帝國會議終了よりいくばくもたゞない昨今既に、濠洲及び新西蘭方面に於いては、國防問題の再検討を要望する聲がそれぞれ識者間に高まりつゝあるやうである。

濠洲を初め英帝國內の各自治領を共通し、近來最大の惱みとされてゐる殖民問題。勿論吾が日本邊

りとは正反對に人口が稀薄すぎての問題である。

勢ひ開拓可能の豫定地域を最も多く而も未踏のまゝ、獨占してゐる旗頭濠洲の、殖民問題に對する機みはそれ相當に深刻さを極めてゐる。

そして流石に自稱神聖白人濠洲の譽れ高い彼地の爲政者達も遂ひに最近に至り、いつまでも一平方哩當り僅か三人（吾が日本内地四百三十六人、英本國約四百人）未滿の人口密度の殖民状態を以つてしては、例へその對外軍備を増加するとは云へ、活用しきらぬ大地を恰も喰ひもせぬのに他へは與へまいとする犬のやうに徒らに一人占めする事の不正さを外部から強硬に指摘される場合、果してよく自己の老大きさを保持し通す事は困難であると、甚だ悲觀的な告白をするやうになつて來た。

人手の薄いむしろ無人に近い廣大な領域を防禦すると云ふ事は、恐らく永久に不可能な望みであらう。而も人口過剰や資源不足の國々は期せずして、それらの人口要素に全く缺けてゐる未開發の天地に引きつけられぬ筈はない。

彼等自治領は人口不足の解決方法として、從來の常識を去らぬ限り、世界不況以來中絶してゐる英本國からの移民を大々的に奨励する以外に打開策は見當らないのである。

一九二〇年から一九三〇年までは一ケ年平均十五萬人からの英吉利人が本國を放れ、各自治領へ移住した。けれども一九三〇年以後は毎年出發移民數よりも、各自治領から逆に英本國への出戻り移民數の方が遙に上廻つて來てゐる實情である。

従つて若し各自治領が現状のみを本位とした保全を希求するならば、彼等は須らく積極的にその移民趨勢を一變せねばならない。處がそれを簡單に一變なし得ないのが各自治領對英本國の近情であり、此の點に吾々は經濟帝國主義の行きづまり即ち國際通商自由回復の曙光を望見し得るのである。

即ち各自治領側としては彼等の生産品に對し一層擴大される消費市場の保證を英本國より得られぬ限り、幾百千萬の英吉利移民を招致して積極的な開發を敢行なし得ないのである。且つ又新移民の拓殖によつてなされる生産品の増加分に對しても、同様な確な見通しが先決問題であると自治領側では主張して譲らない。彼等は齊しく英本國こそ、各自治領の大生産に對して充分な消費市場を何時でも用意出來得る立場に在り乍ら、徒らに諸外國の生産を助長しつゝあると批難してやまないのである。

一方英本國の輸入市場の實勢は過去二十ケ年を通算し、各自治領は漸くその中の二十七パーセントを供給したにすぎず、英帝國以外の外國生産品が絶對過半数を占めてゐた。就中歐洲大陸諸國からの供給は三十六パーセントに達し、各自治領を尻目にかけてゐるのである。

勿論英本國とても歐洲第一、自治領第二を好んで行つてゐる譯ではなく、英吉利島の經濟的位置がさうさせて居るのであり、殊に日用必需品の輸入に關しては各自治領よりも手近の歐洲大陸各國に依存する事遙に痛切なものがある。

従つて各自治領の直面してゐる國防の恒久強化問題、即ち人口の密度増加方策は、その對象が四海の情勢轉化に超然として、十年一日の如く唯々英本國のみに在る爲め問題は一向に解決され得ないの

である。

即ち恒久國防強化の爲め、各自治領は英本國からの移住民を大量に必要とする。それには各自治領が責任を以つて、英本國移民に適當の職場を與へなければならぬ。否、職場を與へる事は容易であつても、それら多數の新移住民が作り出す生産品の市場を確保して置かなければならぬ。

この場合、現在までの各自治領の常識を以つて、行動する限り自治領生産品の激増に際し唯一の頼みとされるのは龐大な消費市場を擁する英本國に外ならない。

従つて各自治領は期せずして、英帝國々防の強化・英本國移民の大量消化・英帝國內資源開發の積極化と云ふ三指に餘る羊頭を掲げ、その代償として英本國に於ける消費市場の獨占を強要し來たつたのである。

然し乍ら例へ英本國の住民が世界に響く富裕さであるとは云へ、遙々印度洋から地中海さては大西洋を越へて送られる價格・品質共に不利な條件に在る自治領産の野菜などを、常用消費出来る程の剩費は持ち合さない。

現在の各自治領の生産品に對してすらも、自治領の要望通りその全部を受け入れる事の出来ない英本國として、自治領移住民激増によるその生産激増に對し消費引受を保證すると云ふ事は、如何に英帝國々防の根本義とは云へ到底實行不可能な話である。

それのみでなく英本國側として見れば、近來寧ろ人口減退の兆候さへ表はれて居り、而も曾つて一

生懸命に盛り立て、やつた分家達に却つて苦汁を味は、されると云ふ割損な本家の體驗を充分に持つてゐる今日、自然自治領方面への移民獎勵態度は消極化せざるを得ないのである。

且つ又四海とみに戰雲にとざ、れる昨今の英吉利島として、各自治領の生産品の輸入増加を考慮するよりも、島内必需品をもつと本土内に於いて自給自足せねばならぬと云ふ緊急必要に迫られてゐる方が遙に重大な問題となつて來てゐる。

勿論現在の國內生活率は或る種類に就いては辛うじて國內總需要の四分ノ一を支へ、甚だしきは全部國外からの供給に俟たねばならない程の劣弱さで、且つ又主として依存する歐洲大陸の各生産地は何れも戰雲に巻き込まれる大勢に在り、一朝開戦の曉は英吉利島住民四千五百萬が僅か四五週間に於いて飢餓に迫られる状態に在り、それには是非共自治領の生産品に對し絶對依存主義を採用せねばならぬと云ふ風にも主張されてゐる。

然し乍ら戦時に於ける危険さは強ち英吉利島の海港にのみ限られた事ではなく、長途の海上輸送も亦前者に劣らぬ危険に曝らされるものと見做さなければならぬ。

否、場合によつてはなまじ遠距離に在る自治領生産品よりは、却つて全然別箇の外國生産品に俟つ方が遙に安全性の多いものであらうと云ふ點に就いては何人も否み難い處である。

近來大仕掛けに進められてゐる英本國の國防計畫には、一般の國々と異り陸海空軍の三要素の他に食糧軍と云ふ要素が物を言つてゐる點を見逃す事は出来ないやうである。

そして前述のやうな實勢からして、その好むと好まざるとに拘はらず、尠くとも英本國島内に於ける食糧問題の自給自足強行企劃に際し、本土内の生産助長に當り外國の生産を犠牲に供す事は勿論であらうが、それ以上に各自治領の生産を犠牲にする事となり易いやうである。

所詮自治領側の國防徹底は、古來の英帝國常識を一新せぬ限り、永久に望まれ得べくもない希求なのである。濠洲のライオンズ・新西蘭のサベツチ兩首相の公言を俟つまでもなく、英自治領殊更に濠洲・新西蘭はその平和・繁榮を要望する以上、斷然太平洋中心主義に新局面を開拓せねばならない自然に置かれてゐるのである。

四、各自治領の英帝國觀

陽、没する處なきと云ふ屋臺の雄大さを誇つて居た英帝國も流石宇宙の自然には抗し得ず、近來はオツタワ再會議の緊急倫敦會議のと恰もゆるんだたがの締め直しに夜も晝も足りない有様であるが、彼等英帝國主義一本槍の人々を焦ら立たせてゐる肝腎の自治領各國は果してどの程度に英吉利中心の帝國政策を信奉してゐる現情であらうか。

各自治領の英帝國觀は今日でも強さに於いて、或ひは何ら變つて居らないかも知れない。然し乍らそれは表面からの事で内面的には再度の變化を及ぼし、現在では從來と異つた立場からして英帝國存

續の必要を認識仕直しつゝあるやうである。

現に各自治領や王領殖民地交互の關係はカナダと濠洲とのやうに對立を示してゐる例もあるが、概して彼我通商貿易の自由さを享受し友好情態に在り、且つ又彼等齊しく現下國際情勢の混亂に際し精々英本國の尻押しをして軍備の強大化を計らせ、自分達はその武裝英本國の陰深く隠れ込んで安全第一を期するに若くはないと考へてゐる。これらの好都合な理由からして各自治領は、差し當り英吉利を舊來通り上座に立て所謂英帝國の鐵傘下に暫時の雨除けする利便を痛感してゐるのである。

昨今何處に於いても下剋上と云ふ事が行はれ易いやうであるが、その最も大きい代表的な例は正に各自治領の英本國に接する態度に外ならないであらう。

英吉利と各自治領とは單に同一の主權者を推戴するに過ぎずその相互關係は平等であると云ふ例のウエストミンスター條令が例へ昭和六年以來嚴存してゐるとは云へ、母國であつた筈の英吉利に對し却つて逆に指令しつゝある各自治領の内情は果して如何なるものであらうか。

從來世界に於ける田舎者と評せられ、且つ又先頃までは吾が日本人と黒人との辨別心さへ持たうとしなかつたのが南阿聯邦である。世界的な爲替安の時潮に際し金鑛地帯に富むその南阿聯邦が、他のカナダや濠洲等に比較して英自治領の中で最も好況に恵まれてゐる事は明白である。處が今までは金鑛とダイヤモンド鑛とが南阿聯邦の臺所を賄ふものと見做されて來たが、資源はその他にも數多くある事を最近に至り實證され、爲めに南阿聯邦の英吉利に對する又英帝國内に於ける立場は一層に強化

されつゝある。

即ち南阿聯邦四州の領域内には凡そ人間の文化生活に必要な金屬はあらゆる種類に互つて埋蔵されてゐる事が明確となり、又農耕産業界も天恵に富み例へ工業本位に進展する曉に於いても、州内人民の食糧問題に對しては些かの懸念すらないやうである。

一方、世界中で第一の恐日國と稱しても恐らく過言ではなからうとさへ云はれてゐるカンガルウ獨占の濠洲聯邦はどんな情態にあるか。

かのヴェルサイユ平和會議に際し、吾が日本の人種平等提案を最も積極的に反對した因縁を持ち、自分で蒔いた種はいやが上にも繁茂し近來の恐日振りは益々甚だしく、英吉利の新嘉坡軍備費も實質上ではその過半を持ち寄つたとさへ噂さの種となつた濠洲ではある。

年額二十一億萬圓に餘る輸出はしてゐるものゝ、その内正に半分以上は神の子たる可弱い羊によつて支へられてゐる經濟界を擁する濠洲聯邦である。古來吾が日本には秋田犬や土佐犬のやうに勇猛果敢な犬を多く見かけるが、どうも牧場で羊の大群を統禦出来るやうな犬種は尠いらしい。今や國際貿易の趨勢は益々一を買つて一を賣り、二を賣るには二を買はなければならぬ仕組を強化に導いてゐる。處が日本は濠洲に對して片貿易の是正を承諾されぬ不當を憤激するの餘り、他に豫め用意するの大計なくして他人目には如何にも堂々たる絶縁状態を叩きつけた。結果は豫期の通り何ら貿易の不當に對し根本的是正も出來得ず、元の黙阿彌となつた。斯る世界經濟の根本を率する大問題に對して、其

場凌ぎを今後も繰り返へすやうな事があればそれは日本のみの不利に止まらず、巡り巡つて有利の管の濠洲自身にもやがて不利の明日が訪れるに相違ないであらう。

英自治領各國中最も人口稠密な新西蘭は、牧畜や鑛山の開發により最近僅か五十年間に急激な發展を告げた國であり、その對外貿易額の在住民一人平均は恐らく世界最高であらうと評せられる程この自治領經濟界は良質さを示してゐる。

各自治領や殖民地がそのやうに好況を告げ勢ひ原料工業から製造工業へまで手を延ばすようになり、結局英本國製造品の各自治領向け輸出の縮少を來たし英本國に於ける産業戰士も漸次その繁榮自治領を目指して、自發的に移動して來るであらうと云ふのが各自治領側の英吉利移民に對する目算であつた。その目算が當つたか外れたかは吾々の批判を俟たずとも、昨今の濠洲施政者の言動が雄辯にその答へを示してゐるやうである。

カナダ自治領に於ける政情は英本國の立場としても或ひは又英帝國主義者の都合から見ても、カナダ保守黨の常に優勢である事を歓迎する。即ちカナダ保守黨は傳統的に英吉利の好伴侶であり、且つ英帝國主義に對する強力な支持者なのである。

従つてその反對派である現興黨のカナダ自由黨は、相對的に親米主義者であり又親日の傾向が強い譯ともなつてゐる。

然しそのカナダにも兩政黨に共通する深い悩みがある。カナダに於ける英佛人民の抗争は今日に初

まつた事ではないが、カナダの關東地方とも見做されるクニイベツク州を根據に、カトリック教を背景とする佛蘭西系人民のカナダ分離ラレンシア共和國の建設運動即ちそれである。

英帝國の自治領各國はそれらの土民を合算しても英本國總人口四千五百萬には遙に及ばず、僅かその六割に當る二千七百萬を數へるに過ぎない。即ち世界陸地の七分の一を占める各自治領こそは、現在の十倍餘三億萬人を收容すべき天命にある事を悟らせなければならぬ存在なのである。

南阿聯邦に於ける歐洲人は二百萬と稱せられ英本國の五倍に餘る領域を擁して居り、又濠洲聯邦は歐洲大陸と殆ど同面積の大を占め乍らその全人口は倫敦市民總數よりも遙に尠い實情に在る。

新西蘭はその面積に於いて英本國と殆ど等しく人口問題に關しては英自治領各國中最も樂觀的な立場にあるのであるが、それでも人口状態は英本國より三十倍も稀薄で僅か百五十萬を育くむにすぎない。

現今の各自治領は英帝國內に在つて何れも席順を定める事なく對等に英吉利國王へ直屬の形式となつて居り、特に昭和六年ウエストミンスター條令の實施以來は國王のみが英本國と各自治領とを結ぶ唯一の契びとなつてしまつてゐるのである。

只ジョンバル祖先の勇敢さと、故國送金のやうな其場凌ぎの風潮を獎勵せず出先利潤の再投資を何世紀となく繰り返へして來た事が益して、彼等子孫の現代英吉利人と、各自治領殖民地とを經濟的に未だ可成りの強さを以つて連結せしめてゐるのである。

近來カナダ・濠洲・南阿の三大自治領の英吉利に對する密接さを比較すれば、南阿聯邦のそれが最も濃厚であり、特にナチス獨逸の舊殖民地要求運動に關しては他の自治領何れよりも眞先に直接間接幾多の影響を蒙る立場に在る事とて、英帝國強化による自己保全の必要を痛感せしめられてゐるやうである。

カナダ自治領は寧ろ機會ある毎に英吉利を指導せんとする傾向強く、親英派のベンネット内閣時代に舉行されたオッタワ會議にすらポールドウキンを初め英吉利代表のお歴々一行はカナダに引ずられた程である。而も現在はその親英派が野黨となつてゐるカナダでもあり、戴冠式會談に追加の第二次オッタワ會議が催ふされるとしても、果して英帝國の實質的強化に役立つか或ひは英本國にどれだけ利益を齎らすか甚だ怪しいものであらう。

濠洲聯邦は先のオッタワ會議に於いてカナダ側にしてやられ、以來その主催者たる英本國は勿論の事カナダに對しても甚だ好しからぬ經濟感情に在る。

従つて南阿聯邦及び南ローデシア自治領のみはその經濟的位置に恵まれ且つ又産業開發の時期を異にしてゐる結果でもあるが、英本國に對して殊によくカナダ自治領に對しても悪からう筈はなく且つ又濠洲聯邦に對してもよい關係を保つてゐる。それ故に英本國として帝國問題に關する限り南阿聯邦は最も頼母しい存在であり、又英帝國主義者達が各自治領に對してどの程度まで締め直して成功するか、その場合英本國とカナダと濠洲との三大勢力間に介在する南阿聯邦の奔走は見るべきものがあら

う。

それ程に英吉利としても英帝國主義者としても重視する南阿聯邦に於いて、とりわけ英帝國主義を強調し指導する者は誰あらう、「三矢一括の力」を信ずる和蘭系のアフリカ人ジャン・クリスチャン・スマッツ將軍その人に外ならない。即ち英帝國の今後如何は、倫敦ならぬケープタウンの動きによつて決せられると評せらるゝのも亦一つの見方に相違ないであらう。

五、英帝國防を揺す人口問題

二百六十億萬圓も投じて増強しようとする英吉利の國防計畫が、豫定五ヶ年の處を例へ三ヶ年半で大要の實現を可能とするやうになつたからとて、それは歐羅巴に於ける英吉利島だけの防禦にやゝ自信が持てる程度の範圍以上には容易に拔んでられないと見られてゐる。

實際問題として海洋遙か彼方に散在する多くの自治領諸國や各殖民地までも、英吉利自身の手で遺憾なく防禦出來得るものでない事は、濠洲政界に於ける英帝國單位の國防論者がやゝもすれば、濠洲島独自の國防論者に押されそうになる一例を見たゞけでも肯定されるであらう。

但し軍艦を何十隻と造り得ても、何十萬の荒鷲や戰車を揃へる事が出來ようとも、それらを全部無人で操縦する事は英自治領各國の現情に即する限り凡そ空想に近い希望である。結局英帝國に於ける

國防上の最大缺點は、領域の大に反し餘りにも人口分布の状態が稀薄すぎると云ふ一事に歸着されてゐる。

廣大な開拓可能地に斧鉞を入れる事も積極的に行はず、唯それらを少數の住民を以つて獨占しつゞける事は無理であると云ふ意識が、近來漸く英帝國各地の朝野識者間にも公然と表明せられるやうになつて來た。

そして人口過剩國からの押しかけ武者の幻想に怖のいた彼等は、移民會議や開拓委員會を矢次早に開催し只管對策取り極めを焦慮しつゝある。

就中、甚だしいのは云ふまでもなく濠洲聯邦であり、歐洲大陸にも等しい三百萬平方哩（英帝國全領域の五分ノ一）を占め乍ら、その現有人口は先住土民のアポリチニス族六萬を合算しても六百七十萬に達せず、而も濠洲全人口の三割五分まではシドニーとメルボーンとの二都市のみに密集してゐる偏住さを示してゐる。

カナダ聯邦も歐洲全土より大きい三百七十萬平方哩の領域に、一千五十萬人を抱擁してゐるにすぎない。

南阿聯邦の領域は吾が日本全土の約二倍に相當する五十萬平方哩弱であるが、土着の黑人種やアジア系諸人種五百萬に對し、歐羅巴系統の住民は百六十五萬に止まり、最近遂ひに黑人自治議會を容認せねばならぬ程刻々に歐洲系住民の前途は悲觀的となつて來てゐる。

新西蘭……英吉利本土にも先んじて英帝國中眞先に婦人參政權を施行した新西蘭自治領は、十萬平方哩餘（吾が本州と九州との廣さ）の領域に、土着住民マヨリ族六萬五千と歐洲系住民百五十萬と云ふ稀薄さであるが、それでも濠洲の一平方哩平均二人やカナダの三人に比較すれば八倍乃至五倍の人口稠密さに在るのである。

然し新西蘭は最少限現在の三倍即ち五百萬人臺への人口増殖を希求して居り、事實權威者達の意向によれば新西蘭諸島の天恵風土は優に二千萬人までの住民を育くむ事が可能とされてゐる。

英帝國が膨脹した前世紀時代そのまゝの英帝國觀念に基づき、英帝國の移民自給自足問題に於いて最も惱ましい現實に直面させられてゐるのは外ならぬ濠洲聯邦である。

濠洲が英自治領諸國を通じ幼児死亡率の最高と云ふ芳しからぬ記録を有してゐる事は別としても、濠洲島へ現今新來しつゝある移民こそは英吉利人ではなく他の英帝國人でもない南歐人が殆どその主位を占めてゐる事實は最早覆ひかくせぬ大勢である。

勿論舊本家筋の英吉利からも濠洲向け新移民が未だに毎年何程か數へられてゐるには相違ないが、その新來數よりも濠洲に見限りをつけて英吉利へ引揚げて行く人數の方が遙に多いのである。

従つて若し伊太利人・ギリシヤ人・ユーゴースラヴィア人等の對濠突進移民が居らなかつたとしたならば、例へ土着民アポリチニス族の喰人性に俟たなくとも、英人移民の差引遞減により殖民開發の天地濠洲島の住民數は刻々に減少の憂き目を見る處であつたのである。

濠洲に於ける英人移民は新來者より引揚者の方が多數である事は、決して一年や二年だけの奇現象ではなく實に昭和四五年の頃から一貫不變の趨勢となつてゐるのである。

南歐羅巴各地からの對濠移民は、渡來旅費の自辨は勿論の事であり、約九百圓の見せ金と濠洲内に確定した就職口を持つて居る者に限られ、而も移民當局の推薦を必要としてゐる。そのやうに成るべく拒否しようとする條件の數々をも突破して、對濠入殖しつゝある伊太利人等の畏氣は強ち看却視出來ないものであらう。

但し彼等南歐人と雖も約三千五百圓の見せ金所有者は、それ程に移民法の拘束を受けないで済むのである。

濠洲を現に支配するアイルランド・ウェールズ・スコットランド系統の所謂英國系統の住民達は、南歐移民の種々な缺點を指摘し排斥しようとし、若し如何なる方法を講じても英吉利系移民の後續部隊を得られなければ、寧ろ獨逸やスカンディネエヴィア等の北歐人を歓迎するに強かずと公言して憚らない。例へば彼等南歐移民は南歐に於ける慣習を固守して容易に濠洲の慣習に融合せず、収入を濠洲島内に再投資する事なく濠洲として見れば全く赤の他人である南歐の故國へ競つて送金し、又激し易く熱し易いと云ふ南歐人の特性を如實に反影し南歐移民の入殖以來刑事事件が濠洲聯邦内に著増したと稱せられてゐるのである。

濠洲への移民が肝腎の英國人によつて支持されて居ないと云ふ意外な近況は、カナダに於いても又

南阿聯邦に於いても同様な成りゆきを呈してゐる。即ちカナダへの移民は英人よりも中歐人や東歐人が絶對に多數を制して居り、又南阿への移民は英吉利島からの人々よりも歐洲大陸からの人々の方が壓倒的に優勢なのである。

先頃催ふされた英帝國移民會議に於いて發表された處によれば、現在英吉利に於ける失業者数は同國可働人口の一割二厘を占めて居り、又カナダ聯邦は最高の一割四分三厘、濠洲の九分七厘、新西蘭の九分四厘、南阿聯邦に於ける歐洲系の住民中には失業者殆ど絶無と云ふ景況である。

結局彼等の一致した英帝國內移民需給の圓滑策として、先づ八億七千萬圓を限度とする移住獎勵基金の設定を提議し、以つて英吉利政府の積極行動を促す事となつたと傳へられる。然し乍ら、歐羅巴大戰勃發の當初頃まで毎年英吉利諸島から自治領植民地への出移民實に二十萬人づゝを數へたにも拘はず、昨今は却つて出戻移民の方が多いと云ふ逆傾向を續けるやうになつたのであるが、果してその逆潮は單なる移民獎勵資金の設定により再び戰前の如き英吉利移民の盛況を復活出來得るものなのであらうか。

否、英帝國の内輪のみで移民の自給自足を最早續行出來得なくなつた眞因こそは、英吉利住民四千萬八百万人それ自體が既に人口遞減の兆を明にし初めた點に在ると見るべきであらう。

洋の東西を問はず個人的に、子を可愛がらぬ親はない。眞に子孫の爲めを念するならば須らく百年の計こそ緊要である。

然るに英自治領各國の既に自身達の足場を築いた移住民の指導者達は、徒らに先天的人種僻見を絶對的なものとして提携利用すべき移民供給者を飽く迄も敬遠せんとし、却つて大局的見地から展望すれば次代の濠洲なりカナダなり南阿なりに於いて發言權を自ら放棄するかの種を蒔いてゐるにも等しい態度を頑として反省する處がないやうである。

敢へて英帝國局外の吾々の批評を要せず、それは新西蘭元總督のブレデスロウ子爵達の倫敦に於ける公言を以つてして充分である。即ち「吾々英國人が勢ひよく集團移住を斷行するか、それが出來ないならば一刻も早く有利な取り決めによつてその移住開拓權を人口過剩諸國へ讓渡するか。二つの内何れを採るか、それ以外に現代英自治領植民地の人口解決策は有り得ないであらう」と。

但し彼等英人大衆には全く氣の毒な事ではあるが、現實には一刻も早く少しでも多く有利な取り決めに爲す處か、寧ろそれとは反對に根本策を棚上げしなるべく波亂の多い問題の手術を少しでも延期し、唯其場を固塗せんとするのが各自治領諸國に於ける現指導階級の共通した態度である。結局そのやうな親の困果を享受させられるのが、威信の名聲のと見得をきららない現實的な善良な英吉利系大衆移住民の子孫である事は何としても否めない。

勿論英自治領諸國には、彌陀の大慈大悲とか可愛い兒達にさせる旅路とてなく、勢ひ移民を吸集して開拓する方便も近視眼になり易いのであらう。(昭和十三年二月・政見往來所載)

六、鑛物資源から見た英帝國

近來あらゆる機會を逸せず屢々帝國會議を開催したりして、ゆるんだたがの締め直しに夜も晝も足りない英帝國。時局柄需要過多の波に乗つてゐる鑛業界から見た英帝國に於ける本國及び各自治領殖民地間の需給状態は果してどんな大勢に在るであらうか。

先づ英帝國の中でも特に、カナダ自治領・南阿聯邦・南ローデシア自治領・印度・濠洲聯邦諸國に於ける財政は、何れも地元の鑛産業に負ふ處多く、且つ又それぞれ倫敦市場に依存してゐる供給状態は未だに相當な根強さを持つてゐるやうである。

金屬類鑛物が英帝國の産業界に非常な重大の地位を占めてゐる事は云ふまでもなく、種別にすれば金・ニッケル・錫・マンガン・クロム・鉛・銀等が擧げられるであらう。

且つ又石炭及び石綿の採掘量も尨大なものであり、鹽・雲母・寶石類の非金屬性鑛産物も英帝國の産業界に可成り重要な位置を占めてゐる。

近來大英帝國の弗箱は、何處に置かれてゐるのであらうか。倫敦の英蘭銀行地下室と答へるのも幼稚かも知れないが、寶庫印度と指摘するのも既に過去の常識と化し去つた。實はつい先頃まで、世界の田舎と取扱はれた南アフリカに在るのである。

他の自治領や殖民地の消極さとは反對に、三矢一括の強力さにたとへて英帝國主義を熱心に支持する南阿聯邦の存在こそは、英本國として限りなく頼母しさを感じてゐる。而もその南阿聯邦は世界の金及び寶石鑛産額の過半を占めて居り、名實共に英帝國……英本國の弗箱振りを發揮してゐる。

世界の全産額の半分を占めるトランスヴァール鑛山の存在は、云ふまでもなく南阿聯邦の財政を強固たらしめてゐる。而も四五年来の金價昂騰につれ、南阿の財界は戦後の不況から蘇生し活況を呈するに至つた。

昭和十年度のトランスヴァールに於ける産金高は、三百五匁を超へ十三億萬圓に達した。十一年度はそれよりも一割餘の増産を告げたやうである。

従つて金の需要如何は南阿の經濟界を左右する根本問題であり、それによつて南阿聯邦に於けるあらゆる産業の死活が決定されると稱しても過言ではない。現代南阿聯邦の根本問題はとりも直さず英帝國の根本問題であり、金の動きは斯る觀點に結びつけて一層意義あるものと謂はれよう。

カナダ自治領の金鑛地帯も好況に恵まれ、世界金産國として第三位を占めてゐる。昭和十一年度は記録破りの増産で九十三匁を超へ、四億一千萬圓に達した。この金額はカナダに於ける鑛産物總計の丁度三分ノ一に相當するものであつた。

濠洲聯邦に於いても、昭和五年以來その生産高を四倍した金鑛は、今やその鑛業中最も重要な地位を占めるに至り年額二十六匁約一億萬圓を算し、濠洲鑛産物總額の三分ノ一に到達する旺盛さである。

但しその内七割餘と云ふ大部分は、西濠洲地方から産出されてゐるやうである。

尙英帝國中他に目ぼしい金産地としては、年産額二十一噸の南ローデシア、十一噸のゴールドコースト、九噸の印度等が挙げられるであらう。

濠洲・カナダ・印度は英帝國內に於ける鉛の主要産出國であり、就中濠洲は英本國が輸入に仰ぐ鉛の約半分までも引き受けて居り、濠洲鉛の對英輸出額は昨年ですら四千二百萬圓に達してゐたのである。

カナダ及び印度は濠洲よりは尠いが、英本國に於ける鉛需要の供給者としてはそれでも北米合衆國やメキシコよりも上位に止まつてゐる。そして印度鉛は年産七萬噸を超へてゐるが殆どビルマ地方にのみ採掘されてゐるやうである。

英帝國中最古の殖民地であり乍ら、カナダからは除け者扱ひされ、財政尻常に困難で屢々身賣り話の出るニューファンド島（吾が朝鮮の約半分・住民總數二十八萬）も、鉛だけは四萬噸を年産し僅に英本國へ義理を立てゝゐる。

世界の銀産界に第三位を占めるカナダの産銀状態は、近來著しい増勢を示し一昨年ですら四百七十噸に近い躍進を告げた。

又印度殊にビルマ地方も銀産地として著名であり、昨今の年産額は百七十噸に達してゐる。その外英帝國內に於ける銀産地としては、南阿聯邦・南ローデシア及びニュージールランドを挙げなければな

らないであらう。

英本國に於ける電氣銅の需要に對し最大の供給者は、世界銅産國として第三位に在るカナダ自治領なのである。英本國に向つてカナダに次ぐ銅供給國は、意外にも近來急激の發展を計つた北ローデシア保護領である。

カナダ及び北ローデシアは最近數ヶ年來、その銅産量を著しく増加したものであり、カナダはそれ外に英本國輸入銅鑛石の三分ノ二までを供給してゐる。

昨年度のカナダに於ける銅産状態は數量からしても金額からしても開拓以來の好記録であり、約十八萬七千噸一億三百萬圓を數へた。

その外濠洲及び印度も銅産國であり、又英吉利の新地中海強化策に重大な役割を演ずるサイプラス島（吾が四國の約半分・住民總數三十五萬）も銅産地としてその名を逸する事は出来ない。

世界中著名な錫鑛山の殆ど全部は馬來聯邦洲が一人占めて居り、一昨年の輸出總量は六萬二千餘噸で二億四千萬圓近かつた。従つて同地方の輸出の五分ノ一は、錫産業で賄はれてゐる譯である。

勢ひ錫が英本國と馬來半島とを密接に關係づけてゐる事は當然であるが、西アフリカのナイジェリア及び濠洲からも英本國向け錫の積出量は相當にあるやうである。

時の變遷と云ふものは錫の歴史にも見受けられる事で、近代馬來半島が世界の舞臺に登場する前までは實に英蘭西端に位する舊獨立國コーンウォール洲が、世界の錫の過半量を産出してゐたのであつ

た。

數年來自治領カナダに於けるニッケル鑛の開発振りは目覺ましく、世界ニッケル總需要の殆ど全部カナダ一手で引き受けて居た。

因に昨年の生産高は六萬二千餘噸を數へ、その額一億二千五百萬圓に達した。實にニッケルはカナダに於いて、金に次ぐ重要鑛産物とされてゐるのである。

亞鉛の産鑛状態から見てもカナダは英帝國中第一位に在り、十四萬噸三千五百萬圓を超へてゐる。濠洲もそれに次ぐ亞鉛産出國で年により變動はあるが大體に八萬噸乃至十四萬噸近くの年産を示し、カナダも濠洲もその大部分を英吉利市場に依存して居るやうである。ビルマの東北地方も亦亞鉛鑛の重要産地で年産約七萬噸、例の大西洋岸のニューファンランドも亞鉛産地として一枚加はつてゐる。

マンガン鑛は英帝國內に相當埋藏量があり、印度・ゴールドコースト及び南阿聯邦は世界的マンガン産地と目されてゐる。然し乍ら世界不況の荒波は、各種の鑛産物の中でもとりわけマンガンに對して慘酷さを極めた。

印度等は最も甚だしく昭和二年當時百三十萬噸の産出を示してゐたものが、不況の爲め一時はその三分ノ一にまで蹴落されてしまつた。けれども昭和八年終頃から漸く回復の途につき、昨年に至り英本國マンガン總需要の七割以上も供給するの活況を呈して來た。

西阿のゴールドコースト（吾が北海道の二倍餘住民・總數三百二十萬）も、四十萬噸のマンガンを

年産しつゝある。

クローム鑛は英帝國中主として南ローデシアと印度に産出し、就中南ローデシア（吾が日本内地と殆同面積・住民總數百五萬）は世界第一のクローム産地と稱せらる。南ローデシアのクローム産鑛は近來逐年増加を告げ、昭和九年當時は七萬五千噸であつたが、昨年は十二萬噸に達する盛況を示した。印度に於けるクローム産鑛状態は、大體に南ローデシアの五分ノ一と見て居て差し支へないやうである。

右の外濠洲のニューサウスウェールズ地方を初め、カナダ・シエラリオネ・サイブラスも亦クローム産地とされてゐる。

英本國が各自治領や植民地に對して肩身を廣くする鑛産物を二つ持つてゐる、鐵と石炭である事は云ふまでもない。何れも主として北西英蘭地方から採掘されて居り、英本國の鐵産高一ヶ年八百萬噸と稱せられる。

英帝國內に於いて英吉利に次ぐ鐵産地としては、年産二百萬噸の印度であり、七十萬噸のニューファンランドも必要に應じて百萬噸の積出しが可能とされてゐる。

カナダ・南阿聯邦・英領馬來・濠洲錫蘭島及びシエラリオネ（吾が臺灣の二倍餘・住民總數百五十萬）等も又、鐵鑛を埋藏してゐる地方である。

英帝國は世界の石炭總採掘量の五分ノ一を占め、その英本國中でも南ウェールズの炭鑛地帯を有す

る英帝國が第一位に在る事は勿論である。炭鑛埋藏量質に世界中の一割六分に及ぶと云はれるカナダも、現今の石炭年産額は一千四百萬噸で英本國には遙かに及ばない。次いで新南ウエールズを有する濠洲聯邦が年産九百萬噸乃至一千萬噸を算し第三位に在る。

尙昭和六年以來産炭量を激減した印度も最近では漸次回復の兆を示して居り、南ローデシア・ナイジェリア・英領馬來・英領北ボルネオ・ブルウネイ國も産炭地として見逃せない國々であらう。

世界の石綿消費は、英帝國殊にカナダ及び南ローデシアの産出に俟つ處頗る多いものがある。カナダに於ける石綿は、主として東岸のクワイベック地方に産し、昨年は大増加を告げ總數二十一萬噸を超へた。但しその大部分は大西洋を渡らず、隣邦の合衆國から需要されてゐるやうである。

英本國も合衆國に劣らず石綿を消費してゐるが、その内三分ノ二までは年産五萬噸近くを南ローデシア及びそれに次ぐ南阿聯邦からの供給に據つてゐる。サイプラスの石綿も、年産未だ一萬噸に満たないが、その名を逸する事は出来ないのであらう。

英帝國内に於ける鑛産物の主なるものとして、以上の外にボーキサイトがある。南アメリカ北端に在る英領ギアナ（吾が本洲と同面積・住民總數三十二萬）が、英帝國中第一位のボーキサイト産地であり、ゴールドコーストがそれに續いてゐる。

英本國は毎年約二萬噸のアルミニウムを需要し、カナダはその八割近くを一手に引受けて供給しつゝある。そのカナダのアルミ工業を維持してゐるのが、英領ギアナのボーキサイトなのである。

雲母鑛は印度に於ける五千噸を初めとして、カナダ・南ローデシア・タンガニカ等にその産出が見受けられる。

尙地方的鑛産物として、黒鉛・アスファルト・鹽類・曹達・マグネサイト・タングステン・コバルト・黄鐵鑛・カドミウム・オスミウム・長石・燐石灰・硫黄・石膏等が、英帝國各地を濕ほしてゐる。以上の如く石綿を除いたあらゆる鑛物資源は、英本國・各自治領・植民地間に相當密接に有無相通じて居り、此の方面から視た英帝國内の不一致さは餘り尖鋭化しては居らないやうである。

但し唯一つ例外であり而も重大性を暗示するものは、世界産油界に於ける英帝國の存在が餘りにも貧弱な事である。北米合衆國が世界石油總産額の六割一分を占めるに反し、大英帝國内の産油は僅か一分七厘に過ぎない。

南米の北方にあるトリニダド島（吾が硫球の約二倍・住民總數三十九萬）が英帝國に於ける最大の石油産地で、世界第十二位を占めては居るが數から見れば米・露・和等とは比較にならない状態である。

因にトリニダドの年産量は約一千二百萬バレル、次いで印度の九百餘萬バレル、ブルウネイ三百餘萬バレル、サラクワ百八十萬バレル。カナダが百四十萬バレルで世界産油の第二十位に在る。これら諸地方の内サラクワ以外の國々は、昭和十年以來増産をつづけてゐるやうである。

即ち石油に関する限り英帝國主義は成り立たないものであり、英本國が萬難を排してペルシヤ油田

の採掘権の確保に務め、又多大の犠牲を拂つて蘭印油田の統制に盡くさねばならない大勢に置かれてゐる。

地中海が伊太利の瀬戸内海化する事を英本國が何故に嫌ひ怖れるか、印度への途・東南アフリカへの途が阻止される爲めでもあらう。然し今一つの重大理由は實に英本國がペルシヤ油田との聯絡を絶たれる點にかゝつてゐるのである。モルタ軍港を見限り地中海東邊のサイプラス島本位に轉じた英吉利の地中海政策は果して何を意味するか。實にサイプラス島の對岸パレスタインには、ペルシヤ・イラクより遙々一千數百哩の油送管が横たはつてゐるのであつた。

現在の英吉利は、ペルシヤ・イラク油と蘭印油とによつてその需要を充たしてゐる。然し近來英本國の識者間にはペルシヤ・イラク油依存第一主義を探り、必要に応じて蘭印油を當にせぬと云ふ動きが察せられる。是は如何なる將來を暗示するものであらうか、英吉利に於けるそのやうな底流を和蘭が悲觀する事だけは明言出來得る處である。

尙、英帝國に於ける鑛物中、南阿聯邦・ゴールドコースト・英領ギアナに産するダイヤモンドは世界産額の八割を占め、又白金はカナダ及び南阿聯邦に産出し、カナダは世界に於ける白金供給國として最大のものである。

七、移民需給を繞る英帝國網の解消

元來日本人の大多數は、日英とか日米とか日ソとか或ひは日獨とか日伊とかの對外直接關係の研究にのみ没頭し、それよりも寧ろ屢々根本的な對日傾勢を醸成するに至る英米なり米ソなり又は英吉利對各自治領諸國なりそれら列強の相互關係に就いては餘りにも無關心な傾向に在る。従つて稍もすればのれんに力押しと終り易いのが、吾が日本對外工作の墜ち入り勝ちな過去とされてゐる。

さきの滿洲事變に際し單に看過して了へば事足りる國際聯盟の動きに對し、額に青筋立てて力み返へつてゐた適例あり。今又在中南支の所謂英國利權の本質を成す國際猶太利權の真相を再検討する事もなく、彼等の便衣にすぎぬ英吉利のみを目標として反英一途に進む動きあり。即ちそれは例へ當の英吉利を押しきる事が出來ようとも、肝腎の本尊は依然として國際政經界に濶歩し他に適當な強國の旗幟を恃み、再び吾々の面前へ障壁を築き直さんとするに相違ない。

或ひは又英吉利は未だに世界陸地總面積の四半分を獨占して居るとして、その蒙を開かんとする運動が英吉利目當てに行はれてゐる。これに就いてもやはり、日本對外工作特有ののれんに力押しとなり易い懸念が多分にある。何故ならば歐羅巴大戰當時までの英吉利ならばいざ知らず、尠くとも昭和十三年時代の英吉利の内實性は最早決して英帝國なるものゝ絶對的戸主ではなくなつてゐるのである。

且つその英帝國と云ふ名稱すらも去る昭和五年のウェストミンスター條令によつて改變せられ、現今では既に名實共に英聯邦と化し、英吉利とカナダなり濠洲なり南阿なりとは凡て對等の立場を享受するに至つてゐる。

兄弟は他人の初まりとか、弟が所有する空地の立入禁止の問題に關し舊戶主の兄へ熱烈に運動仕掛け例へその兄を説得出來たからとて、古い因縁がないだけに兄より身輕で強く成りきつた弟に對しては、今更兄の命令も意志もその儘實現出來るものではない。

故に若し空地獨り占めと云ふ對英叱咤の熱意を有する士あらば、須らくその論鋒を濠洲へなりカナダへなりに轉換し、以つて直接に「開店休業」を樂しむ人々の猛省を促さぬ以上、折角の眞摯な努力も所謂のれんに力押しの際はしに終るであらうと私は信じてゐる。

現今でこそエドガーワレスの怪奇小説やブリーストリーの戀愛小説等が本屋の店先に幅をきかせてゐる英吉利に相違ないが、僅か半世紀の差とは云ひ乍ら五十年前の英吉利讀書界を風靡したものは、彼のサー・ジョン・シーリーの力作「英蘭の膨脹」と云ふ本で、當時苟も英吉利人の誇りを持つ者は競つて反覆愛讀したとさへ傳へられてゐる。

その時代を一貫しこの英吉利島には住民も社會機構も精氣に沸き立ち活力に溢れ、刻々と眞新しい柵を擴めた海外數多の新天地へ向つて續々と進發する何百萬の植民開拓者が輩出されてゐた。實に英蘭人は未だ曾つて他の如何なる人種もよく巡り會へなかつたやうな幸運の大塊に、而も半ば先方から

轉ろげ込まれた形にあつたのである。そして若しこの千載の一遇たる好機を全く掴み活用し利用する事を怠らなかつたならば、現代文明の世界は恐らく英語常用の國々によつて左右され盡くしてゐたかも知れないであらう。

然し乍ら幸運巨濤の襲來に彼等英吉利人の或る者はその好機の眞價を輕視し、且つそれらを充分に活用すべき機會を敢へて路傍に放棄するやうな態度を持續して來た結果、今や英吉利人種は自己の威信名聲の保存を強調するにも拘はらず、世界各地に於いて年來の地歩を後進人種によつて置換され刻々に後退のやむなき趨勢を示しつゝある。而もその傾向は對外的問題のみに限らず、英吉利自身の國內にも表はれて居り、例へばその出産率などに至つても北歐のスウェーデンを除いては歐洲諸國中での最下位に落ちてゐると云ふ近情を告げてゐる。

近來英吉利は巨額の國帑を費ひやして英吉利人民の失業した者達を扶養してゐるにも拘はらず、それと同時に既に去る大正十一年以來好んで英帝國網から脱出し今では一外國人となつてゐる愛蘭自由國の人々而も事毎に反英排英の立場に據る南愛蘭の労働者を、屢々倫敦街頭の荒仕事場に見受けさせられる程に、英吉利人自身は擧つて成るべく手荒な労働や冒險的な仕事から遠去からうとしてゐるのである。

このやうな英吉利大衆の趨勢が英帝國內各地へ直接に及ぼされぬ筈とはなく、極端な一例としてカナダ自治領殖民地に於いてすら往々「働く人入用・但し英人御断り」と云ふやうな求人札が、旅行

者達の眼を敬たせ英人主義の英自治領で英人不歡迎と云ふ單に笑つてはすまされない話題の種とされてゐる。

それ程に英吉利人とカナダ人との身内仲間に在り乍ら、而もカナダの社會からさへも敬遠されるやうな御曹子型の労働者と成りきつて了つた事は強ち彼等英人労働者自身の不行届きとも稱せられず、實に經世指導の立場に在つた英吉利政治家達の過半数が政黨競技に熱中しきつた賜物とさへ評せられてゐる。

且つ又例のマチソン・グラントの「大人種の通過」により自省の警鐘を亂打された米國に於いても、カナダ等と大同小異の傾勢を示して居る。今や尠くとも一片の經濟的見地に據る者は例へ英吉利の企業家自身ですらも敢へて英人労働者の採用を回避し、從來及現在に於いても誠に熱心に英吉利人の移住を希求してやまない濠洲ですら、全然白紙では英人労働者移民を歡迎しかねる實情に直面させられてゐるのである。

近來英吉利諸島に於ける人口密度は、スコットランド・ウェールズ・北アイルランド・マンをも包含するブリテンとしては一平方哩につき約四百人であるが、イングランドのみの密度平均は七百五十人に及んでゐる。

一方カナダ自治領は英蘭密度の二百五十分の一であり、濠洲聯邦の方はそれよりも一層稀薄で實に三百七十五分の一にすぎず、所謂英帝國內の人口分布情態は甚だ好ましくならぬ偏食の弱胃症候を呈し

てゐるのである。

通説によればカナダ國の北部一帯は寒氣に役立たず、又濠洲國の北部半分は地味乾燥にすぎて文明移民に不適當であると云ふ。今それを無條件に織り込んだとしても尙、カナダの現住民は一平方哩當り六人に止まり濠洲は僅かの四人を育くんでゐるにすぎない。

就中濠洲島は英吉利の領有に歸しボタニー灣に於ける英吉利四人の強制殖民を手初めとして、積極的な英吉利殖民が開始されてからでも既に百七十年に垂んとしてゐる。それにも拘はらず未だに三百七十五對一と云ふやうな、英濠人口需給の不成功振りは如何なる理由に基因してゐるものなのであらうか。

例へば濠洲の初期移民群が自然と一階級を作りその優先權を獨占して、近代新移民に餘り活躍の餘地を與へぬと云ふやうな成り行きも確に見逃せない原因の一つであらう。

然しそれにも増して看過出来ない支障こそは近代英吉利人の多くが餘りに安定した生活に慣れ通説の如き俸給者型に鑄込まれ、且つ大都會にのみ於いて満足させる事の可能な習慣を多く持つやうになり、彼等の常識から見れば海外雄飛の開拓者型は正しく前世紀の遺物扱ひされ時代遅れの冒險思想として全く葬むられ去つた状態に在る。

英吉利に於ける都會集中の弊は今に初まつた事でなく既に三百三十年前のジェームス一世時代、人口二十萬（當時英蘭總人口の約二十分の一）の倫敦が早くも住民集中禁止令の槍玉に擧げられた程で

あつたが、其後都會集中の趨勢はあらゆる阻止線を突破して益々強大となり現在の太倫敦市（約九百萬）のみでも英吉利總人口の五分ノ一を抱擁してゐる。

このやうな傾向は分散殖民地であつた筈の濠洲にも何時しか顯著となり、例へばシドニー市などはニュー・サウス・ウェールズ州總人口の實に六割近くを一手に集中し濠洲指導者達の深刻な憎みの種とされつゝある現状を示してゐる。

英帝國機構の行き詰りに對し、近來英吉利に於ける經濟方面の權威者達はその打開策として何れも消費奨励を稱導しつゝあるやうであるが、それよりも先づ第一に緊要な事は如何にして英吉利が昨日まで撓みなく世界の王座へ向つて精進しつゝけたかを慎重に省察すべきであらうと思ふ。

英吉利が前世紀を恰も吾が物としてあれ程の大飛躍を爲し遂げた事こそは實に、その頃の英吉利社會全體が勤勉であり簡粗な日常生活に甘んじ而も儉約による反覆企業投資の遞増を肯として勵んだ爲の繁榮に外ならず、斯くしたればこそ一國を擧げて世界の仕上工場の役目を果し且つ中央市場の地位を自と獲得出来たのである。

由來發展の氣運に直面しつゝある國家社會には一樣に理想主義的風潮が可成り強く漂はされてゐるものとせられるが、膨脹時代の英吉利社會もその例に漏れず、「上帝の御名に於いて何ものかを地上に生み出さねばならぬ」と叫んだカーライルや、又は「太陽に従つてその歩を進めよ」と謡つたクラウ達が齊しく尊敬崇拜の目標とされてゐたのである。

現今英吉利に於ける經濟學者達の多くは、前述のやうに世界の前途はその生活程度の高い國々に依存するであらうと説き、以つて消費の増加政策を萬能薬と稱導しつゝある。然し乍らそれらの實際經過に徴すれば、確に消費奨励策は或る程度の効果を示しては居るものゝ、同時に全く不可避的に最小限度必要の消費をすら漸次至難とする他面をも副産しつゝある現實は否定出来ないのである。

其處に、絶對的供給者の立場に在る英吉利と、恒久的需要者の地位に置かれた濠洲・カナダ・南阿等各自治領とを繞る移民需給問題の悩みが横たへられてゐる。

即ち現今、英吉利移民の需要者たる各自治領側に就いて詳察すれば、近來英帝國主義者の一派が最も焦慮措く能はぬ處の英帝國機構内に於いて交互の移民自給自足を爲しかねてゐると云ふ實勢が明瞭となるのみで、尠くとも移民問題に關する限り英帝國なるものは既に解消された過去の事實であると云ふ事が出来るのである。

先づ濠洲聯邦國に於ける昨年度の新來移民の差引實數は、意外にも英吉利移民は引揚げ數の方が遙に多く、實に英帝國から見れば赤の他人である南部歐洲大陸各國からの人々によつて支持されたのである。

地中海沿岸の希臘國がその一ヶ年間に九百人の移民を濠洲へ送り込んだ事は、近來親英的な希臘として敢へて奇觀視せぬとしても、他にユーゴスラヴィア移民の四百人がある。

それのみに止まらず最近事毎に對英利害の不一致を示す伊太利から九百人の移民が、敢然として英

吉利の親族たる濠洲へ植へつけられ、是は決して一時的の現象ではなく今年度も去年と大體同様な趨勢に在ると云ふ實情は、英吉利本國に於いても知らぬ人々の方が多し有様なのである。

勿論濠洲に對し英吉利からの移民も相當に數へられたものではあるが、同期間に逆に濠洲から英吉利へ引揚げて了つた移民數の方が遙に多かつた。即ち一ケ年概算英吉利からの對濠移民五千八百名に對し、濠洲からの對英引揚移民實に七千二百名を數へ、引揚移民十三名に對し新來移民十名の割で補充どころか減少の一方である。従つてこの奇異な現象を誇評するにせよ、對英情勢に關する限り近來の濠洲聯邦國は勇壯にも移民の逆輸出を行つてゐると云ふ事にならう。

英吉利人の血統を曳く濠洲移民の總數は上述のやうに、南歐羅巴各地からの移住民漸増と全く逆比例して、茲數年來遞減の大勢を示してゐる。

あれ程に潔癖な白人神聖を固執する濠洲聯邦も現實の前には理想を棚上げし、實際に歐洲大陸中では一段下位に見做されてゐる南歐人によつてその場凌ぎをやつてゐるのである。

移民の自給自足問題を繞る英帝國一單位の破綻は強ち濠洲自治領對英吉利本國の組み合わせのみに限られた事ではなく、カナダ自治領對英吉利の場合を検討しても全く首肯せしめられる處である。

即ちカナダへは最近の六ヶ月間に約三千名からの新移民が入殖したのであるが、その内本家筋の英吉利諸島から渡來した英吉利人は全體の三分一にも達して居らなかつた。

彼等新來移民の大多數は實に舊、匈牙利系統のルセニア人・マギル人・クロアチア人・スロヴァ

キア人等であり、現在までチエツコスロヴァキアの國籍を持つてゐた人々であつた。

或ひは又、英帝國諸邦を通じ最も望み多く機會に恵まれてゐる新天地と稱せられる南阿聯邦に於いてさへ同様の成り行きは見受けられる處であり、昨年度の新來移住民數は一萬を越へ南阿殖民史上の最高記録に達したが、やはり英吉利及び英帝國各地からの來住民を綜合しても全體の四割にすら達しなかつたのである。

故に濠洲への現状移民の殆ど全部は南歐人によつて維持せられ、カナダへの移民の大半は中歐人によつて行はれ、南阿への移民の過半數も英帝國側から見れば外人に相違ない歐洲各國人によつて占められてゐると稱しても決して過言ではなくなつてゐるのである。

即ち開拓先驅者として大英膨脹史上に輝やくジェームス・クックの濠洲に於ける、或ひはセシルロイツの南阿に於いてユニオン・ジャックの爲めに切り開かれた大道は、今や彼等の意に反し専ら南歐人や中歐人へのみよつて進み進まれてゐる。否、それすらも僅にクックやロイツの足跡に雜草が老ひ茂つて了ふ事を防ぎ止めてゐる程度の少數移民を、送り込んでゐる始末にすぎないのである。

然らば、英帝國側から見れば何の忠誠關係にもない外國人である彼等南歐人や中歐人が、何故に現状英帝國移民の最大供給者となつたのであらうか。それは單に南歐や中歐の人々の生活水準が英吉利の人々より低いと云ふ一事に基づいて居り、以つて英帝國各自治領諸國の空地へ流れ込む事が可能とされてゐるのである。但し前記對英移民の中歐人種の或る者は明に蒙古民族に屬して居る事を、英自

治領諸國の識者は知つても知らぬ振りをしてゐるやうであるが、早晚再認識せしめらるゝ時機の到来は不可避の事と思ふ。

即ち前述のやうな實例こそは例へ一國の經濟組織が發達し自己の優位保持の爲め萬遺漏なき制度等の複雑化を計つたとしても、裸一貫の生存抵抗力のより強い移民には苦もなく壓倒されて了ふ事を雄辯に物語るものに外ならない。須らく自己現在よりも生活水準の高い又は高くする事の比較的容易な天地に向つて進むのが、古來移民成功の要諦とされてゐる處であるがその原理は今以つて何らの變化をも告げては居らないのである。

「若し吾々英國人の手によつて例へ何らかの特別處置を講じてなりにせよカナダや濠洲等を開發しきれなければ、如何なる嚴重な制限を設けて居てもそれら英自治領各地は外國人によつて全く開拓權を奪はれて了ふ現實に直面させられるであらう。」とは曾つて倫敦の自治領大臣マルコルム・マクドナルドが述べた言葉の一節であつた。

然し乍ら今日に至るまで英吉利と各自治領殖民地との間に於ける移民需給の平衡化に就いて、倫敦政府としては何ら實質的な措置なり對策なりの實施を見ぬ有様である。英吉利當局が斯る大問題に對し關心を持たぬ譯では勿論なからうが、彼等として差し當り第一級の緊急重大問題としては取扱ひかねる都合に置かれてゐるのである。

それに反しカナダ・濠洲・南阿等の自治領諸國は、例へ時局柄の國防問題を論議するにしても人口

の餘りに稀薄すぎると云ふ現實が如何にしても蓋ひ通せぬ弱點であると指摘され立證されて居り、とりわけ濠洲聯邦國の如きは甚だしく、移民問題の懸案解決是非こそは自治領死活に關する緊急問題なりとし、英吉利諸島からの英人系統移民の積極的來住政策の確立を要求しつゝある。

従つて彼等英自治領側は期せずして、國防問題即ち人口問題なりと痛感せしめられ焦慮の念やる方なく、濠洲の人口密度より七倍も稠密な新西蘭自治領に於いてすら、英帝國機構内に於ける移民の自給自足問題の具體案取り決めのみを目的とする英帝國會議の開催を要望する叫びが昂められつゝある程である。

けれども實際問題として、前述のやうな所謂文明社會の訓練を経た英吉利労働者……英人移民を多數求めいざ開拓企業に従事させる段取りとなると、勢ひ彼等による新生産物の原價は割高とならざるを得ず、是が自治領側として重大な危懼を感じてゐる要點である。

且つ積極的に英吉利からの移住民を求むる事となれば、それら來住者に何らかの形式に於いて英吉利社會の最低よりは幾分なりとも味のある生活保證を豫め與へなければならぬのである。

差し當り自治領側として考へに浮び易い案は、彼等英吉利からの新來移住民による新生産量だけ英吉利本國が輸入割當を増加して貰ひたいと云ふ事である。甚だ計算づくめのやうではあるが此の方法にでも據らぬ限り、自治領側としても英人移民の生活保證までは敢へて行ひかねる立場にある。

然し乍ら英吉利側としては現在ですら外國品を必要以上に阻止し制限を加へ、そして英帝國內の生

產品の輸入を最大限に行つてゐる事とて、最早これ以上如何に無理をしても自治領側からの輸入量を更に増加せしめ得る餘地のあらう筈はなく、而も増加輸入の保證などに至つては全く考慮だに及ぼされぬ話なのである。

英帝國に於ける英人移民の積極的獎勵策はその主旨は相互に認識されてゐるのであるが實際問題としては結局以上のやうに、英吉利も自治領側も何れも保證を爲し得ない爲めに行き悩んで居り、而もその解決は従來の英帝國機構に根本的な整理を斷行されぬ限り永久に期する事が出来ない因縁に絡まれて居るのである。

南歐羅巴各國からの移民問題が既成層を固守する現濠洲當局者達を絶えず焦慮させてゐる事は寧ろ當然でもあり、例へば南濠洲政府のバトラー首相等も「彼等南歐からの移民は濠洲の將來に深刻な社會對立状態を惹起するであらう、若し吾々が遂ひに英本國からの移民を受け入れる方法が立たないならば、南歐人は後廻しとして先づ北歐からの移民を眞剣に考慮すべきではないか」とも公言してゐる。即ち彼等は、同じ歐洲大陸の人々でも概して熱情的な評せられてゐる南部歐洲人よりも、概して重厚な且つやゝ英人の風習に近い北部歐洲の方がまだましであると云ふ態度を示してゐるのである。従つて現在までの情勢では、濠洲に於ける實質的な開拓工事こそその好まざるにも拘はらず希臘・ユーゴスラヴィア・伊太利の移民達に依存する處多く、彼等白色濠洲主義者達の意中に描かれる英吉利人に次ぐスウェーデン人や獨逸人の移民すら希望通りには實現して居らないのである。

英吉利に於ける人類學の權威者サー・レナード・ヒルは先頃も、「英吉利人種は向後三年以内にその人口膨脹期を全く通過し去り、而も近來の趨勢が激變せざる限り一世紀後には僅か五百萬人（現在の英國總人口は約四千五百萬）を維持するにすぎなくなるであらう」と説き、英吉利朝野の注視を喚起しつゝある。

處が皮肉にも、英吉利諸島に於ける人口漸減の兆しは必ずしも彼等人間にのみ限られた成り行きではなく、英國在棲の動物類の方が寧ろ人間以上に幻滅の悲觀説を裏書きしてゐるのである。就中豚の類ひに至つては英吉利人種の減退に數年も魁けて、既に去る昭和十年度の四百萬頭を最盛期とし翌年は下降を初め昭和十二年にはその減退率を増し、漸く三百六十萬頭臺を數へてゐる近狀である。

吾が日本に於いては問題は勢ひ別ともならうが、尠くとも英吉利社會の生活に關する限り豚は馬鈴薯や小麥と並び稱せられ、陸海空の三軍と共に國防第四軍として重要視されてゐるものである。従つてこの英國豚の人口ならぬ頭數の減退振りは、英吉利として非常時の國家安全性に對する一つの危険信號に相違ないのである。即ち豚は一朝有事の際に於いて、利用價値充分な同盟國と殆ど同程度の實効果を發揮するとさへ英吉利では通稱されて居り、生肉の豫備兵でもあり又廢物から有用食糧を生産する事の出来る最も高速度の機能を具備する存在と見做されてゐる。

そのやうな英國島内の動物類の減退振りは豚のみに止まらず、牛及び羊の類ひも亦大同小異の傾勢を示して居り、彼のインゲ僧正も屢々稱導したやうに元來牧畜國として理想的な英吉利島は、産業革

命以來未だに敢へてその自然に逆行し豊富な草原地帯を今や收拾出来難い程荒地となるに委せてゐる。但し廣大な草原地帯を再び現役に戻し豚や牛を増殖させる事は人間の人口問題と異り強ち困難とも云へないのであるが、人件費の他國より遙に嵩張る英吉利として自國內の牧畜を復興せしむるには是非共それらの輸入關稅を飛躍的に引き上げなければならず、それは複雑な互惠取り極めによる對自治領殖民地及び外國との貿易線上に大波瀾を招き、且つ又國內供給價格の値上りを當然に惹起し忽ち消費大衆の反對を勃發せしむる爲めに、例へ豚や牛の問題とは云へ英吉利人口問題と同様に應急の策は容易に行はれ難いのである。

即ち英吉利本國が自國産より遙に安價な海外産の豚や牛を輸入し消費してゐる事こそは、濠洲やカナダの英自治領各國が本家の英國産よりは格安な他國産の勞働力を輸入するの餘儀なくされてゐる大勢と、一脈相通するの原理を有してゐるものとも見做されるのである。

そのやうな解釋からすれば、英吉利諸島の存在を眞に享樂してゐる者こそは英吉利の住民自身ではなく、其地へ多大の生産品を供給しつゝあるデンマークなりオランダなりアルゼンチンこそ英國の現代社會を眞に楽しんでゐる者であると云ふ事が出来る。

カナダの開拓天地に生き甲斐を見出しつゝある者亦外人たる中歐人壓倒的に多く、濠洲開發の第一線に伸張せんとする者亦英國とは無縁の衆たる南歐人に殆ど獨占せられんとする近情は最早英國主義者と雖も否定出来ぬ現實となつてゐる。

依つて當然に反問の聲あり、「然らば實質上、誰の英吉利であり誰の自治領であり何者の英帝國であるの乎」と。

その答へは好むと好まざるとに拘はらず、英吉利人の英吉利に非ず、英吉利人の自治領に非ず。勿論カナダ人の英帝國にも非ず、濠洲人の英帝國でも最早有り得ない。即ち極言すれば、デンマーク・オランダ・アルゼンチンの人々の爲めの英吉利諸島となつて居り、又中歐人や南歐人達の英自治領諸國と化しつゝあるのである。

第二篇

英本國の現情一瞥

英吉利國防の第四線問題

關稅障壁と英國朝野の體驗

英吉利政界を背負ふ人々

英吉利政界の選舉費

事變と日本の對英認識不足

一、英吉利國防の第四線問題

歐洲大戰の勃發當初英吉利はその龐大な海軍力を活用し、獨逸側の中歐諸國の糧道を絶つ事に殆ど成功した。處が程なく皮肉にも獨逸側で數多の潛航艇を急造し、復讐的に英吉利島を包圍し英國住民を餓死に導く戰術を以つて迫り寄つたのである。そして歐洲大陸から僅か十分間で到達出來得るこの小島に四千五百萬もの住民を抱へてゐる英吉利自身の食糧問題が、如何に危険に曝されるかその時になつて痛切に體驗させられたのであつた。それ以來英吉利は國防問題と關連し、如何にして英吉利島内の食糧自給率を引上げるか絶え間ない研究が續けられて來た。

英吉利は平時に於いて毎日五萬噸の食糧を海外に仰いで居り、それらは八萬哩に達する海路の危険を犯して運搬されなければならなかつたのである。

かの歐洲大戰を通じ各國はそれ／＼必要に迫られた強さで種々の發見に成功した。例へば獨逸は石炭の液化や空中からの窒素吸集に又伊太利は羊毛の輸入杜絶に遭ひ牛乳から毛糸を合成する事に成功したのである。戰時中そのやうな必需品の缺乏は列國の科學者を半強制的に鞭達し、計らずもそれは今日幾多の利益をも齎らせて來た。歐洲戰争當時から引つゞき研究されその成果が昨今漸く表はれたものも尠くはなく、例へば食糧脅威の英吉利に於いてリバープール大學の化學教授は遂に昨年に至

り水と炭酸瓦斯からの合成砂糖に成功したのである。又日常不可缺とする食糧各種の精分のみを抽出し錠劑化する事も、昨今では殆どその理想點にまで到達したと傳へられてゐる。

戰争と云ふものは例へ戦術が發達し兵器が進化しても古今一貫する共通點を持つてゐる。それは如何にすれば敵國に對する外部からの食糧及び原料品の供給を杜絶させ得るかと云ふ事である。従つて國內需要に對しては充分な國內供給力を備へて居らなければならぬ。この一事は誠に單純な問題のやうでもあるが、英吉利に關する限りその地理的位置及び近代戰術とが最も至難な問題化してしまつてゐる。航空機關の進歩により英吉利島は多大の危険を感ぜしめられ、而も戰時第一の不可缺條件とされる自給自足の可能程度は凡そ世界中最悪の情勢に在ると評せられる英吉利なのである。

英吉利政府は十五億磅の軍備充實策を實施するに先立ち既に昭和十一年度初め、戰時食糧原料品供給委員會を設置し、倫敦大學經濟學部長ウキリアム・ベブリツヂを委員長とし只管英吉利國防の所謂第四線の充實完備に努力しつゝある。

元來英吉利は世界のあらゆる生産國から毎年十億磅を越へる半製品及原料品を輸入に仰いで居り、それらを積載した十二萬隻の船舶が英吉利諸港に到達し、一日平均五萬噸の食糧品と十五萬噸の原料品とを陸揚げしてゐる。

今それら英國輸入品の内、特に主要とされてゐる種目及び概數をやゝ平常年度に等しかつた昭和十年度に就いて見れば次の通りとなつてゐる。

先づ食糧品では麥粉及雜穀類が壓倒的に多く一千十萬噸に達し、百五十萬噸の砂糖それに次ぎ乾果物は十五萬噸を數へた。尙飲料用品の紅茶四十萬噸・ココア七萬五千噸・コーヒー一萬五千噸と云ふ割合は、如何にもよく英吉利人の紅茶愛飲状態を表はしてゐるやうである。

燃料類の筆頭は云ふまでもなく輕油の十一億萬ガロンで重油も二億五千萬ガロンに達し、石炭を過分に持ち乍ら液體燃料に就いては絶對に海外依存の域を脱しきらぬ英吉利の弱點を此處にも窺ふ事が出来る。

金屬類では鉛の三十四萬噸・銅の二十六萬噸・亜鉛の二十一萬噸・錫の二萬一千噸が著しいものであり、他にゴムの十一萬噸及び棉花の九十萬噸等が重要輸入品とされてゐる。

これら輸入品の内、生産地の特殊事情に押されて多量の手持ちを餘儀なくされるゴムだけは、國內需要量の一ヶ年乃至一ヶ年半に相當する貯藏量を擁して居るが、他は殆ど全部入用買ひの状態をつけて來て居たのである。例へば鉛は二週間の需要量にも充たない八千噸前後の貯藏を有するにすぎず、亜鉛も通常七千噸の手持ちを標準とされて居り、人間及び機械の第一食糧品たる小麥粉及び石油でさへも六週間分程度の餘裕しか在庫されて居らない情態である。

英吉利農務當局は歐洲大戰以來補助金制度を設け小麥の國內増産計畫を立て、四割の増産に成功し今日では百九十五萬噸を八十二萬町歩の國內農地から供給するやうになつた。然し乍らそれでも尙その三倍半に相當する六百九十萬噸は輸入に俟たねばならず、結局英吉利は小麥に對し漸くその自給量

を國內消費の二割五分までに引き上げて來た譯である。尙英吉利輸入の小麥六百九十萬噸の六割五分は英自治領各地より、殘餘は米國・アルゼンチン・ダニエーブ沿岸諸國よりの供給によつてゐる。

但し英吉利當局の増産獎勵も燕麥に就いては可成りの好成績を挙げ歐洲戦前の大正二年當時には九十萬噸を輸入してゐたが、現在では國內の六十二萬町歩に百萬噸を收穫し僅か十七萬噸を海外に求める程度となつた。

大麥は約二十年前には百二十五萬噸乃至百七十五萬噸の供給を海外から受けてゐたが、現在では三十七萬町歩の國內農地を拓き七十五萬噸を自給し輸入必要量を八十五萬噸に引き下げて來てゐる。

英吉利農村は近來歐洲大戰前に比較して、機械化の影響もあり馬の利用度を減少し、現在農村全體の持馬數は九十萬頭以下になつたと云ふ。且つ又軍隊も機械化し爲めに馬匹に對する食糧問題は甚だしく輕減されて來てゐるが、それに反し機械に對する食糧問題が英吉利では特に重大化しつゝあるやうだ。

實に最近八年間の短期間に英吉利の石油重油消費量は倍加しその止まる處がない。ペルシヤに於ける七千平方哩の油田採掘權を血み泥になつて獲得した事などは、英吉利が如何に石油の國內消費激増の對策に腐心してゐるかを物語る一例にすぎない。

又當局は石油重油に輸入税を課し國內に豊富な石炭の液化工作を獎勵し、漸く英帝國化學工業會社によつて四千五百萬ガロンの國內供給を見るやうになつたのではあるが、それすらも平時に於ける國

内總需要の三分七厘を充たすに止まり九割六分餘は依然としてイラク・ベルシャ等からの供給に俟つ
情態である。

若し英吉利がその需要する液體燃料の全部を、國內の石炭液化によるとすれば、先づその石炭液化
の設備だけに七億萬磅(約百二十億萬圓)と云ふ巨額を必要とするのでこの計畫は未だに躊躇されて
ゐる。但しその賛成者の説によれば、鐵道企業ですら莫大な資金の三分ノ一は頭から固定化させてゐ
る程であるから、合成油の設備も鐵道の例にならつて斷行した方が將來の健實性を確保する爲めにも
緊要であると稱せられてゐる。

あらゆる食糧問題の自給自足に悲觀的な英吉利島にもたつた一つの例外があり、自給に止まらず餘
分を逆に輸出してゐる。それは外ならぬ鱈や鯨などを主とする漁撈の部門で、英吉利の漁獲總量百萬
噸と稱へられる内五萬噸は生魚のまゝ十七萬噸は燻製品として歐洲各市場へ供給されてゐるのである。
英吉利大衆の眞に腹のたしとされる馬鈴薯は、國內十九萬町歩を芋畑にして約三百萬噸を收穫し稍
々自給の域に接近しつゝある。

鶏類は過去十ヶ年に倍加を計り今や六千萬羽を越へ四十億萬個の鶏卵を生産されるやうになつたが、
それでも平時必要量の半數を充たすに過ぎないと云ふ。

現今英吉利の農村に於いて補助金制度により生産量引上げを行つて居るものは小麦・砂糖大根・豚
肉牛肉・鶏卵等であるが、バクー國內消費百萬噸の半數及びチーズ十九萬噸の七割餘は未だ輸入に仰

ぐ始末である。

羊毛原料はその國內需要の一割六分までを自給して居るが、羊肉は全く輸入にのみ俟ちその量は毎
年三十五萬噸前後に達してゐる。又果物野菜用として國內に約四十二三萬町歩の耕地を持つては居る
が、自給率は誠に低いものである。たゞ砂糖大根は去る十ヶ年間に補助金により七萬五千噸から五十
萬噸に飛躍を告げたが、それでも必要量の三分ノ一を漸く自給し初めた程度にすぎない。

石炭に關する限り英吉利島住民は、何ら欠亡の心配無用であらう。現在英吉利に於ける炭坑夫總數
は八十萬人と稱せられ、二億二千萬噸を採掘しその内毎年約二割三分を輸出に振り向けてゐる。

但し國防第四線の充實に關し最も重要視されてゐるのは港の問題であり、從來英吉利として餘りに
倫敦港に依存しすぎてゐたのであつた。

倫敦が英吉利の持つ偉大な貯藏庫である事は餘りに明白であり、累計七億萬圓の巨費を投じたその
港口には毎年六萬隻の船舶が到來し不況年度に於いてすら五萬隻を下らなかつた。そのドック面積は
幾多合して一千七百餘町歩と稱せられ埠頭の延長四十五哩、そして埠頭倉庫は百萬噸の貨物保管を可
能としてゐる。

倫敦は英吉利島に供給されるあらゆる貨物の半數を取扱つては居るが、空襲戰術の發達した今日例
へ大倫敦をそつくり空中から包み込む金屬エプロンの大風呂敷を用意したとは云へ、一朝戰亂勃發の
場合は見限らなければならぬ位置に置かれてゐる。

そして今や歐洲大陸とは背を向けてゐる英蘭西海岸諸港への依存説が力を得て、リバープールや從來石炭輸出の専門港とされてゐたウエールズ南端のカーディフ港邊りが近來とみに面目を新にしつゝあるやうだ。

何れにしても英吉利島に於ける食糧品及び原料品の絶對自給自足は期待出來得る筈のものでなく、爲めに或る識者達はその對策として絶對必需品の空輸常道化を最も實現可能性あるものと見て稱導しつゝある。

然し乍ら例へば貨物船一隻が運送する同量の小麦を空輸するとしたならば、現状に立脚する限り尠くとも二千臺の航空機を必要とする。従つて大貯蔵庫施設以外現在の英吉利に於ける戰時食糧問題を完うせしめ得る途がないのである。

今や英吉利は調整大臣までも必要とする程に陸・海・空三線交錯して機械化強行に火花を散らし、貯蔵施設の普遍化亦それに勝るとも劣らぬ凄壯さを示し、以つて英吉利島の所謂國防四線はそれ／＼刻々に強化されつゝある。

二、關稅障壁と英國朝野の體驗

最近世界を通じ各國の對外貿易界が等しくその關稅高障害を脇に見そらせて、頗に活況を呈してゐ

る事は何人も否定出來ない現實である。然し乍ら果してそれがどの程度までに眞の國際貿易の復興を直指して進んでゐるかどうか、是又何人も見究め難い情態にある。即ち近來の國際貿易界旺盛の根源を爲してゐる需要消費の激増振りは、直接にせよ間接にせよ各國何れもその戰時或ひは準戰時經濟に立脚してゐるからである。

例へば昭和十一年度の世界經濟界に於ける量的總貿易は昭和十年度に比し確に約三分の増加を示してはゐるが、それでも歐洲大戰後の最良繁榮年度と稱せられる昭和四年に比較すれば未だに一割五分近くを下廻る情勢にある。

そして或る國々は多大の犠牲を惜しまず自給自足の確立策に傾倒し、或る國々は全力を擧げて對外供給第一策の維持に躍氣となつてゐるやうである。前者の好例にソヴィエト聯邦及び獨逸があり、後者には吾が日本を初めチェコスロヴァキア等が數へられる。就中ソヴィエト聯邦は自給自足強行軍の最も著しい例であり、その國內生産高は昭和四年に比較して三倍に飛躍してゐるにも拘はらず、輸出高は昭和四年當時の半分以上となつてゐる。

日本に於ける生産高は昭和四年度に比して六割五分の擴張振りを示しては居るが、對外貿易額は二割五分の増加に止まつてゐる。この差額四割の内部に、例の關稅高障壁突破に拂はれた犠牲が包括されてゐると見做されるやうである。

一方英吉利に於いては昭和四年以來三割の國內生産増加を告げてゐるが、對外貿易も三割四分近く

の減退を示してゐる。昭和五年以來英吉利はあらゆる種類の防塞を設けてとりわけ自治領殖民地以外からの外國品輸入に、極力壓制する手段を講じたのである。然るに其の後の實勢は特に最近の二三年以來、高度の障壁を超越して輸入の激増となり、多少の輸出が増加される程度では全く均衡が取れない場面を展開しつつある。

従つて英吉利經濟界の指導者間にもその趨勢を見究め、再び國際貿易に對し各國との提携政策を探る方が實質的に有利であるとする體驗から得た轉換意向が強められて來たやうである。即ち英吉利に關する限り保護貿易政策の惠澤は、既に一昨年暮頃まで、出盡くした感が強い。

そして彼等英吉利當事者達は競争相手國の低賃銀勞働問題を取り上げて直接に攻撃する事の是非を反省するまでに落着きを示すやうになつて來た、誠に大なる進歩と云はなければならぬ態度に變り初めてゐる。

とりあへずその反省の第一半を簡略に述記すれば次のやうに再認識を表現してゐるやうである。

即ち近代産業はあらゆる部門に互つて機械化が行はれて居り而もそれら機械の殆ど全部は自動的となり、この傾向は年々甚だしくなつて行く。従つて自動的な機械化は當然に固定資本を増加し、企業資本に對する重大性は他の何れの要素よりも強められ、それら機能による生産高如何により生産費率が左右される事となるのは明白である。

一方英吉利に於いて例へば百萬圓の投資による生産工場が一週四十四時間の勞働をするとして、そ

の生産總額は一週平均一萬圓と云ふ大勢にある。これに反し日本に於いては例へその規模及び水準を英吉利のそれと同様に設備するとすれば、どうしても割高につく筈である。且つ同能力の機械を使用運轉する事により一週當り三萬三千圓に達す生産額を算し、この日英兩工場を生産比率は三三對一〇となり日本工場の十割操業に對し英吉利工場は結果に於いて三割三分の操業しか行はなかつたと同様である。換言すれば日本商品の低價活躍は決して低賃銀又は生活水準の低いと云ふ事のみ起因しては居らない。近代化した工業程その生産費は、賃銀の影響弱まり反對に機械設備等の固定資本の如何によつて左右せられる傾向が強くなる。

例へ日本の勞働力が驚威的に低廉なものであるにせよ、それが最新國際商品の原價を占める部分は極めて僅少なものとなつて來てゐる。日本商品の低廉な主因こそは實に、生産機能の間斷ない繼續的操業本位に在りと見做さなければならぬ。

機械を休みなく動かさしあらゆる施設を空費させぬ……何故それが主因に擧げられるのであらうか。

即ち現在まで日本の工業設備及方法の大部分は歐羅巴から搬ばれ又は讓渡を受けたもので、勢ひ歐洲の地元位に在る英吉利の設備よりは日本の方が遙か割高についてゐる。従つて若し英吉利人側が日本よりも幾分なりと割安に採算出來てゐる生産機能をして、日本のそれらと同様に間斷なく効率的にさへ活用なし得たならば優に日本商品と五角の競争も可能となり、又一方的にでなく兩者角逐し合ひ向上の途に進み得る筈であると。

以上が英吉利に於ける對日關係識者達近來の、日本商品投資説に對する最終の答案と見做されてゐるやうである。

一方又彼等は相手國の低賃銀による所謂勞働力のダンピングに對しても、從來常に採つてゐた眞向からの非難や攻撃そのものが如何に無益であり、且つ何れの投資抑制策も恒久的な効果のない點に思ひを致し、換ふるに相手投資輸出國の生活水準引上げ工作を側面から劃策し、以てその生活程度を例へ積極的に好まぬにせよ無理矢理に自國と同じ程度まで釣り上げさせると云ふ事こそは、國際貿易上公平な機會に立脚する相互の發展をもたらす唯一殘存の進路であると信するやうになつて來たのである。

先頃或る席上での英國首相の演説にも、國際間の自由交易問題に對し磨擦の起り易い二國間の相互均等策の取極めこそは平和確保の第一要件である、と云ふ意味が強調されてゐた。例へそれは懸け聲だけでもせよ、七八年前の英吉利に比較すると隔世の感なきを得ない。

即ち濫りな關稅障壁の築造は、結果に於いて徒らに自國をして好んで狭い局限した貝殻の中へ押し込めやうなものであると云ふ實際を、英吉利の朝野齊しく體驗したのであつた。

そして從來投資國に向けてゐた低賃銀投資等の抑制に對して鋒先を收め、代りに各製産輸出國の生活水準引上げを基底とし、國際貿易界建て直しの工作を経て著々移り初めつゝある點に吾々は注意せねばならぬ。

三、英吉利政界を背負ふ人々

最近の英吉利外交界に於いて最も注視されてゐるのは果して何問題であらうか。地中海の覇權を繞る對伊問題であらうか。否それは既に確信に充ちた對策済みである。即ちその問題こそはナチス獨逸とソヴェエト聯邦との、開戦如何及びその時期に外ならないのである。

但し先頃態々獨逸視察に出かけた英吉利きつての老政客ロイドジョージは、ヒトラーの國政に處する眞摯そのものゝやうな態度に魅了されて歸英したが、その彼の見解によると尠くとも今後六七ヶ年以内に獨逸戦争は起きまいと云ふ事である。歐洲大戰の勃發當時の藏相として或ひは陸相として、又戰亂後半に輝やかしい英吉利宰相として聯合國側の主役を勤め、ヴェルサイユ平和條約の製造主任と見做されたロイドジョージは、近來その自分達がでつち上げた條約の改正必要を卒先して稱へ、英獨は勿論の事佛埃匈各國の注目を惹いてゐる。

現在彼は長男及び長女も代議士に仕立て上げて、一家三人親子水入らずの代議士だけで自由貿易主義の看板を掲げて居り、保守黨邊りの口沙我ない連中は失禮千萬にもエルジの家族會議黨など、大向ふから彌次を入れるが、それでも彼の演説が行はれると云ふと英國下院の議席も傍聽席も必ず満員の盛況を呈してゐる。

百萬語に餘る大戦回想録七冊を二ケ年以内に書き上げるだけあり、口も八丁筆も八丁の彼に未だ魅力があるのか、それとも老政客に對する一般代議士のよさを立證するものか、兎に角代議士總數六百十五名中の七割といふ壓倒的な勢力を占めてゐる保守黨のやうな大政黨になると反對黨に對し却つて寛容になるものか、たつた三人一黨の反對派ロイドジョージに發言の機會を與へぬ等と云ふやうな瞻玉の小さな事は斷じてしなくなるやうである。

現今の英吉利政界を先づ右から左へ見渡せばその議會内に於ける勢力の有無は別として、最右翼にモズレー一派の國粹同盟が控へ、次いで對印武斷派にして又英語常用各國の一致提携を叫ぶウキンストン・チャーチル一派があり、それに前後して英帝國主義一手發賣元の感を振撒くロザミア並にビーズブルック一派の所謂量的大新聞の親方連が保守黨の右翼に構へてゐる。

保守黨の中軸をなしてゐるのがチャムベレインやホーア達で、この一派が現在の英吉利政界を牛耳つてゐる。次いで準保守黨或ひは又保守黨内の左翼とも見做し得るサイモン一派の國家主義自由黨があり、マクドナルド父子の國家主義労働黨がそれにつき、即ち最右翼のモズレー一派のファツショを除いた以上の全部が目下の處自稱する舉國內閣の政府與黨と云ふ事になつてゐる。

本來の自由黨は昭和十年の總選舉で首領ハーバート・サムエルの落選以來は愈以つて意氣昂らず、ウエストミンスターにそびえ立つグラッドストンの銅像は時勢の激變振りに長大歎息してゐるやうである。

この自由黨と、労働黨との中間に位するのが、例の三人一黨のロイドジョージの自由貿易主義派であり、その左が野黨の本陣である労働黨と云ふ順になり、又獨立労働黨や共產黨がその次に連つてゐる。

ロイドジョージの豫言癖は有名であるが、その反面大的放れを演じた事もあり、例へば一九一四年の一月に「近き將來英獨開戦の憂ひ斷じてなし」と豫言を敢へてし、現實は數ヶ月を出でずしてその反對の成りゆきとなつた。

然し乍ら先頃までの英國外相イーデンにはそのやうな豫言癖がないから、見當違ひを仕出かす心配もない筈ではあつたが、エチオピア問題ではすつかり味噌をつけてしまつたやうである。それ以來は貴族出の巨大漢ハリファクス老などが、絶えずイーデンの後見役のやうな動きを見せたものであつた。最初英佛當局の意見としては、例へエチオピアが幾多の肉弾で頑張つても伊太利には敵せないのであるから、エチオピアに何分かの領土を割讓させて事前に手打ちさせよう、さうすれば伊太利の東阿進出を或る程度に喰ひとめられ、一方ハイレ・セラシエのエチオピア帝國を存續させる事も出来るし、すべてに好都合であらうと云ふのでかの英佛兩外相ホーア・ラバール提案となつた。

そしてこの提案は英國政府の閣議でも一度採決されたのであつたが、程なく閣員の一人イーデンが俄然強硬に英佛提案の廢棄を主張し廻つたのである。結果はホーアの失脚に代つて當時聯盟大臣の肩書にあつたポールドウキン首相御氣に入りのイーデンが外相にせり上り、お手のものゝ理想主義的聯

盟本位の對伊制裁を高調したが、現實主義の時潮に押され事志と全く異りエチオピアは却つて完全に伊太利の掌握する處となり、従つて英吉利のエチオピアに於ける立場は遺憾なく一掃され元も子も失くしてしまつた結果となつたのである。

即ち外相の椅子を滑り落されたサームエル・ホーアの方に先見の明があつたと云ふもので、その爲に一度失脚した彼も程なく舊に倍する勢力を盛り返へし椅子こそ海相に變つたが、却つて次代の保守黨首に擬せられるやうになつて來た。

ホーアは敵を作らない人で先頃まで大軍擴時代の海相として地中海の對伊軍備充實を着々と行ひ、それと同時に首相後繼の地盤を着實に築き上げ、現在では既に内相として只管チャムバレイン首相の引退に待機する姿勢となつて來てゐる。

先頃ボールドウキン首相の引退に際してその後繼者としてホーアも既に噂の主とされてゐたのであるが、ホーアはチャムバレインより十一も歳下の五十八歳であり、一應年長のチャムバレインに譲歩した譯である。

但しイーデンも祖先傳來の家屋敷を手放すだけあり、例へ政策上の失敗があつても黨内の人氣はそれ程に悪くなく、ホーアに次ぐ保守黨首領の後繼者と見做されてゐる。

保守黨内に在つて他にその前途を囑望されてゐる人々の中、現保健相のキングスレー・ウッドは最も著しい存在であらう。故意か偶然か現首領チャムバレインも保健省に二度の勤めをした經歷を持つ

て居る。即ち保健してこそ首領にもなれ首相にもなり得ると云ふ暗示かも知れない。

歐洲大戰の頃まで英吉利政界に王座を占めてゐた自由黨は、其後保守黨労働黨とその左右から削り取られ瘦せる一方で、前世紀の中葉ヴィクトリア女王に楯ついて自由主義を高揚したグラッドストーンやコブデン達の面影は今や全くその跡さへも止めて居らない。

そのやうな殘骸的自由黨は英貨磅の危機を最後として四離滅裂し、國家を第一義とする一派は前述の通り興黨として聯合内閣へ、外相内相を経て現在は藏相の椅子にあるジョン・サイモンを先頭に押し立て、國家主義自由黨と云ふ一人前の旗印をかゝげてはゐるが、既に保守黨の一分派として見る方が至當のやうである。

先頃まで商相の任にあつたランシマンもこの一派に屬して居り、元來自由貿易主義者で歐洲大戰當時まで既に文相農相商相を歴任して鳴らしたものであるが、聯合内閣で商相の二度の勤めを始めた頃には最早往年の意氣を失ひ、全く保護貿易主義者たる保守黨の體裁をつくらふ傀儡にすぎなくなつてゐた。

サイモンも先頃までの内相勤めでは、モズレーのファツシヨ運動取締りなどについて左翼の野黨陣から「横着なます」など、彌次られて意氣更に昂らなかつたが、保守黨傳統の非常時施政責任の各派一致分擔意識と、藏相候補過多の保守黨内情に幸ひされたまゝ外様であり乍ら藏相へ躍進出來たのである。

昭和六年、英貨が金本位離脱のやむなき基ひをなしたと評せられる失業保険金の切上げ問題に際し、自由黨及び労働黨内にはそれ／＼強固な國家あつてこそその人民なりとする國家第一派と、健全なる人民あつての國家なりとする人民第一派とは對立異見を生じた。そして自由黨の方は全く分裂し、労働黨の方は分裂とまではゆかず黨内一部の國家第一派が古巢を出奔した形を示した。

この出奔組が例の労働黨三羽鳥を率いた故ラムゼー・マクドナルドで、名づけて國家主義労働黨とした。處が其後彼の黨運は極めて悪く、三羽鳥の隨一スノーデンは飽くまでも自由貿易主義と土地再評價税の新設を固執して上院へ遠去り先年他界し、サンキー卿も退陣し、最後までマクドナルドの下に踏みとどまつたジェー・エッチ・トーマスは自治領大臣をしてゐたが、紅茶などの關稅引上げ決定の閣議の内容を事前に株屋をしてゐる息子へ漏洩したとかせぬとかで、出奔以來仇敵視してゐる古巢の労働黨側から騒ぎ立てられ却つて保守黨側では異分子であり外様である彼を庇つたのではあるが、遂に庇ひきれず失脚してから既に二年餘り、今日では英吉利鐵道従業員の大親分として肩で風きつた頃の自序傳をものして僅にその健在を示してゐるにすぎない有様である。

人民第一主義の労働黨を去り、國家主義労働黨の旗幟をひるがへした當時のマクドナルドは三度の首相就任ではあり、三羽鳥をそれ／＼藏相、大法官、自治領相に仕立て侍べらせ非常時英吉利宰相の偉風堂々たるものがあつたが、昭和十年の總選舉には與黨であり而も樞相の威光も空しく、労働黨側の集注攻撃に年來の地盤に於いて敗慘の憂き目を見て、其の後辛うじてスコットランドの大學區から

補缺で復活した程で、かの歐洲大戰の眞只中に在つて敢然非常論を主張してゆづらなかつた果敢な平和主義者マクドナルドの姿は最早遠い過去の物語りとなつてしまつた。

たゞ先頃樞相を辭めるに當り貴族に列し上院入りをするように勧められたが、彼は英吉利に於ける最初の無産黨首相となつた分を重んじ飽くまでも下院にとゞまり平民として一生を終りたいと言ひ通した氣持には、未だ往年の餘韻が含まれてゐたやうである。

侵略國に對する軍備擴張を主張し乍ら、一方現内閣の國防計畫には賛成出来ぬと云ふ頗る限界のややこしい軍擴案をひつさげ、近來その動向に大變化を示してゐる労働黨の中にも、二つの相反する流れが渦巻いてゐる。

エチオピアや西班牙の例を引いて軍擴政策を主張する一派と、軍備の偉大さを以つて列強を威壓するの愚を避け平和希求の論擧の偉大さを以つて世界を誘導せよと絶叫する一派とである。

後者は前黨首のランズブリー翁やスタッフォード・クリップ及び倫敦市會を二期に涉つて斷然牛耳るハーバート・モリソン達ではあるが、流石の彼等も世界の風潮には抗し得ず大體に於いて現在の労働黨内部は三對一の大勢で軍擴に引ずられてゐるやうである。

昭和六年以來在野つゞきの困難な労働黨は、國際聯盟の軍縮議長であつたヘンダーソンから平和主義者ランズブリーへ、そして現在のアトリーと黨首を換へて來てゐる。

アトリーは労働黨内に在つても割合に穩健家で寧ろ消極的すぎるとも評せられ、爲に黨内でも彼は

幹事長型で凡そ一黨一派を號令する首領型ではないと云ふ蔭口さへも既に相當廣まつてゐる有様である。

彼の代理をアーサー・グリーンウッドが屢々つとめてゐるが、現在の労働黨では一朝内閣組織の場合、貫録充分な首相たり得る理想的な黨首難にあるらしい。それで比較的前途を囑望されてゐる人々の筆頭に、ヒュー・ダウトン博士がある。彼は今丁度五十歳の働き盛りで、牧師の息子而もイートン校からケムブリッジ大學と英吉利國內でも取り分け貴族的な最高級の學歷所有者であり、父親の時代には彼の家へヴィクトリア女王が訪問された事もあると云ふ家柄で、労働者上りかそれでなくとも下層階級の出身でないといふ兎角に労働黨の總裁として大衆人氣にびつたり來ないと云ふ不利も缺點も持つてゐるが、それでも尙餘りある存在を示してゐる。

従來労働黨は、自稱六百萬の會員を擁する英吉利消費組合運動の政治方面を代辯してゐるが、一ケ年百二十億萬圓近くも取扱ふその組合金融に着目し初めた労働黨は、先頃消費組合の政治代辯に止まらず組合金融までも代辯しようといふ色氣を出して大波亂を巻き起したものだつた。

それに憤激した組合側ではこれを機會に年來の懸案である單獨の消費組合主義政黨を殆ど結成しかけたが、幾多交渉の後結局は再び舊來通りの政治代辯だけを労働黨に委ねて、表面上は兎に角も平靜を取り戻したやうである。

因に労働黨の内閣時代に海相をつとめたアレックスアンダーは、唯一の消費組合生え抜きの代議士

であつた。

問題のある度毎に必ず一席を辯じ速記録を通じて見ると非常にニューモアたつぷりの人であり、實演ではこれこそ標本的な左翼闘士なりと云ふ印象を與へる人にジェームス・マクストンがある。

彼の統率する獨立労働黨は曾つて有能の左翼政治家を輩出した輝やかしい過去を持つて居り、従來は労働黨内の左翼と見做されてゐたが、最近に至り次第に共產黨と接近して來てゐるやうで、ファッショ黨モズレー一派の黒シャツに對抗し敢然と赤シャツを着込んで立會演説に火花を散らせてゐる。

英吉利に於いても佛蘭西に慣ひ幾度となく人民戦線結成の誘ひが、共產黨や獨立労働黨から労働黨の本陣に向つて試みられたけれども、労働黨側では黨内多少の賛成論者の離黨合流をも見ぬ振りして拒絶し通して來た。

即ち英吉利では佛蘭西の眞似ははやらす、ポピュラー・フロント（人民戦線）がポピュラー（流行）しきるまいと云ふ理由に基くものらしかつた。

オスワード・モズレーは個人的に、彼の將來を有望視してゐた人が多かつた。然し歐羅巴の諸國中でもとりわけ議會政治の安定してゐる英吉利……他國に比較して社會施設が完備し勢ひ過激思想の培養される餘地が次第に狭められて來てゐると云はれる英吉利……で、貴族出身にも拘はらず左翼群に生ひ立ち労働黨内閣當時閣僚の椅子を占めてゐた彼が三段飛びしてファッショ運動にとりかゝり、而も明白にムツソリーニ直傳を振り廻はした。

外國の事は例へよくとも悪くとも簡単に真似る事など大嫌ひな英吉利民衆に對して、モズレーの伊太利傳來のファツシヨ運動はその方便から見ても非常にまづかつたのである。

其處で近來は立憲當初の言明をひるがへして猶太排斥をも英國ファツシヨ運動に織り込むやうになり、その新政策は當然に英吉利國籍の猶太人群衆を刺戟し恐怖せしめ、且つ又極左翼政黨を憤激せしめ、俄然英吉利のジャーナリズムの波に打ち乗り近來除々にその存在を明にしつゝある。

流石の英吉利民衆も所謂議會の政黨競技に飽き初めた譯でもあるまいが、倫敦の下町に於ける黒シヤツ二千名の示威行進に、三千名からの警官が必要とされる程の近況を呈してゐる。

そしてファシストが大道で無暗に英國々旗を振り廻し交通妨害をした科で一圓の罰金、或ひは猶太人をどやしつけた爲めに五圓の科料と云ふやうな小さい罰金が角力選手のやうに大きい倫敦の警官を益々多忙にさせてゐる。

一方共産黨や獨立労働黨では英國籍の猶太人大衆と確く結びついて反ファツシヨ行進など繁しく催ふすやうになつて來た事が最近特に著しいやうである。

議會内では黒シヤツ着用を禁止せよと云ふ要求に、いかめしい政治運動制服禁止法までがでつち上げられ、負けぬ氣のファツシヨ側ではそれに呼應して黒シヤツ着用は禁止されても合法手段はいくらでもあり、黨員すべて八字ひげを貯へて制服代用の目印にするとかんだものである。何れにしてもこれらの小競り合ひが起きれば起きる程、モズレーの宣傳になる事だけは間違ひない。

歐洲大戰前の英吉利政界を號令した保護貿易主義者ジョセフ・チャムバレインの長子オースチンは、勿論自己の才幹も物を言つたであらうが七光りも加はつて要職を歴任し、先頃英國政界の元老と稱せられつゝ長逝した。又ジョセフの次子でオースチンの異母弟ネヴィルは、今や時めく聯合内閣の首班者となつてゐる。

或ひは又マクドナルドが三度も首相を勤めると、その長子マルコムは自然代議士に推され大臣とされるやうな英吉利政界の家門尊重の慣習は、果して今後も永久に踏襲され得るものであらうか。

それとも慣習尊重・傳統第一の大伽藍ウエストミンスター七百年來の議事堂がテムス河の朝霧に崩れ込み、ライト(右翼)のファツシヨがライト(正しい)とされ、レフト(左翼)がレフト(葬むらる)される時代が來るであらうか。或ひは又レフト(左翼)がライト(右翼)をレフト(棄て去る)する時代が到來するであらうか、興味ある英吉利政界の前途ではある。

四、英吉利政界の選舉費

前回の英吉利總選舉は議席六百十五に對し千數百の候補者が轡をならべ朝野の各派入り亂れて白熱戦を演じたが、その内婦人の候補者は全體の約五分を占め六十五名に達した。そして婦人候補者の過半数は流石に労働黨を背景にする者多く、保守黨派の中には例の禁酒運動で有名なアスター子爵夫人

達の顔も覚えてゐた。勿論眞摯なアスター夫人等はその限りでないが、英吉利に於ける有閑の婦人達は敢へてダンスの麻雀の問題を起さずとも社會の爲め婦人關係の政治戦線に活躍し精力を發揮出来る舞臺があるので、此の點日本の有閑婦人よりは幸福のやうであつた。

前回の英吉利に於ける總選舉で認められた顯著な大勢は、レディオやフィルムを活用する政見發表の運動方法が非常に重要視され、在來の型による演説會はあまり行はれなくなつた事である。

そして當局は別に選舉肅正音頭とやらも嘘し立てなかつたのであるが、選舉費用の最底はその獲得票數の一票平均一片（銅貨一枚）を要したに止まり、最高の者でも一志十一片（銀貨二枚弱）の記録が残されたのである。

前回の英吉利總選舉に際し最底の選舉費を以つて美事當選した代議士こそは、誰あらう彼の長髪をまくし上げ乍ら熱辯を振ふ獨立労働黨の名物首領マクストンその人であつた。即ち彼は印刷物及び文房具費に約六百八十四として選舉事務所室代に五十圓、演説會場の整理費に二十圓合計七百五十圓也が總選舉費用であつたのである。

大體に労働黨系の候補者の方が所屬柄だけあり、保守黨や自由黨系の人々より金を費はず、平均して二分ノ一乃至三分ノ一の選舉費で當選してゐる。例へばその頃の労働黨首領ランズブリー翁は一票平均五片半（銅貨五枚半）で、それに反し當時の保守黨首領ポールドウキンはその三倍近くの選舉費用を投じて當選したのであつた。

英吉利の代議士戰では投票者數が多いとは云へ、二萬五千圓も使ひ乍ら落選したと云ふ例もあるが、通常一萬圓の選舉費があれば充分な政戦は出來ると見做されてゐる。

但し英吉利國內に於ける一萬圓は、丁度日本に於ける三千圓程しか使ひでがなから誠に小額なものである。

會つて六萬圓あればどうか當選、五萬圓ではむづかしいとされ「六當五落」の俗語を生んだ事もある吾が日本。其後肅正運動などにより可成り選舉費は引き下げられて來てゐるやうであるが、眞の低減は今後にかゝつてゐる。同じ六當五落でもよい萬臺の代りに、六百圓と五百圓が當選の境目と稱せられる程度に早く選舉肅正の實を擧げたいものである。

五、事變と日本の對英認識不足

南京陥落により漸く序幕を開いた對支問題を繞り、吾が日本朝野の多くはやゝもすれば二三の外國に向つて現地事情の認識不足を難詰せんとする傾向を示してゐる。果してそのやうな對外態度は、遺憾なく射てゐるものであらうか。

即ち既に世界指導の立場に到達する吾等日本人である以上、今すこしは泰然と構へ彼の對支認識不足を難する前に先づ何故に彼等が敢へて對支認識不足の態度を持續するのであるか、一考する餘裕位

は持つて居らねばならないと思ふ。

彼等を進んで認識するてふ心の餘裕すら持ち合はさぬ爲に、今日までも再三やゝもすれば、のれんに力押しを仕易い日本の弱點を暴露する。先きの例に滿洲事變當時、對國際聯盟問題に血道をあげ貴重な精力を浪費した日本の朝野あり。

當時孤軍奮闘せられた松岡代表には御氣の毒ではあるが、若し日本の朝野が今少し歐洲列強間の動きや國際聯盟の實態を見極めて居たらば、今更聯盟を教育する事の無益を識り眞面目に遙々スキス湖畔へ代表を送る必要さへも認めなかつたであらう。

日本の主張が正義であれば誰も彼も聽従すると思ふのがそも／＼單純すぎる見方であり、聯盟によつて獨立を維持する中歐や東歐の諸國は、その主張のよしあしを問はずいやしくも彼等としては生命線である聯盟の存在價值を引き下げ危ふくするやうな行動を採る國家に對し先天的に反對せねばならぬ立場に在り、例へ日本の主張を是なりと悟つた處で自己存続の背に腹はかへられぬと云つたやうな國々が相當にある。比較的親日傾向の漂ふ波蘭あたりはその適例の一つであつた。

且つ又當時歐米諸列強の交叉した對立的情勢は、決して對日經濟封鎖斷行の歩調一致を望めぬ事は餘りにも明瞭であつた。

その頃反日國際人の跳躍する倫敦に在つた私は、「對日經濟封鎖は確に今日の日本を苦難に導くであらうがそれは明日の日本をして一層易樂な時代を誘現せしむる事に役立つものである。何故ならば

それは強制的な自給自足獎勵を意味するものであり即ち聯盟の對日經濟封鎖こそは結果に於いて吾が日本國產獎勵促進に絶大な貢獻を齎らせて呉れるものである」と云ふ筆法の論文をデーリー・エクスプレスやデーリー・メールに數次發表の機會を得、却つて一部日本人側から暴論とさへ云はれたが其後の實際經過は私の確信を裏切らなかつた。

元來日本人は概して日英とか日米とか日佛とか或ひは日獨とか日伊とかの直接關係ばかりに見とれて、却つて根本的な大勢をも決するに至る英佛なり英米なりそれら各列強相互の關係を注視する事を餘りにも怠つてゐる。

従つて波蘭の動搖と聞いて滿洲國への影響を直感し、又はパレスタインの騷擾と聞いて印度への影響を直感する識者が日本にどれだけ居るか、この一例だけでも世界的である筈の日本人大多數が如何に國際問題の常識涵養を没却してゐるかを如實に示してゐる。

中南支に於いてユニオン・ジャックの旗風の下に在る利權を目して、英吉利利權それ自體なりと思ひ込んでゐる事なども手近の一例に相違ない。

即ち上海に限らず廣く中南支に於いてユニオン・ジャックを掲げる今日の所謂英吉利利權なるものこそ、實は殆ど全部が猶太利權の變形なのである。

例へば國民政府のあらゆる施設に關與した通稱百億萬圓財閥のサスーン一族を初め、エヅラ財閥やカドリー財閥つゞいて中南支鐵道建設の立役者パトリック或ひは上海總稅務司のラウフォード、又サ

スーデン財閥第一線の部将であり先頃まで上海市參事會議長の職に在り孔祥熙の對英借款に多大の役割を仕遂げたアーノルドに至るまで、何れも國籍だけは歴然とした英吉利人である處の猶太人であつた。而も彼等と提携一致する共同租界の市長格フェツセンデン及び市參事會議長フランクリン等も米國市民には相違ないが彼等亦猶太人なのであり、結局現情支那に於ける所謂英吉利利權なるものは強ち倫敦を本部としてゐるものではなく、便宜上英國々旗を利用してゐるパレスタインの猶太利權こそがその實相なのである。

従つて表面上は支那問題を繞る英吉利の對支動向なり對日動向なりと見做され易いではあるが、實質的には支那問題を繞る猶太人一派及びそれに引き摺られ易い英吉利と云ふ重複した内容を見極めなければならぬ。

然し乍ら既に前世紀の後半に於いて猶太人の首相を出した英吉利ではあり、又現今のチェムバレイン内閣にも藏相と陸相と土木相とに生え抜き猶太人を据へ、而も土木相は前記上海サスーン財閥の首腦者と從兄弟の間柄に在る程で、最早現在では猶太系英國人と英吉利系英國人との區別をする事は却つて不自然であるとの斷評を下す人々も多いが、それは些か英吉利實社會内面の現状を無視しすぎると云ふ諷りを免れないと私は考へる。

去る滿洲事變に際し英吉利籍の猶太人は反日と云ふよりは寧ろ親日的でさへあつた。それは目前の利益として先づ彼等が十數年間破壊を企て、來たジュネーヴの國際聯盟機構を敢へて自分等が矢面に立ちにくまれ役を勤める事なく、日本の行動によつて決定的に弱體化して了へるものであり、而も鎮靜後の滿洲開發にも相當甘い汁を吸へるであらうと云ふ胸算用が相當に底強い大勢を形成したのであつた。

そして日本の聯盟總會退場を契機として第一の目的の方は目算通りに進行し、次いで滿洲活躍を企てたが新興國の經濟組織は彼等の註文通りには左右されなかつた。即ち吾々日本人をイスラエル子孫の一族と自分決めしてゐる彼等猶太人達として、甚だ面白くない滿洲國が實現してしまつたのである。この成りゆきに對して最も不満やるせなかつた猶太人達こそは、ガンヂー・ネール等の國民會議派の勃興により追ひ立てられるやうに印度から東へ東へと鞍替へして來た在支英國籍の猶太財閥であつた。

従つて今回の支那事變に際してはこれらの猶太人達も滿洲事變當時とは全く立場を一變し寧ろ積極的に英吉利邊りを反日の大勢に終始させようとする現情を示してゐる。

即ち彼等猶太民族の對日動向の轉變こそ、見ようによつてはソ聯の極東軍備強化問題などより人目を惹かない眞綿式存在である爲、一層に重視怠る事の出来ない問題であり、この方面の認識さへ完うしてゐたならば英吉利の對日動向なども自然と明解するものであらうと思ふ。

結局支那問題の前途に對し吾々は老臉英國の何のと徒らに昂奮せず、今少し猶太利權なるものゝ實態を究め善處しなければ、問題は決して核心に觸れるものでない事を知らねばならない。

元來が倫敦を首府とする英吉利を依然大英帝國の本國としての英吉利扱ひする事それ既に時代遅れな見方である、そんな對英觀念は尠くとも五六年前までの姿と今日とを取り違へてゐるものに外ならない。

英吉利の命令一下に自治領カナダが未だに一糸亂れず動くと思ひ込んでゐるのが大間違ひ、既にカナダは英吉利に一步先んじて對米互惠通商協約さへも作つてゐる。本來ならば親を出し抜く不孝者である筈だが、最早今日のブリテイッシュ・コムモンウェルス・オブ・ネイションズ（英聯邦）の社會ではそんな事は當然な行動として見られるやうになつてゐるのである。

濠洲然り南阿亦然り、新西蘭や南ローデシア自治領亦然り、辛うじてはあるが印度すらもその例に漏れず、即ち彼等は英吉利を本國とする英帝國のカナダ・濠洲・南阿・新西蘭・南ローデシア及び印度なる態様から、刻刻にカナダ人のカナダ、濠洲人の濠洲、南阿人の南阿と云ふ意識なり實相へなりに移行を了うしつゝある。

現にカナダにも濠洲にも南阿にもそれ〴〵話し合せたやうに、英本國との提携強化論者に對抗して自主獨行論者が有力に存在してゐる。

そのやうな成長しきつた彼等英自治領諸國として遂に英吉利本國との對等關係へ漕ぎつけ、それが正式化されたものこそ即ち去る昭和五年のウェストミンスター條令なのである。既に國際外交上「英帝國」なるものは何處を探しても現存し居らず、それは「英吉利聯邦の新看板」の下に前々世紀から

の冒險等を根底とした企業利權の恒久的利潤を確保せんとする國際的トラストとしての存在をつゞけてゐるにすぎない。

吾が日本に於いても或る人々は「英國の門戸閉鎖主義は日と共に固まりつゝあり」と稱してゐる。然し乍ら實際の近情は既にオッタワ協定再檢討の叫びが内部から起されて來てゐる通り、英吉利は門戸閉鎖に破綻を來たし今正に閉鎖政策投げ出し直前の陣痛中なりとも譬ふべき今日なのである。

又彼等が「老膽英國の面皮を剥げ」等と今更事新しく絶叫する程に、現今の英吉利は躍氣となつてその面皮を剥ぐ程必要のある存在であらうか。英吉利は世界陸地の何割とかを獨り占めてゐるとして英吉利の反省を促すとも叫ばれてゐる。然し乍ら例へその英吉利が當方の註文通りに反省した處で、自治領諸國に對して英吉利の押しがきかなくなつて來てゐる以上、所期の効果は一向に擧らぬであらう。須らく對英叱咤の熱意を濠洲なりカナダなりへ振り換へ、直接に開店空屋業者の反省を促さぬ事には折角の努力も水泡よりはかないにきまつてゐる。

故に二十年前ならばいざ知らず一九三八年の今日に於いて、反英示威運動はやゝもすればのれんに力押しの結果を招く。彼等が一時的昂奮に止まらず眞に反英示威運動をやる氣なら、いつそ世界の猶太民族を目標にやる覺悟でなければ要領を得まい。

肝腎の反日本尊たる猶太群に對して示威運動せぬ限り、同じ一つの狭い地球上での事である、英吉利國旗が静まれば又必ず他の何れかの國旗を利用してざわめきが起される事疑ひなしである。

要するに大義を行ふ吾が日本の對支工作である以上、今更誰が何と云はうと一々氣に止めず靜然として己れの信ずる途を進めば事足りる、それでこそ幾多の英靈は一段と死華が咲くと云ふものであらう。

若しそのやうな超然たる態度が採れないならば、初めから國民政府一派に負けぬやうな宣傳網を十重二十重に施してから行動すべきである。

誰しも聖人君子に非ざる限り、今まで自分の繩張りとしてゐた處を他から動かされるやうな事があれば、何とか言ひたくなるのが人情である。そんな判りきつた有り得る事に對しこの忙しい最中、一顔を眞赤にして取り合つてゐるやうでは、世界の日本及び日本人としてまだ、修養を積み重ねるまいと思ふがどうであらうか。勿論、顔を眞赤に力んでいくらか意義ある効果を獲られればその限りに非ずであるが、そんな場面は差し當り見えないやうである。(昭和十二年十二月稿)

第三篇

英本國と歐洲大陸

東部歐洲問題と英國の態度

英伊の對立とその前途

西班牙内亂と英伊の舞臺

英伊の地中海競技

地中海を繞る各國の立場

地中海の前途

一、東部歐洲問題と英國の態度

反獨逸の苦肉便法としてモスコ近來の對英政策はソ聯最上級の御氣嫌奉仕に終始して居り、曾つて英露通商を一時斷絶させたメトロポリタン・ヴィツカース事件に採つたやうな對英強硬態度は最早全く過去の夢物語りとされてしまつたやうである。

そしてソヴィエトの駐英大使マイスキー達は、例のソ聯と佛蘭西或ひはソ聯とチェッコスロヴァキア間に締結されてゐる攻守同盟協約に對し、英吉利方面からの好意的な諒解を確保すべく頻りと暗躍をつゞけてゐると云ふ。

一方獨逸は伊太利と共に反赤色派のフランコ將軍を支援して西班牙内亂に望み、佛蘭西の背後を形成し地中海の西邊を扼する同國內からソ聯勢力の驅逐をはかり、それに換つて自己勢力の扶植及び對佛對英牽制に大童である。

尙又東部歐羅巴に於いては、獨逸や伊太利の弟分である匈牙利が、ソ聯赤化の魔手を東歐から追ひ拂はうと全力をあげてゐる。

懲罰一方的な勝者獨善の精神によつて仕上げられた處のヴェルサイユ條約は平和を目標とした筈ではあつたが、其後の歐洲強ひては世界に對し却つて複雑な政經情勢を捲き起す基ひを造つたやうなも

ので各國間の氣まづい對立さは慢性となり小競合を到る處に見受けられる今日を招來したのである。

トリアノン條約こそはそのヴェルサイユ條約にも一つ輪をかけたものゝやうで、爲めに不安定な歐洲を清算する事は尙更至難とされて來てゐる。

トリアノン條約の存在は即ち、東部歐羅巴とりわけダニューヴ沿岸を人爲的に歪め、流れに沿ふ各國の經濟地理的色分けは恰も畸形兒の寄せ集めと云ふ状態を強ひてゐるものである。

例へばその或る國々は大食しすぎて消化不良の大腹を抱へて居り、又或る國々は肥大な頭と瘦細つた手足だけで胃もなし腸もなしと云つた調子で、經濟的にも政治的にも無理加減が溢れ、そればかりでなくヴェルサイユ會議で強調された筈の民族自決は愚か人種的にも不自然さが漲つてゐる。

即ち東部歐洲が大亂再勃發の豫震へ既に移りつゝありと云ふ事は最早何人と雖も否定しきれぬ現實であり、匈牙利を祖國とするマギル民族を巡り嗣なしの現状匈牙利と歩行困難な肥大漢チッコスロヴァキアとの對立こそは、彼方西部歐洲の二大強國英吉利と獨逸とを離反せしめ易い危機を藏するものと看做されてゐるのである。

獨逸の尖鋭化・佛獨のにらみ合ひ英伊の抗争等々、近來歐羅巴各國間の對立振りは三角關係の何重奏を極めてゐるが、その中でも現今の歐洲大陸を通じ最も重大な波亂を起し易いのは何と云つてもマギル民族問題の處置如何に外ならないであらう。

當時一千萬を遙に超へてゐたマギル民族は歐羅巴に於ける東洋人と云はれる程に、戰敗諸國の内

もとりわけ惨酷な處断を強制され、領域は四分の一に削られマギル民族の血統を誇る三百萬の人々は無理矢理に故郷の匈牙利から取り離され、恰も羊や豚を山分けするかのやうに四隣の新設國家チエツコスロヴァキアやユーゴスラヴィア或ひはルーマニア等に割け與へられたのであつた。

領土の減少と人口の減少とが數量的に同じ比率であつてさへも、實質的には必ずしも同じ結果をもたらずとは限らない。まして領土は戦前に比較して二十五パーセントになり、然も人口の方は戦前の六十パーセントと云ふ不均衡極まりない取扱ひを受けたのである。即ちトリアノン條約によつて匈牙利は一人分だけの臺所を當がはれて、三人近くの賄をしなければならなかつた。これは明かに無理強ひの難題ではあるけれど戦敗疲弊の極にあつた當時の匈牙利として、何らそれに抗辯する方便も持ち合はさず泣き寝入りをして來たのである。

然し乍ら平和會議以來二十星霜を閲みした今日、歐洲各國間の均勢は全く變化した。既に匈牙利は強力な伊太利を長兄と仰ぎ獨逸を次兄とし、又奧地利地方との關係さへも大戰直後のやうな反感は薄らぎ漸次友好を復活し善隣となりつゝある。

従つて匈牙利はそれらの國々の支持により公然と再軍備を敢行する事は間違ひなく、其後に巡り來たる舞臺はどうなるであらうか。即ちトリアノン條約によつて混亂せしめられた匈牙利の全國境の妥當化、及びマギル民族に對する人道的な是正處置それこそは彼等匈牙利人舉げての希求問題に外ならないのである。

509128

彼等は殊にチエツコスロヴァキアに取り上げられた匈牙利古來の歴史的地方、そして又強制的に國籍を變更されたマギル民族百萬の匈牙利復歸を主張してやまない。舊匈牙利の領域なり人民なりを最も多く包藏してゐる新興國は云ふまでもないチエツコスロヴァキアに外ならず、従つて匈牙利の復活運動に關する限りチエツコスロヴァキアは必ず引合ひに出される因果の種を宿してゐるのである。

それならば現在のチエツコスロヴァキア寄合世帯國を統治してゐるチエツコ人とは、如何なる民性を持つてゐる人種であらうか。強情で才幹のある人々……それが彼等チエツコ人に與へられてゐる通評である。

チエツコ人が永い歲月に涉つて不遇な治下に虐げられてゐた點は同情すべきであらうが、壓迫を受けてゐた彼等の反動振りは餘りにも甚だしく、戦後ヴェルサイユに於いて好機を掴むや否や驀進し念願達成の程度を餘りにも越しすぎてしまつた。人種的にも經濟的にも政治的にも、何れの角度からしても無理を重ねて新しい大屋臺を張り出し過ぎたのである。

云ふまでもなくチエツコスロヴァキアは老舗ではない、一經濟組織としても何ら強固な結合の實を擧げ得て居らないのである。

まるで飄箏なまづのやうに延々東西六百哩、西に獨逸と境し東にソ聯を近接するチエツコスロヴァキア、茲にヴェルサイユ條約以來の人工國家の實驗臺が横たへられてゐる譯である。

人口總數優に一千五百餘萬と稱へてゐるものゝ、正真正銘のチエツコ人はその半分にも充たないチ

エツコスロヴァキア國ではある。即ち彼等チエツコ人は自分達の可弱い立場を補強する必要上、四圍の戰敗國から多くの土地と人間とを一座に強制加入した。そして彼等の立場からすれば無理もない話であらうが、取り上げた者保守する者共通の自衛的觀念の氾濫振りはやゝもすれば質本位から量本位主義に傾き、それが却つて今日の領土及び人民の統制難や不消化振りを招くやうになつてしまつたのであつた。

即ち飄箚の一半はチエツコならぬスロヴァキア人によつて構成されて居り、彼等スロヴァキア人はチエツコの治下に在るのを欲せずして、自治權要求の運動は相當に根強いものがある。又舊獨逸の東南部からも三百五十萬の人民を強制してチエツコ國籍に引き込んで來てゐるけれども、これら獨逸の血統をひくチエツコ人民は當然にブラーグ現政府へ對して永久不變の從順さを保ち得るの筈もなく、故國獨逸の復活に比例して分離運動が刻々に昂められてゐる。

何れにしてもチエツコスロヴァキア國はその成立に際し統治者として立つたチエツコ人が自己專一の軍事上の見地から、人文の自然を没却して匈牙利の獨立經營に緊要缺く事の出來ない地方を敢へて取り上げて來てゐる。このやうな過去を踏んでゐるチエツコ人のチエツコスロヴァキアだけに、匈牙利の一舉一動にまで全身を牽連させられる譯なのである。

従つてチエツコ國の外交方針は一貫してトリアノン條約の確保さてはその神聖化を目標として居り、修正論の眞向から反對をつゞけて來た。

ヴェルサイユ會議以來チエツコ國は先頭に立つて所謂小協商國の團結を計り、疲勞しつくして何ら支援者を持ち合さなかつた當時の匈牙利や奧太利を十重二十重と包圍し以つてトリアノン條約の永世安泰を期した。

やがてそれらの小協商國達だけではトリアノン條約……即ちチエツコスロヴァキア國の存在を確實に保證しきれぬと悟つたチエツコ國の指導者達は、トリアノン條約を動搖せしむる主因の匈牙利をより一層抑壓する爲めに種々な外交工作をめぐらせた。そして好むと好まざるとに拘はらず現狀的自立の必要上、チエツコは匈牙利と獨逸の復活強化に備へて遂ひに問題のブラーグ・モスコイ協約に到達してしまつたのである。

チエツコがソヴイェト聯邦を後楯として獨逸さては匈牙利に拮抗すると云ふ事は、例へ間接にもせよ伊太利までを相手方に廻してしまふと云ふ結果になる。而も熱心な親獨派の前首相ゴムボ將軍逝去以來の匈牙利は今までの親獨さに變りはないがそれにも増して親伊熱が旺盛となつて來た。この成りゆきはチエツコ國及びその協約國ソ聯ロシアをして、從來目の仇としてゐた獨逸や匈牙利の他に伊太利をも直接の對抗者とする破目に墜し入れた。

チエツコとソ聯ロシアとの共同工作こそは實に歐洲外交界を一層に混亂させてゐる厄病神のやうだと或る人々は酷評を下してゐる程で、トリアノン條約……ヴェルサイユ條約の腐れ縁のやうにチ・ソ協約に關連して例の佛ソ協約も常に併稱非難的とされ勝ちである。

然し乍ら佛蘭西とソ聯ロシアとの協約は例へそれが大がよりのものであつても、チエツコとソ聯との協約に比較すれば遙に引火點は高く、理論的には兎も角として實際上には容易に發火しない相異があるやうである。

チエツコ側の公言によれば、ブラーグの門戸はモスコーに向つて解放されてゐるやうである。これはソ聯ロシアの獨逸攻撃に際して獨逸の南邊をなまづ式に寄り添ふ蜿蜒六百哩のチエツコ全土が、ソ聯空軍の根據地として利用され得るぞと云ふ示威宣傳でもあるらしい。

けれどそのやうな場合にはチエツコスロヴァキア總人口の四分の一に近い獨逸血統のチエツコ人民が、果して彼等の生國獨逸に對し一致して銃口を向けるやうな事をするであらうか。而も背後には復興匈牙利の躍動を、片時も忘れられないチエツコ國家ではないか。

一方この場合に英吉利として獨逸及び匈牙利に對し抗争する理由は何もない筈である。元來が英本國の住民は人種の點からしても、佛蘭西より獨逸に近い事は今更云ふまでもない。而もかの歐洲大戰に際し、例へ獨逸側の侮英態度甚だしく又經濟的な情勢に押されたからとは云へ、なまじ佛蘭西と行を共にし却つて自己の國勢を殺ぎ奪る佛蘭西側のみに利用された結果となつてしまつた苦い經驗が、英吉利人一般の腦裡に強く染み込んでゐる。且つ又去りし年のエチオピア問題の英伊對立に際し、佛蘭西の採つた態度には英吉利として對佛不快の意識を一段と強めて來た。

世界各國とも當然の事ではあるが特に近來の英吉利は朝野を擧げて「最大の準備で最小の行動」を

何事についても第一として居り、一九一四年の大戦勃發當時とは全く異り例へ佛蘭西が第三國から攻撃され白耳義が侵されても、それらの國々の爲めに容易に自國を動員なし得ない大勢に在る英吉利の今日である。況んや遙幾多の國境を越へた東部歐羅巴の混亂に際しても、出来るだけ巻き込まれないやうにとするのは明瞭である。

即ち英吉利として此の際チエツコや匈牙利の東歐問題に生じの干渉は却つて自己を泥沼の中へ滑り込ませるものと云ふ與論が強いやうである。曾つてヴェルサイユの死文の中から突起したナチス獨逸に對し、抑壓どころか寧ろ同情的な態度を以つて接した英吉利として、悲惨なトリアノンの重鎖を振りきらうとする匈牙利に對しても恐らく餘計な干渉はしないであらう。

かの歐洲大戰乗り出しが英吉利として大失敗であつた事を充分に體驗させられて居る彼等である、ましてソヴィエト聯邦の佛蘭西及びチエツコスロヴァキアとの協約に要らぬ義理立てなどをして、東歐洲に於ける外見的な肥滿病諸國の存在を維持する爲めに再び獨逸と對峙しようとする事は夢想だけにされて居らない。

「セラエボ事件……埃太利とセルビアを遂に開戦せしめ歐洲大戰の口火をきつたセラエボ事件……は一度きりで澤山だ。」……これが英吉利の東部歐羅巴に對する、惹いては歐洲大陸に對する偽らざる昨今の心情のやうである。(昭和十二年三月・盛岡日日新報所載)

二、英伊の對立とその前途

南歐西班牙の内亂勃發以來絶へず中立を保持してゐる英吉利は、やゝもすれば積極的な行動を示す伊太利・獨逸・ソ聯・佛蘭西の態度を苦々しく感じてゐた。

處が計らずもその伊太利別働軍がマドリッド東寄りのグアダラヤラ戦線に於いて籠城の西班牙政府軍に敗北し、フアツシヨの實力案外小なりといふ感を列國へ抱かしめた。

アチス・アベバ以來待機してゐた英吉利の言論界等は一齊にそれ見よがしに、かの一九一七年十月末伊太利全軍六十萬の内三分ノ一までもそつくり獨逸軍の捕虜とされた光輝あるカポレット大戦の二の舞なりと彌次りつゞけた。

或ひはエチオピア黑人を憐れむ英吉利の牧師群對ムツソリーニの非難・反駁・應酬・再反駁等をきつかけに再發した英伊の抗争は益々つゝのり、最近の情勢は一昨年以來曾つて見なかつた程に兩國間の惡化を示してゐる。

英伊の關係は例のエチオピアの關係が起されるまで、ガリバルチが英吉利海軍を背景として伊太利統一を完成して百年以來全く平調な友好關係が保たれてゐた。然しそのエチオピア問題の行き懸りも去年の七月十五日聯盟對伊經濟制裁の取り止めによつて消え失せ、ツアナ湖の水面は兎に角も平靜に

還へつたやうである。けれどもその手打ちによつて肝腎の地中海に對し、英吉利側も伊太利側も些かの安全感を持ち直した譯のものでは全然なかつた。

其後伊太利側ではぬかりなく、例へば獨裁官の愛婿チアノ外相を北部歐洲に歴訪させ或ひはナチス獨逸との親善振りを天下に示し、或ひは伊太利を盟主とする獨逸・匈牙利の結束振りを宣傳これ勤めてゐる有様である。又最近に至つて膨脹伊太利に絶えず脅かされ稍もすれば反伊親英となり易いユーゴスラヴィアと、進んで不侵友好の取極めをして以つて自國背面の萬全を期した。西班牙半島に處してもフランコ將軍北上進撃の機會を逸せず以つて一躍地中海の西關門を左右せんと企て、或ひは獨逸・獨逸・匈三國を糾合して歐洲大陸從斷聯衝政策を高揚したりして英佛方面への示威工作に夜も晝も足りない有様を呈してゐる。

一方、伊太利にエチオピアをしてやられたと見られる英吉利側においても昨年初頭以來、民間の自動車工場を黒幕計畫で總動員しダヌンツイオこのかた精悍を誇る伊太利空軍を威壓すべく英空軍の内容充實に全力を傾けてゐる。昨年末英空相と英國の自動車王モリスとがその空軍充實計畫に意見の相違を來たし首相が仲に入つて漸く合致を見たこと云ふ事などは、却つて如何に英吉利朝野が眞劍に空軍充實策を巡らせてゐるかの一端を現はすものと云へるであらう。

且つ又老軀マクドナルド樞相までも一座して埃及との更新條約取交しを行ひ、埃及國內に於ける英陸軍の駐兵權を撤廢しその兵力を擧げてスエズ運河地帯に集結確保し、飽くまでも名を捨て實を採る

方針により東南アフリカ及び印度への要路としての埃及國に於ける英吉利の立場を甚だしく改善した。而も地中海に對してはチエムバレインに次ぐ保守黨の大立物サムエル・ホーアを海相に押し立て、恰も長靴形の伊太利に蹴られそうな近接地帯に在るモルタ軍港第一主義を捨て、地中海東部パレスティン寄りのサイプラス島本位に轉じ西關門のジブラウター島と呼應させ、只管地中海に於ける地盤固めのやり直しに餘念がない。

然らば英伊兩國間の經濟關係はどうであるか。羅馬からは貿易統計が公表されなければいけれど伊太利國內の準備金塊は既に昨年、フアツショ伊太利維持に緊要な輸入品の決済に殆ど使はれ盡くしてゐるものとロムバート街やフォル街では見てゐるやうである。

從來の英伊貿易と云ふものは英吉利側から見れば微々たるもので總輸出入の三パーセントにも達せず對伊輸出入共殆ど同額の年算一億五千萬圓前後を示してゐる。

但し英吉利側の伊太利品輸入は主として直接消費の食糧品・飲料品・麻織物等で、具體的には北伊特産のチーズやフロレンスの麻及びシシリ島のレモンが挙げられる。

従つて若し英伊經濟の斷交となれば英吉利側としてはその自國消費の九割までも占めてゐる伊太利レモンの缺亡を感じる程度で工業原料の麻などは却つて英領自身の東アフリカ方面を益する結果となるやうである。

尙又硫黃礦は伊太利のシシリ物に代つて北米合衆國から供給を受け、伊太利大理石の杜絶は當然

に英蘭西部の石切場を賑やかす事とならう。

それに反し伊太利側の英吉利よりの輸入品は石炭・羊毛・鐵網であり、英國ウエールス石炭の輸入杜絶の場合伊太利としては國內の水力電氣開發に全力を盡くすであらうが、それでも石炭山を國內に持たない伊太利としては燃料國策に萬全を期し難いやうである。

伊太利は毎年一月から五月にかけて月々四十萬噸近くの英吉利石炭を輸入してゐたのであるが、一昨年暮聯盟の經濟封鎖に直面し眞先に味はされたのもその石炭缺亡の恐怖であつた。そしてムツソリ一ニは伊太利の死活を制する燃料問題の應急策として、一つには國內の貧水力までも活用の途を講じ他は北歐獨逸よりの石炭輸入を敢行したのである。

然し獨逸から伊太利へ石炭の輸送を企てる事は非常な窮餘策に相違なく、獨伊間の事でもあり物々交換は可能としてもそれはスキス通過……即ち石炭のアルプス越へを意味するに外ならない。それだけの犠牲を拂つて得られる石炭に對して伊太利の消費者達が、ブラツクダイヤモンドと貴重がつたのは寧ろ當然の事であつたであらう。

今や英伊それぞれの國內及び對外情勢は、かのエチオピア問題の頃と甚だ相違を來たしてゐる。當時地中海の西關門であるジブラウター軍港に、開戦準備の最後の用意とも云はれる病院船までも仕立てながら英海軍は遂に對伊制裁の砲火をきらなかつた。それには香港を手薄にし新嘉坡を手薄にし錫蘭島までも手薄にせねばならなかつた英吉利海軍の伊太利空軍に對する懸念や、共同作戰に應ぜぬ佛

蘭西に漁夫の利を占められ易いと云ふ理由も充分にあつたが、それにもまして他國他人の爲めに再び自己を戦禍の犠牲に供するなと云ふ意識が英吉利社會に底流をなしてゐたと云ふ事も見逃せない要因の一つであつた。

然るに其後英吉利の對伊軍備は地味に底力を以つて着々と進行し、佛蘭西も亦ナチス獨逸の急速な強化に焦り英吉利の善處を仰ぎ爲めに佛蘭西最近の對英態度はエチオピア紛争當時とは雲泥の差を示してゐる。

且つ又英吉利國內に於いても「英國の生命線は地中海に通ず」てふ觀念が昨今に至り漸く一般民衆にも鼓吹され渡るやうになり、從來恰も軍縮專賣局の觀があつた労働黨ですらも單にその財源を課税によるか公債によるかと政府に詰め寄つた程度で十五億磅の國防豫算を通過させたのである。それ程に近來の英吉利朝野の空氣は、エチオピア問題以來急激な轉換をしつゝある。

伊太利側は果して實質的に對應の準備が進められてゐるであらうか。北阿弗利加の一角トリポリに於いてこそムツソリーニの殖民地開發策は諍へられてゐるが、エチオピアには未だ三十五萬の兵力常駐を必要とし、現在は差し當り一步前進後の受身てふ立場に置かれてゐる。

然し乍ら伊太利も對阿弗利加大陸政策の第二課程へ入るやうになれば當然に地中海を伊太利一國だけの瀬戸内海としてしまはなければ都合悪く、と云つて今のまゝで地中海を從横に振舞へば昨日の英吉利はいざ知らず今日の英吉利は既にそれを默過する筈もなく、英伊關係は最早忌避しきれない暗黒

な因果關係と變じつゝある。

但しその英伊抗争に際し、親英傾向の強い米國のモルガン財閥が復興ファツシヨ伊太利産業の臺所を賄ひ乍ら、如何なる腹藝を演ずるか吾々として注視に價ひする事であらう。

(昭和十二年四月・臺灣日日新報所載)

四、西班牙内亂と英伊の舞臺

褐色人兵を率いたフランコ將軍が阿弗利加の北端モロッコから歐洲半島の西班牙首府へ行進を開始以來既に一ケ年、その西班牙稱する處の内亂は未だに何ら解決を見ず歐羅巴政局に及ぼす危険度は些かも減じて居らない。

寧ろ最近に至り却つて發火點を増加したとも見られ、例へば北部西班牙の海岸線に於いてフランコ一派の反政府軍は領海六哩を主張し、三哩の領海外を航行中の英吉利食糧船を停止せしめ、はしなくも封鎖線突破問題をめぐり伊太利を背景とする西班牙反政府軍と英吉利間とに抗議戦が行はれたりした。一方マドリッド或ひはヴァレンシアを本據とする西班牙政府軍は、昨年春その人民戦線の政治的大勝利に自己陶醉してゐる隙を、フランコ將軍やモラ將軍にしてやられたのである。それ以來彼等は隣邦佛蘭西の好意的中立の下にソヴェエトの積極的支持を仰ぎ軍備を整へ、勤勞大衆の義勇兵を強行訓

練した爲めに政府軍の實力は見かけによらず強いものとなつた。就中約二萬五千名の國際聯隊と稱するものは、恐らく歐洲大陸を通じて最も熱狂的な革命軍であらうと通評されてゐる程である。

そして彼等はソヴィエトの空軍及び戦車隊の實力試験的な支援により、先頃フランコ反政府軍（實は伊太利軍）のマドリッド進攻を拒んだのであつた。ソヴィエトの西班牙派遣戦車隊の中には、褐色兵の手榴弾一撃により壊滅したと云ふ格安な戦車もあるにはあつたであらうが、免に角守勢に在つたマドリッド政府軍側の國際聯隊は殆ど同兵力の反政府軍側のフアツシヨ精銳伊太利軍を後退のやむなきに立ち至らしめたのである。

そしてフランコ反政府軍の勝利を念じてゐる英吉利朝野の大多數の人々ですらも、フランコ側に屬する筈の伊太利軍の敗退に拍手を送つた内情は見逃さないであらう。

且つ同じ伊太利側に在つた獨逸當局の、伊太利軍そのものに對する値踏みも改變されたやうである。然し乍らマドリッド攻撃に於ける伊太利軍の失敗を見て、流石の黒シヤツも開始以來二十年近く古着じみて來たと評する事も當を得たものとは云へない。即ち伊太利の義勇兵達は別に國家的な強い意識を持つて、西班牙内亂の渦中へ飛び込んで行つた者ばかりとは限らないからである。さういふ變態的な出先義勇軍の強さが全伊太利軍の標準見本と云はれては、ムツソリーニならずとも反駁したくなるのも當然であらう。

實に歐洲大戰中、伊太利人は全軍の三分の一が一括捕虜と云ふやうな失態も演じたけれど、その反

面自分達の國境を守る爲めに勇敢な行動も記録づけられてゐるのである。

ムツソリーニは西班牙反政府軍の一部を構成した伊太利軍の行き違ひを目して、單に伊太利地中海政策の一部分が暫時休止するに過ぎない事であると樂觀してゐると傳へられた。

西班牙半島に於ける伊太利政策の暫時休憩とは何を意味するか。即ち伊太利が第二段の阿弗利加大陸政策の實行に移らうとすれば、どうしても地中海を自分自身だけの内海扱ひに出來ぬと都合がよくないのである。西班牙の南海岸地方こそはその内海化工作に對し、最も理想的な立脚點に相違なかつた。而も西部地中海の咽喉を扼する英領ジブラウター及びその對岸タンジアは地勢的に西班牙本土から吹き飛ばされる位置に在る。

伊太利はそれに據つて先づ地中海の西部も制禦し英吉利を後退させ、且つ又佛蘭西の背後をなす西班牙本土に立場を強める事はとりも直さず佛蘭西の對英接近を絶へず抑制出來る有利さとなるのである。

現今フアツシヨ伊太利として事毎に邪魔となるのは英吉利であり、西班牙内亂も最初の頃はマドリッドの政府側にソヴィエトと佛蘭西とが背景をなし、フランコの反政府側に伊太利と獨逸が支援をなしてゐた。

然し乍ら時の過ぐるに従ひその背景には種々の變遷を見た、即ちヒトラーの獨逸はナチス陸軍首腦部の反對により結局血と砂ばかりの闘牛場に見限りをつけた。それと同時にソヴィエトも近來國內情

勢に紛れ勝ちで、巴里の國際博覽會と異り獨逸が西班牙問題から手を引けば差し當り張り合ふ必要も薄らいだ譯である。且つ又中立狂奔の英吉利に對する御氣嫌取り等の理由から、流石のソヴェエトも西地中海に足場を熱望する事には變りがないものゝ、西班牙内亂の勃發當初とは格段の手控へ状態となつて來た。

従つて西班牙内亂も最近に至つては知らぬ裡に、西班牙と云ふ立場を欲する伊太利と西班牙の伊太利從屬を排撃する英吉利との舞臺に變化して來たのである。即ちその内亂勃發當時の意圖は何れにもせよ、今日の内亂西班牙は因果にも地中海制覇の角逐場化する懸念が濃厚となつて來た。何故西班牙の内亂が永引くか、當初は確にファツシヨ化と赤色化との勢力が伯仲してゐた爲めであり、今日に於いては英吉利と伊太利との利害全く相反する爲めと評するの過言ではなくなつてゐる。

従つてまかり間違へば英伊兩國政府の共に希望せぬ異様な新西班牙が漁夫の利を獲て悠々と出現するかも知れないと云ふ變態的の情勢を展開しつゝある。(昭和十二年五月・臺灣日日新報所載)

五、英伊の地中海競技

西班牙内亂不干涉委員會にも適宜な進退工作を行ひつゝ、伊太利は、今や地中海各處に全面的な武装強化を敢行し、去る九月に三千そして十月に一萬一千の精銳を對岸アフリカのリビアへ増兵した事な

どはその一端を物語るものである。

處がこのリビア地方は機しくも今から丁度三年前、國際尖銳線上に登場させられた過去を持つてゐる。それは或る伊太利航空機が北アフリカの伊太利領リビア國境を越へ、隣邦である埃及の内地へ墜落した事件に端緒を發したもので、表面上は單に二名の操縦士と一航空機を犠牲に供しただけの事とは云へ、即死操縦士の懷中深く秘められてゐたと云ふ伊太利軍の埃及並びにパレスティン攻略計畫を記した紙片が、埃及駐屯の英吉利軍隊の掌中に入る處となり問題は俄然重大視されたのである。

そして恰も伊太利の所謂アフリカ大陸政策にこだまするやうに翌昭和十一年の六月、遂ひに英吉利當局は長靴形の伊太利に一蹴されそうな地勢に位置する永年のモルタ海軍根據地を見限り、一躍東部地中海の要地サイプラス島に英吉利海軍の地中海根據地を急遽完成する事を決するに至つたのである。サイプラスは島民三十五萬、吾が四國地方の半分にすぎない小島ではあるが、スエズ運河に對してモルタ軍港より遙に近接して居り、従つて伊太利軍の空襲もモルタのやうに簡單に行はれ得ないと云ふ地の利を占めてゐるのである。且つそれ以上に望ましい事は、近來絶へず英吉利政府を悩ましきつてゐる例のアラブ・猶太兩民族抗争活躍の第一線たるパレスティン委任統治領も、サイプラス島からは指呼の裡に相對してゐる。

因みにアラブ民族の對猶太抗争前線の最高指導者たるハヂ・エミン・エル・フツセイニ達の一黨はパレスティン首府エルサレム郊外のウエイリングゴールに兵營然たる本據を構へ、そして稍もすれば

不俱戴天の猶太民族側に傾き易い倫敦當局を牽制すべく敢へて對伊親善の態度を示し、條件次第によつてはこの騒擾渦中のパレスタインをして伊太利軍の近東地方進攻の上陸地たらしめる可能性さへも多分に匂はせてゐたものである。

そのやうなアラブ民族運動中でも最も尖鋭化した分子の暗躍するパレスタインに對しても、サイプラス島の新海軍根據地を建設する事は英吉利側として必要を痛感させられたものに相違なかつた。

地中海の南沿岸に力強く横たはり伊太利の南方大陸政策完成への強固な踏み石とされてゐるリビヤは、本國伊太利半島の三倍半を超へ（吾が日本内地の約三倍）る廣大な領域を占め、佛領ツニシアと埃及王國との中間一千哩に互り地中海の大道に面してゐる。

そして土着民七十五萬と、駐在軍隊を除く一般の伊太利人六萬とは、この大砂漠地帯に近代的生活を營む事を目標にあらゆる苦心をつゞけてゐると云ふ。

元來リビヤの大地は赤褐色の岩石地帯によつて殆ど占められて居り、殖民するにしても栽培開始に先立ちダイナマイト爆裂を行ひ土壤の軟化を第一にせねばならず、例へば一本のオリヴ樹を植えつけるまでには九圓以上の費用を計上せねばならないとさへ傳へられてゐる程である。従つてリビヤを伊太利の海外農場化し得るか否かは、自然の不利に對する近代伊太利の行進能力を示す好箇の指針とされてゐる。

伊太利の本國とアフリカ大陸リビヤ地方との中間に在るシシリ島（吾が四國地方の約一倍半）の

南部沿岸は地中海の國際幹線航路に直面する要地であるが、今や伊太利當局の武装計畫は着々進行し強固な空軍根據地を完成するに至り、尙そのシシリ島とリビヤ間の地中海本道の眞上に點在する小さい岩礁地帯のパンテレリア群島をも充分に役立て、以つて伊太利軍海底艦艇の出入頻繁な屯る場所とされ且つ又空軍の根據地をも併設されたやうである。

一方、對岸のリビヤ沿岸には地中海を東航して西行する外國艦船の航路に並行して、リビヤ伊太利軍の重要施設が行はれつゝあると云ふ。従つてこのシシリ島、パンテレリア群島、リビヤ大陸と一貫連鎖する武装は地中海に於ける伊太利をして強甚な地歩を確保せしむるものであり、このやうにして伊太利は地中海國際大道の中斷政策により抗爭相手國の死命を一氣に制しようと多少の犠牲をも惜しまず全力を傾倒しつゝあるのである。

故にそのやうな大勢に加へ若し伊太利がリビヤの西に接するツニシアまでも領有してゐたならば、ジブラウターからスエズへの地中海大道を伊太利は決定的に中斷する事が可能とされ得たであらう。

然し乍ら地中海南岸の要地ツニシア（住民二百五十萬・吾が日本内地の約三分の一の領域）は依然として佛蘭西に領有せられて居り、而も佛蘭西側は彼等佛國を擧げての恐怖相手たる勃興ナチス獨逸へ伊太利が刻々接近の度を深める成りゆきに對しその伊太利を側面から牽制するの必要に迫られ、ツニシア北端の要害ビザータに於ける武装施設を大強化してちつと靜に伊太利軍の長靴の先さの動きと睨み合ふ形態を呈してゐる。

リビアに限らずエチオピアに於ける伊太利軍は何れも羅馬帝國再建の霸業完成を期して只管勵まされて居り、彼等の企てる處によればかの世界に誇る地中海沿岸従走のリビア道路によつて、一舉埃及國の海港たるアレキサンドリアに迫り次いでその首府カイロを收め、別働軍はエチオピア側から英埃スタンへそしてナイル河に沿ふて埃及の大沃野を制覇する準備工作を進めつゝあり、と英吉利側では暴露的な發表さへも行つてゐる程である。

その大リビアに於ける總指揮官こそは曾つて或ひは又現に一部では依然として聲望ムツソリーニを凌ぐものありと噂されてゐる前空相のイタロ・バルボ元帥その人であり、彼は一ヶ月に二回定期的に羅馬へ愛用の三機關づき二千馬力の優秀機サヴォイアで往復してゐるが、羅馬とアフリカ大陸のトリポリタニア間の地中海横断も現在では空路僅か數時間に出でない近距離に縮められて來てゐる。

「吾々伊太利は英吉利と敢へて事を欲する者ではないが、然し乍ら若し英吉利が敢へて自己現在の分を出過ぎる時には如何に善處對抗すべきかを知つてゐる。勿論そのやうな伊英抗争は伊太利を破壊するかも知れないが、それと同時に有名な過去を誇る英吉利地中海艦隊も同様根本的に壊滅する運命に墜ち入る事は免れ得ないであらう。」とは彼バルボが先頃述べた言葉の一節であつた。

最早現代の地中海は戰鬪艦の主役時代を去り、一刻々々と水上航空機活躍の舞臺に回轉しつゝありと稱せられて居るが、英海軍と伊空軍の取り組みこそはそのやうな地中海形態變化論者の見解がどの程度まで正當か現實に答へを示すものに外ならない。

近來歐羅巴の軍事通に課せられてゐる重要問題の一つこそは、英吉利が東地中海のサイプラス島に本格的な軍事根據地を完備する曉に於いて、而もよく伊太利は現在のやうな鼻息荒い立場を持續し通せるか否かと云ふ事である。

それ程に一部からは有力視されてゐるサイプラスであるが、果して多大な影響を期待されてゐる英軍根據地が完成したとしても、そのみによつて英吉利の地中海問題全部が解決するものと見るのは些か早計に過ぎはしないであらうか。

何故ならば實質的にモルタ軍港を放棄する事によりジブラウター・サイプラス兩島間二千二百哩の地中海上線には英軍側として何らの據り處もなくなる譯であり、丁度その兩島中間に位ひする伊太利のシシリイ・パンテレリア・リビアの南北一貫の中斷政策によつて、地中海は完全に東と西とに中斷される大勢に在る現情は最早左右すべくもない事實なのである。

實に伊太利今日の態勢は、シシリイ島からリビア大陸への連鎖的軍備の強行施設を爲したへた爲め、これ以上は僅か百餘哩の公海上だけを嚴重に制禦しさへすれば地中海を東航西行する相手國の艦船を全く自己の意の儘に阻止出來得るやうにまでなつて來てゐる。

斯る大勢を達觀した英吉利側では飽くまでも實質本位に行動し現在未だ不十分な武力を賭するの危険を敢へて回避し、即ち武力による地中海大道確保の希望を差し當りは固執せず、印度・濠洲・極東地方へ來往の英吉利艦船はすべて南アフリカの喜望峯經由本位にする事としてその目標の下に着々戰

時經濟の需給圓滑を期し、南阿・英吉利間海上聯絡の所要時日の短縮を計り且つ喜望峯附近の休憩港たるテール灣も愈々年來の大築港計畫が加速度的に實現するようにさへなつて來たのである。

そして一朝有事の際には一舉に地中海經由豫定の英吉利船舶全部を南阿喜望峯經由に切り替へさせ、而も四週間に至六週間に以つて英吉利本土對印度・濠洲・極東地方との聯絡を全く從來と同様な常態に復舊出來得ると云ふ確信の下に、それ〴〵必要の處置を講じつゝある。

地中海通過の杜絶により英吉利が眞先に恐威を感じるベルシヤやイラク地方の石油さへもすべて、英軍安全地帯のベルシヤ灣に導油し南阿廻航を敢然實行し且つ英吉利國內需要に支障を來たさぬやう萬全を期してゐる。

且つ又英吉利當局はジブラウターとアデンの武装を根本的にやり直して強化を企て、同時にサイブルス根據地を内面から呼應せしめ以つて大地中海のみならず紅海の封鎖を斷行する事により、伊太利を再びアドリアティク海だけの勇者に押し戻してしまふとしてゐるのである。

最近の數ヶ年を平均し地中海沿岸各地方との英吉利貿易状態は、英吉利總輸入高の九分にも達せない有様を示してゐる。而もその九分の内でも重要な部分を占めるベルシヤ・イラク原油の南阿經由輸送の常道化さへも遂ひに決意した現今、茲に英吉利が事地中海問題に關する限り相當に腰を据え直して掛るものと見做されるであらう。

但し軍擴に全く立ち遅れた英吉利としては尠くとも昭和十三年一杯までは何とかして其場凌ぎに過さなければならぬ實勢に在り、其處に伊太利側としての行動豫算も立てられると云ふ事にもなるのである。

結局地中海は速決行動による限り伊太利側に利多く、將來へ繰り延ばされる程英吉利側に有利と考へられる。

即ち伊太利の中断政策が完全に地中海を羅馬の内海化してしまふか、或ひは又英吉利の封鎖政策が遂ひに再び地中海の王座を確立し直すか、それは兩者の機會選擇の是非如何によつて自と決せられるものであらうが、只それら英伊抗争進退の間隙に乗じ北方獨逸海軍の内容完實によりその大玄關たるバルチイック海を封鎖されたにも等しいソヴェエト聯邦の、死物狂ひで代りの出入口を南方に求め黒海から地中海に進出しようとする策動こそは問題を甚だしく複雑化せしめつゝあるやうである。

北歐バルチイック海の波濤は斯くして直接に南歐地中海海上をも搖るがす、地中海を繞る英の包圍政策と伊の封鎖政策との駆け引き亦日本海上に餘波を及ぼさぬとは既に何人と雖も斷言なし得なくなつて來てゐるのである。

六、地中海を繞る各國の立場

日本の爲めに英佛を牽制しひいては伊太利自身にとつてより適切な地中海問題を有利に展開せんと

する一石二鳥の妙策……是はブラッセルの九國條約會議に於ける伊太利代表の態度に與へられた巷評であつた。

東京隅田川の水は倫敦テムス河に通ずとは古人の言、況んや現代日本海の一波が地中海にまで及ぼされる事は當然であり、地中海の雲行き亦日本海に雨をも齎らす可能性の強められつゝあるのは何人も否定出来ない現實となつて來てゐる。

エチオピア問題以來英伊の關係は幾度となく或ひは險惡となり或ひは小康に復し、昨年初頭の地中海協定で一應晴れの状態となつたのも一瞬の事で、西班牙内亂問題の深刻化するにつれて大勢は最早暴風圏内に突き進む一方になつてゐる。

去る九月ジュネーヴ北方のニヨンで開催された地中海會議を通じても見受けられた通り、英吉利が始終各國間の取成しに躍氣となつてゐた事はとりも直さず地中海の前途に對し、英吉利が如何に多大の利害を感じてゐるかを示すものに外ならなかつた。

實に地中海あげて伊太利帝國の内海化される事こそは、英吉利側から見ればイクラ・ベルシヤの油田に對し印度に對し極東に對し英吉利本國てふ古來の立場を甚だ低減させられるもので、地中海の公道確保と云ふ絶對的な要求は尠くとも舊來の英帝國意識に據る限り英吉利の海洋生命線と彼等が絶叫するのも蓋し當然の話である。

英吉利朝野を通じその大多數は今日と雖も尙、内亂後の西班牙が赤色政體化する事を毛頭希望して

は居らない。然し乍らそのやうに生命線にも等しい地中海を、英吉利の勢力圏内から切り放し吾が物扱ひにしようとする伊太利その者を根本的な後盾として進撃するフランコ將軍の西班牙制覇は甚だ都合悪く、英吉利としては婿自體には難が見當らないけれどもその後見者とは睨み合ひの仲である爲めに縁談が纏り難いと云ふ次第になつてゐるのである。従つて英吉利の西班牙内亂に對するこのやうな焦慮工合は、例の不干渉委員會に於ける進退動作を一見すれば明瞭に察知出来るやうである。

從來地中海の西入口に大目付役然と構へその威力を發揮してゐたジブラウター島の英吉利軍港も、フランコ將軍の北上により四圍を席卷され現今ではモロッコ側と南部西班牙とのフランコ軍即ち伊太利勢力に挟まれた形勢となつてゐる。

又地中海の中央部に於けるモルタ島も英吉利海軍の根據地としてその傳統を誇つて來たものであるが、近來伊太利側ではシシリ島のみならずその南方の海上に在るパンテレリア島をも強化し、以つてアフリカ大陸の自領リビアと連鎖しモルタ英軍港を眼中に置かず一舉に地中海縦斷の策に出でんとしつゝある。

一方東部地中海に於いても伊太利側が地中海を所謂羅馬の湖水化せんとする工作は着々進められ、希臘及び土耳其の南方海上に點在する自領ドーデカニス諸島の軍備も充實されて來て居り、以上の如く英吉利が前世紀以來その威容陣を誇つてゐた地中海の根據地は齊しく評價の引き下げに遭遇させられてゐる。

そのやうな英吉利ではあるが地中海を通路とする東方に於ける利害には深刻なものがあり、且つ民主政治により國力を弱體化させてしまつた國とは批評されてゐるものゝ事一度地元の中地中海問題に關する限り、今日以上の底力は最早有り得ないと斷言する事は些か早計に失するやうである。

實利本位の英吉利は刻々尖鋭化する伊太利の排英工作に對しても容易に立ち上らうとはせず、その爲めに昭和十一年當初の英吉利軍備は伊太利軍備に比較し約二ヶ年立ち遅れの情態に陥つてゐたとさへ評せられた程であるが、然し乍らイーデン理想の幻滅に直面した機會を土臺として既に一昨年以來五ヶ年計畫二百五十八億萬圓を傾倒し本腰の再軍備に取り掛つて居り、只管軍擴競争二ヶ年の立ち遅れを取り戻そうとしてゐるやうである。

従つて再軍備が或る程度まで進行しさえすれば東洋はいざ知らず尠くとも地元歐洲に於ける利害に關する限り、今日のやうに事毎に米國の懷中を當てにし佛國の協調を豫め確保せねばならぬやうな弱點は相當に補強され或る程度まで自主的強硬な英吉利外交を豫期されてゐるのである。

地中海を繞る最大の危機は昭和十五年なりと稱する歐洲評論家の見方は上述のやうな英吉利の軍備飽和期に重點を置いてゐるものであり、最近の経過では英吉利の軍擴計畫も豫定より早くその主要部分分は五ヶ年を待たずして昭和十三年の終りまでに實現される事となつたとさへ傳へられて居り、故に英軍備に重點を置く以上地中海の危機は一年餘り繰り上げられる譯とならう。

結局その自信の域に到達するまで英吉利は何とかして現情を糊塗せねばならず反對に伊太利側とし

てはそれまでに地盤固めを了へて了はねばならないのである。

或る人はハイレ・セラシエの運命を二十年前から理詰で豫言したと云ふ、即ちヴェルサイユ平和會議によつて舊獨領土處分に對し委任統治と云ふやうな其場凌ぎの形式を採用した當時既に伊太利の不満を培ふ結果を齎せたと稱するのである。

委任統治領は殆ど全部英吉利本國や南阿聯邦や佛蘭西等の手に歸した譯で、若しその場合舊獨領土の變態的處分法たる委任統治諸領の一部が氣前よく伊太利へも分割されてゐたならば、今日見るやうな羅馬・伯林樞軸と云ふやうな獨伊提携は容易に實現され難い支障となつた事は疑ふ餘地もなかつたであらう。結局獨伊の提携強化を獎勵した者こそ獨伊自身ならぬ實に英吉利なり佛蘭西なりであつたと云ふ事にもなるのである。

伊太利本國は人口四千五百萬を擁し吾が本州地方と北海道とを合した地域を占め、毎年夥しい海外移民を南米に北米に又濠洲へも送り出して來てゐるが、現今の伊太利としては移民獎勵も大事であるけれども地元の中地中海を先づ自己の内海として了ふ事の方が伊太利民族百年の繁榮策として必要であると信じられてゐる。

エチオピア問題の一段落を告げるや間發を容れず西班牙の風雲を望見し、伊太利半島の對岸北アフリカのリビア一帯の軍備を整へ一朝英吉利と事を構へる場合には、斷然リビア寄りからブリユウ・ナイルの沃野埃及を壓倒し英埃スダンに迫りスエズ運河の實權を掌中に收めようとの體勢を強化しつゝ

ある。

且つ又親英的な動きを示し伊太利としては絶へず煩はされ勝ちの希臘及び土耳其に對しては、それら地方の海上遙かに横たはるドーデカニース諸島のローヅ島やレロス島に伊軍の精銳を配備し萬全の策を採つてゐる。

地中海が伊太利だけに都合のよい内海化される事にはマルセーユを最大の海港とする佛蘭西としても由々しき不利を感じるものであるが、佛蘭西自身としてはそれ以上に對獨防衛の爲め全力を傾倒せねばならない過去を持つてゐる。

従つて對獨工作に利ありと見れば地中海の方は最小限度までに譲歩してもよいと云ふのが佛蘭西の意圖であり、極力伊太利をして獨逸と密接にさせないようにする事が佛蘭西の地中海態度であつたのであるが、是は佛ソ同盟の締結に驚進した爲めに却つて自分から進んで獨逸と伊太利とを提携強化させるやうな結果を招いてしまつたのである。

故に今日に至つても伊太利に對する佛蘭西側の未練さは容易に失せきらず、そのやうな佛蘭西の心理状態は倫敦の不干渉委員會に於いてもニヨン會議に於いても始終表はしてゐたやうである。

ソヴィエト聯邦が地中海の沿岸の何處かに足場を獲得するかどうかと云ふ事は、取りも直さず黒海を袋小路から一躍世界の大道の一部に編入させ得るや否やを意味するものである。即ち勃興ナチス海軍に今やバルティック海の統制權を全く把握されるに至り、現状ソヴィエト聯邦の本玄關は封鎖され

たも同然となり是非共新しい海港を確立するの必要に迫られ、勢ひ南方の黒海活用の意を決しダーダネルス海峡を超越して地中海の一方に南玄關を築き上げる事を企てるに至つた。

西班牙政府軍側のバレンシア沿岸が西地中海の足場として格好な事は云ふまでもなく、且つ東地中海の奥地たる黒海を有するソ聯としては特に理想的なバレンシアに相違なく、茲にソ聯は思想と物質の一石二鳥に勇躍して西班牙内亂へ一役買つて出たのであつた。

元來ソ聯の機關紙は決してムツソリーニを攻撃せず伊太利側の機關紙も全くスターリン攻撃をやらなかつた事實は話が相反する右と左との間柄であるだけに一層珍らしいもの扱ひにされてゐたのであるが、西班牙内亂勃發を契機としてこの黒赤無難關係は勿ち吹き飛ばされてしまつた。それと云ふのもやはり兩者の希求が地中海上で交叉するやうになり、利害を直接に感じ合ふやうな現實面に遭遇したからである。

黒海に於いてソ聯と對するルーマニアもブルガリアもニヨン會議へ招請されただけあつて地中海に利害を感じるものであり農業國であり、又産油國として有名なルーマニアは經濟的に獨逸と可成り密接な關係に在つたが、軍需景氣の餘波は東歐地方の農産諸國をも潤ほしルーマニアもその例に漏れず、爲めに經濟上獨逸的であり政治上佛蘭西的であつたルーマニアから斷然自主的なルーマニアへと精進しつゝある事は見逃せない。從來政治的に絶へず佛蘭西へ依存してゐたルーマニアが既に去る十月の大演習に際し、カール王をして「佛蘭西はルーマニア軍に依存して可なり」とさへ公言せしむる情勢

となつて來たのである。

そして最近では波蘭との提携が強化されつゝあり、獨ソ間に描かれる東歐中立プロツクの南端を形成しさうなルーマニアなのである。

ルーマニアの南隣りに位ひするブルガリアは獨逸軍に加担して戦敗を喫した當時まで歴然と地中海に直面してゐた國であり、その地中海沿岸の國土を希臘に分割せられて以來は土耳其のダーダネルス海峽を通過せねば地中海の本道へ出られないと云ふ不便を忍んでゐる。

従つて確に現状不滿國の一人であるには相違ないのであるが、且つ又ボリス國王妃が伊太利王室から嫁せられた縁戚關係もありそれらの事柄は反伊よりも寧ろ親伊の立場に在る筈であるが、ブルガリアの對伊關係はそれ程に目立つた接近振りを示しては居らないやうである。

土耳其は問題のダーダネルス海峽を包擁し地中海と黒海との兩方に直面して居り地理上の關係もあるがソヴイェト側のウクライナやコウカサス地方との交渉繁げく、而も土耳其沿岸の地中海上に點々として整へられた伊領ドーデカニース諸島の武装振りは、例へそれが對土威壓の目的でないにせよ向けられてゐる土耳其側として見れば對伊交渉に緊張せざるを得ないであらう。

その點を察知してか最近伊太利外相の土耳其訪問が傳へられて居るやうであるが、それに對抗するソ聯の暗躍も看過出来ない、然らば現今の土耳其は地中海問題に關し、英伊何れの利害と一致し易いかと云へば差し當り英吉利第一と答へる情勢に在る。

希臘は膨張伊太利の弟妹國たるアルバニアと國境を接してゐるだけあり、伊太利の利害とは鋭く相反して居り且つ精神的にも親英政策を第一として來てゐる。

エチオピア問題當時の對伊經濟制裁實施に際し、英吉利の強硬態度に積極的な賛意を示した國々こそは實にこれらの希臘及び土耳其であつたのである。

地中海會議に伊獨と行を共にし斷然参加せず稍注視されたアルバニアは近來餘り國際的には存在を認められる事の多い國であつたが、アドリアテック海を距て、伊太利の背面と一衣帯水の地勢に在り又陸地の三方をユーゴスラヴィアと希臘との國境で圍まれ吾が九州地方の三分ノ二に相當する頗る小粒な獨立國である。

總人口百餘萬の中四分ノ三までが回教徒なのであり即ち回教國として宗教上では歐洲大陸中特異な立場を擁して居り、同國に於いてはカトリック教徒までも婦人の面被を容易に取りはづそうとはしなかつた程に特殊な雰圍氣が漂つてゐる。

アルバニア現在の國王ゾグは伊太利の財政的援助を基本として大正十一年以來統治者の位地に就いて居り、昭和三年に正式な國王就任の宣言を行ひ今日に至つた。

或る人々はアルバニアは實質上伊太利の一部であり、或ひは國を擧げて羅馬の老舗へ入れ質されてゐるとさへ酷評する程に、經濟的には獨立國の額面通り見做されないうである。昨年度のアルバニア國總豫算額の丁度六倍に相當する巨額な融資を伊太利から受けてゐる事だけでも、アルバニアの伊

太利依存性は窺へよう。従つて地中海に於ける伊太利の利害とアルバニアの利害との間に不一致のあらう筈はないのである。

河川の洪水氾濫を却つて豊年の吉兆として喜ぶスフィンクスの埃及王國は對英獨立抗爭五十年の歴史を有して居るにも拘はらず、地中海問題に對し英吉利と俄然密接な提携を行ふやうになつた事は誠に意外のやうでもあるが、伊太利のリビア軍備の強化に刺戟されそのリビアとは七百哩もの國境を接してゐる埃及だけに不安を感じずには居られなくなつたのである。

伊太利側では世界回教徒二億六千萬大衆の擁護者を以つて自任し宣傳し、以つて回教國埃及の對英接近を極力阻止しようと努力してゐる。然し乍ら英吉利側も負けて居らず飽くまでも名を捨て實を取るの方針に基づき、世間體は全く平等な新英埃條約を取り結び先づ埃及人朝野に齊しく世界の英吉利と對等であると云ふ誇りを與へ、埃及國內の駐兵權をあつさり放棄しその反面スエズ運河寄りに新に駐兵權を強化し以つて伊太利アフリカ大陸政策の次の出足如何と睨んでゐる。

英吉利側の東部地中海に於ける現在までの軍備状態は、この埃及とサイプラス島の新英軍根據地帯と問題のパレスティンとの三地點の聯繫を強め萬全を期そうとしてゐる。

但しその三角形陣の一點パレスティンに於けるアラブ・猶太兩民族の抗爭を逸せず伊太利側は例の回教徒の味方伊太利を高調し、回教徒であるアラブ民族と提携せんとする行爲が根氣よく行はれてゐる有様であり、強ちパレスティン全體を英吉利側として期待は出来ないやうである。

且つ又地中海につゞく紅海の西沿岸エリトリアの軍備を強化した伊太利は、第二工作としてそのエリトリアに對する紅海東岸のサウデイ・アラビア王國へ呼びかけ、回教徒の味方伊太利と云ふ事を強調し親善提携を企て以つて紅海の統制權をも一舉に收めようとしてゐる。

然し乍ら新興のサウデイ・アラビアは歐洲大戰當時から時としては大英外交に後塵を吸はせた程で強ち親英派とは見做せないが、同時にその新興經濟組織には同じマホメットを信奉する埃及國の名稱による英吉利系統の資本が可成り根強く蔓つてゐる事も輕視されない現情に在る。

少年國王ビーターを推戴するユーゴスラヴィアはその南部國境に伊太利の出店のやうなアルバニア國と對峙し、又一衣帶水の向ふ岸には時めく地中海の立役者伊太利本國を控へてゐる。

前國王アレクサスアンダーがマルセーユの路上で不慮の厄に遭遇されてからのユーゴスラヴィアは、從來の對伊恐怖のみならず對伊反感の念が非常に昂められたのである。元來が親佛國なのではあつたがその事件勃發以來のユーゴスラヴィアは、伊太利に對處すべく反動的に經濟的にも政治的にも英吉利を楯とする傾向が濃くなり、流石の伊太利側も自國の背後に迫るやうな地勢を擁するユーゴスラヴィアの巧みな外交策には困惑させられたやうである。特に現今の伊太利は後髪を引かれるやうな立場は絶対に禁物として居る事とて、遂ひに辭を低うしてチアノ外相を outgoing させ態々ユーゴスラヴィアと暫時の不可侵協定を取結んだのであつた。夷を以つて夷を制すると云ふ外交術策は必ずしも隣邦支那に限つた話ではなく、最も鮮な近例こそは英伊を取扱つたユーゴスラヴィアに見出す事

が出来る。但しこの國は對內的に深刻な少数民族問題を胎藏してゐる爲めに、一朝地中海上に暴風襲來の場合は却つて内部から早く出火するかも知れぬ危険が多く、英吉利としても伊太利としてもいざと云ふ時には餘り當てにはならない大勢に在る。

終りに遙か北海側の獨逸が地中海に感じてゐる利害は如何なるものであらうか、現在の利害は他國に比すれば甚だ漠然たるものであり畢竟將來の利害を見越して地中海問題に一役買つて出たものとの評が與へられてゐる。

獨逸として次に實行せねばならない對外國策たる舊殖民地の回收工作に際し、その最も現實的な目的地二領土の内一つこそは問題の地中海を大道とする東アフリカのタンガニカに外ならない。然し乍ら未だ舊領土を回收せぬ今日既に殖民地向き専門の花嫁學校さへも國內各地に開設しつゝある積極的な獨逸意識からすれば、勿論明日の利害は今日の利害と云ふ事に見做される筈であらう。

この前後の事情は例の地中海會議招請に對する婉曲な拒絕回答が如實に物語つて居り、即ち獨逸は地中海問題につき欣然列國と協調する用意を有するものではあるがソ聯の伊太利に對する挑戰的態度に鑑み出席を辭退すると稱してゐた。

今や伸展伊太利が地中海を自己の内海として縦横に振舞ふ必要と、英吉利が地中海を飽くまでも自己の大道として確保する必要とは何れも現在の國內情勢に立脚する以上絶對的なものであり、而も兩者の必要は何らの犠牲なくして同時に萬全を期し難い因縁に置かれてゐる。

従つて英・伊を立役とし獨・佛・露をそれぞれ脇役に加へた地中海劇の舞臺は今後益々波亂重疊の場面を幾多演出すべく、それに對し拍手を送る者は客席の列國に非ずして樂屋裏に跳梁する戰神や大道具小道具を引き受けてゐる猶太財閥に外ならないであらう。

七、地中海の前途

自由主義的な英吉利の海軍を背景とし民主主義的な佛蘭西陸軍の援助により、ガリバルデーの伊太利統一が爲されたのは既に一世紀も過去の情勢である。

歐洲大戰に際し英吉利はその富と力とを以つて佛蘭西はその陸軍を以つて、伊太利の反獨反埃匈のアルプス越へを應援した。それにも拘はらず戦後ムツソリーニのファツシヨ伊太利の勃興により佛伊の關係はお互ひに疑心暗鬼を重ね第三者の想像も及ばぬ程に險惡を極める事殆ど十年の長きに亘つてゐた。

然し英伊の關係は例のエチオピア問題が起されるまで、全く平調な友好状態がつゞけられて來たのである。

ツアナ湖の水源及びジュネーヴに於ける指導權維持に推された英吉利政府は、その好むと好まざるに拘はらず伊太利と尖鋭化しなければならぬ破目に置かれ、一方伊太利側として見ればこの機會

にモルク軍港を一舉に衝いて英吉利の地中海に於ける勢力を一掃し吾が物に振舞ふに如くはないと考へた。

けれども地中海の西關門ジブラウター要港に最後の開戦準備たる病院船までも仕立て乍ら、英吉利海軍は遂ひに對伊制裁の砲火をきらなかつた。それには英吉利海軍の自信薄もあるにはあつたであらうが、他國他人の爲めに最早戦禍の犠牲を拂ふなと云ふ叫びが英吉利の社會層に強い底流をなしてゐた事も見逃せないやうである。

既に伊太利はエチオピアの大部分を獲得してしまひ、昨年英吉利政府はハリファックス卿とイーデン外相をして上下兩院から英伊國交調和の放逐をさせたりしたが、其後一瞬と雖も英吉利側も伊太利側も地中海に對して些かの安全感を持つて居らない状態である。

伊太利のムツソリーニは愛嬌チアノ外相を獨逸・埃太利・匈牙利の各國へ派遣して或ひは伊埃匈の結束振りを他に認識せしめ、或ひはナチス獨逸との親善振りを世界に喧傳し、歐洲大陸從斷の聯合政策を掲げて英佛方面への示威おさく／＼怠りない。且つ又「英吉利は民主々義により國勢を殺ぎ平和主義の爲めに民情を弱化し既に再び能はざるの國家である。即ち地中海に於ける今日の英吉利利権は明日の伊太利利権そのものを豫約するに外ならない」と云ふ風な僥倖的の國民教育が伊太利の内面に擴められてゐる。茲に再び近き將來起り得べき英伊紛争の一因が栽培せられつつあるやうだ。

毛髮を刈り込められ牙を引き抜かれ表徴ライオン變じて老犬と化すなどと比喩されてはゐるが、東

洋はいざ知らず事西洋に關する限り英吉利は未だに第一の國家である點は何人も否定出来ない實際である。

即ち最近英吉利は埃及との新條約取交しにより名を捨て實を採り、而も埃及の心證をよくし埃及に於ける英吉利の立場を改善し、且つ又スエズ運河寄りに駐兵權を確保し或ひは長靴國伊太利に蹴られる事を嫌つてモルク軍港第一主義からサイプラス島本位に變り、只管地中海に於ける地盤固めを仕直してゐる。

伊太利當事者の民衆に對する「英吉利最早恐るゝに足らず」と云ふやうな鼓吹は志氣向上の點からしては必要でもあらうが、それに關聯して不可避的に英吉利側の對伊不信及び對伊武裝を強化せしめつゝある。伊太利は未だ歐羅巴の地元位に位する國であり、ファツシヨ伊太利に果してその自重があれば實に地中海の前途は平穩なりとも云はれ得やう。

今や歐洲列強は英獨佛伊を初めとして各國とも何れも三すくみ四すくみの情態に在り、恰も重複する庄屋・獵人・狐の馳け引きのやうな動きに没頭しきつてゐる。

大戰直後、獨逸の疲弊しきつてゐた當時は、勃興伊太利と佛蘭西との折合ひが悪く爲めに佛伊關係は吾々第三者の想像以上に尖鋭化してゐた。然しナチスの出現により強力な獨逸の復活に直面した佛蘭西は、同じくナチス獨逸の埃太利併呑に對し共に恐威を感じ初めた伊太利と從來の、犬猿の間柄を水に流したかのやうにして對獨歩調をしばし同一にとつた。

戦前に比較して戦後好調にある佛蘭西とは反對に、世界の王座を滑り落ちた英吉利は佛蘭西が餘りに繁榮する事を快く思ふ筈はない。「自分達が犠牲を拂つたからこそ彼等はその惠澤を蒙つてゐるのではないか」と云ふ意識が英吉利人の對佛感を支配してゐる現情である。

従つて佛蘭西がすべて敵對的に接する獨逸に對し、英吉利の態度は寧ろ同情に近いものであつた。鶏と卵と何れがこの世へ先に現れたかと云ふ先祖争ひのやうでもあるが、佛蘭西としてはさういふ英吉利の對獨態度を面白く感ずる譯はなく、返答的に時によつては英吉利の折角な願ひも敢へて拒否するやうな場景が展開されるのである。例へば一九三一年（昭和六年）の英貨金本位の危機に際し、近くは又エチオピア問題に於けるが如く佛蘭西は敢へて英吉利と行を共にしなかつた。

さういふ情勢の下に起されたエチオピア問題こそは、ハイレ・セラシエ皇帝として誠に不運な極みであつた。

英帝國主義者達は、英吉利島の歐洲大陸からの孤立をむしろ光榮の孤立としてそれを機會に英帝國のゆるんだたがの締め直しを強調してゐるが、何れにしても佛蘭西が餘りに強大化する事は勢ひ英吉利島の歐洲大陸へ從屬を餘儀なくされるので、この點英吉利として最も眞剣に手加減しなければならぬのである。

従つて英吉利としては例へ伊太利と力争ひをして勝つた處で昔の戦ひと異り多分の犠牲はまぬかれず英吉利自身の犠牲は例へそれが僅であつても相對的に局外佛蘭西の地位向上をもたらせる。それ故

に佛蘭西から相應の實質的協力が無い限り、英吉利單獨で伊太利は云ふまでもなく何れの國とも戦ふ決心がつかねたのであつた。

エチオピア問題の頃、地中海に面する希臘は政治的に親英な立場から、又土耳其は反ファツシヨ的な立場から進んで英吉利との對伊行動開始の準備をしたものである。一方佛蘭西は英吉利の親獨的な傾向を無視してまでも、好んで伊太利と對立する勇氣は昨今夢想だにせられない處である。

然し乍ら獨逸は現在でこそバルチックの制海権だけしか持つてゐないと見られてゐるものゝ、來るべき第二の進展は當然に工業原料を海外に求め、委任統治の諸領をめぐり英吉利との摩擦を起す必然性が濃厚である。その難局を見透してかヒットラーは一昨年來、ナチス第一の外交家と評せられ又英吉利側にも概して人氣のよいリイベントロップを駐英大使に仕立て、對英工作に怠りなかつた。

獨逸と伊太利との關係は近來好調のやうに見受けられるが、事中歐特に匈牙利の問題に到れば是又絶對の親善とは稱せられないのである。

且つ又獨佛の關係も、勢力さへ充分に回復すれば獨逸の對佛威壓は既に歴史的の行事と見做されてゐる。

伊太利も對アフリカ政策の第二段階に入れば當然に地中海を縦横に振舞はねばならず、それにはどうしても地中海に於ける根強い英吉利の勢力を驅逐せねばならず、勢ひ一舉に西班牙半島に地盤を築こうとするやうな試みも敢へて行はれる事になるもので、英伊關係の再悪化はたゞ時期の問題とされ

て居る。

尙それに關聯してムツソリーニが、伊空軍の總元締めであつたバルボを敬遠し又はグランディを遠去けて愛婿のチアノを重用すると云ふ態度は確にムツソリーニ政權の強化を意味するであらうがその反面次第にムツソリーニ政權が弾力性を失ひつゝある事も留意せねばならないであらう。

獨逸とソ聯とに挟まれてゐる波蘭は從來親佛國であつた事は著名でありダンチツヒ隣りの回廊を辿つて一時獨逸と可成り險惡ならみ合ひをつゞけてゐたが、其後漸次國粹化して最近では佛蘭西よりも寧ろ獨逸と親しく猶太排斥運動もナチスに劣らず實行した程である。

ルーマニアとチエツコスロヴァキアとは、獨逸或ひは伊太利に對する恐怖の同病相憐れみから歩みよりを深め、從來の萬事佛蘭西依存主義から次第に自己本位の動きに轉じつゝある。

ユーゴスラヴィアは膨張伊太利に恐威を感じ自然と親佛及び親英の傾向を強めたが、最近に至りその親英傾向が對伊牽制の役目を果して伊太利・ユーゴスラヴィア會談となり、兩國の關係は差當り平靜を保つてゐる。希臘亦同様であり、ソ聯と近接する土耳其は絶へず反伊の態度を持しつゝある。白耳義には、和蘭から白耳義・ルクセンブルグ・スキスを一貫し、獨逸佛蘭西の二大對立國間に一大中立聯邦を結成しようとする運動が勃興し初めてゐる。又ナチス獨逸・ファツシヨ伊太利及びソ聯赤軍の角逐實驗室に利用されたと云はれる内亂西班牙は、何れにしても佛蘭西の背後を動搖せしむる存在である。

斯様に歐羅巴の大陸上だけに於いても縦横斜に錯綜する各國の對抗状態を表はしてゐるが、結局は英伊と佛獨露の描く抗爭十字火によつてその錯綜を清算せしめられる趨勢に在る。

歐洲の平和克服以來既に二昔、國際聯盟主義の理想は脆くもレーマン湖底深く消え去り、幾多の争亂再發の危機は歐羅巴あらゆる國々を動搖せしめてゐる。それであるからせめて地中海だけは世界の公道として平和を確保して置きたいと云ふ考へが、地中海に利益を有する各國に及ぼされ特殊な申合せ運動の試みも現今の地中海上に漂はされてゐる。

けれども波亂を歐洲大陸にのみ止めてそれに接する地中海を平和に保たうと云ふ事は、陸と海との大氣流通を否定するにも等しく老練な英吉利外交家達といへどその實現或ひは成果に期待出來得ないであらう。

從來地中海は空青く水澄み、英佛海峡や北海に比較して潜航艇の苦手場所とされてゐる。然しナポリに望むヴェスヴィオ火山の灰塵は一朝にしてよく平洋を濁浪の修羅場と化するが、今や地中海を控へて英伊兩國の政經關係は鳴動昂まりヴェスヴィオ以上の大爆發を暗示せしめつゝある。古代廢墟の都「ポンペイ」の現代語は羅馬であらうかそれとも倫敦であらうか、その答へを示す歴史の一頁は繕かれようとしてゐる。

第四篇

英本國と北米大陸

英佛と獨伊に挟まる米國の苦惱

英米提携強化の二大障害

英米交渉とハル長官の横顔

英帝國を賭する對米提携の強化

英米提携とモルガン財閥

英米佛提携強調の前途

一、英佛と獨伊に挾まる米國の苦惱

米國きつての自由貿易主義者ハル外相を昭和八年以來あれ程に手古摺らせてゐた鐵壁高關稅主義の英吉利當局が、恰も獨伊の提携強化に脅された善後策でもあるかのやうに、俄然輸入稅引き下げを表面上の主目的とする所謂英米五惠通商協定を容認したと傳へらる。

然し乍ら、去る十月五日シカゴに於いて爲されたルーズヴェルト大統領の所謂積極平和演説を拍手歡迎した以上に、英吉利朝野一部の人々が熱狂する程眞にこの一事を以つて英米提携が強化され得ると信ずるのは甚だ早計に失するであらうと思ふ。

即ち英吉利としてはチェムバレン首相の政治的信條たる保護貿易主義を敢へて削り而も沸き上る自治領各國の對英不滿の言動を豫期し、經濟的に多大の犠牲を拂ひ讓歩しても且つ尙政治的に米國との提携を希求するものであるにも拘はらず、それに反し米國側として見れば特に民主黨政府として見れば國內の農業問題解決の一助とすべく専ら經濟的要求に基いたものであり、英の政治的に對し米の經濟的と云ふやうに英米提携強化の立脚點は英米それ／＼根本的な相異を土臺にしてゐるのである。

現代のやうに突發事件の多い不安定な時代に於いて、米國が來るべき第二次歐洲大戰にのぞみ果してよく局外中立を持續仕通せるかどうかと云ふ見越しを下し得る者は、米國々内にも居らないやうで

ある。

殊に最近數ヶ年來米國のあらゆる指導階級はこの問題に就いて論議を重ねつゝあるが、米國の中立問題こそは一般米國人自身が思惟するよりも遙に進退困難な複雑したものとなつて來てゐるのである。從來米國が常に他國來襲の好箇の備へとしてゐた米大陸地理的の孤立政策は今日と雖も未だ或る程度まで有効可能のものとされ得るが、その安全性は列強諸國の空海兩軍の發達により著しく低減せしめられた事は否めない。

米國は去る第一次歐洲大戰に際し社會的及び經濟的影響に押されつひに參戰せざるを得なくなつた。而もそれから二十餘年後の今日はその往時にも増して米國を參戰せしめんとする傾向が米國の經濟現情に濃く描き出されつゝあるやうである。

米國外務次官格のサムナー・ウエルスなども、若し北半球に戰亂が擴大すれば例へそれに直接かゝり合はさなくとも米國は種々な被害を及ぼされるに相違ないと稱してゐる。

又大統領側近の外交官アドルフ・ハールも、多分米國は世界の戰雲外に立ちつゞける事は出來るであらうが世界それ自體の外部に自己を確保するのは不可能である。即ち第二次歐洲大戰の局外に立つ事は出來てもそれによつて惹き起される國際經濟機構破壊の局外に立つ事は至難であらうと述懐してゐる。

去る昭和八年ルーズヴェルト・ハル一派が初めて大統領選舉に勝つた當初の彼等として、やがては

ニューデイルの限界を海外へ普く及ぼす事を夢見てゐたのは寧ろ當然であつた。そして政權を掌握するや否や倫敦に通貨安定を主題とする世界經濟會議の開催を企てたのであつたが、この會議が大失敗であつた事はハル外相其後の對外交渉方法に革新を來たした點を見ても明瞭であり、現情に於いて利害相異なる各國を一堂に會せしむるの愚を體驗し個別的に一國づゝとの交渉を進め可成りの成果を重ね、對英互惠通商協定は實に現米國當局として第十七番目の交渉相手國に相當して居るのであつた。彼等は中立法の發布に際し、一圓の豫防費は治療費の十圓にも二十圓にも相當するものであると云ふ意味の説明を行つてゐた。

そしてルーズヴェルト大統領の第二次政權が確實となるやそれは國內に於けるよりも寧ろ海外からの信頼を深める結果となり、勢ひ彼等としても再び世界各國の競り合ひを平和的に解決し得る唯一の立場に在ると云ふ自信を強めさせられたのである。

且つ現代に於ける民主主義諸國中の隨一として彼等米國當局が強調すれば、恰も去る昭和十一年十二月ラテン・アメリカの共和諸國がルーズヴェルト大統領の聲音に多大の魅力を感じたやうに、歐洲大陸の諸國をも自説に傾聴せしめ得るであらうと信ずるに至つた。

然し乍らそれにも増して、歐洲に於ける集團保證制の動搖や舊稱國際道德の再檢討運動及び底知れず深刻化する軍備競争の擴大に直面し、なまじ歐洲大陸との係累を今更結び強めるやうな事は却つて米國側に不利をより多く招く豫感溢れ互惠條約普遍化による世界平和確立の運動も容易に歐洲まで及

ばし得なかつたのである。

そして昭和十年・十一年・十二年と歳を追ふて増補され強化された中立法の肥滿振りは、實に上記の經過を反影したものに外ならなかつた。

けれど中立法一本槍の孤立主義者達すら未だ諸外國とあらゆる關係を絶つ場合の結果に就いては確たる論理的の結末へも到達して居らない通り、現金引換買入持歸へり主義の現行中立法は僅か二ヶ年間のみの暫定的な足場の頗る落着いて居らないもので、昭和十四年には再び米國社會を通じ論議の焦點とされる事は疑ひもなく、現にそれらを作り上げた人々自身でさへも中立法なるものにより果して目的通り米國が眞の中立たり得るか否かには多大の危懼を抱いてゐる有様である。

従つて大正三年から大正五年まで僅かの短期間に於ける巨利に有頂點となつてしまつたばかりに、遂ひにその限度の境ひを自ら破つて歐洲大戰の渦中へ不知不識入り込んで了ひ、その酬ひの遙に深刻で長期に涉つて苦しまさせられた事を認識し來るべき歐洲再亂にはその轍を踏むなと云ふ聲が政界に限らず財界にも強められ米國の景氣を形成しつゝある。

外交通のピットマンも「今や世界各方面の争鬪渦中に在る國々の多くは從來の常識に即する國際法などには餘り氣を煩はさないやうであるが、この風潮は米國にとつて非常な危険信號に外ならず將來の世界大戰に際し米國の安全防禦を強ち國際條規にのみ依存出來なくなつてゐる事を物語るものである」と稱し識者の善處を要望しつゝある。

約言すれば米國の英獨佛伊抗争に引き込まれまいとする現行中立法は、去る歐洲大戰中に續發した參戰誘惑の諸原因を再考し逐一それらを敬遠すべく盛り上げられたものであつた。

先づ歐洲大戰中に英佛伊軍側へ供給する軍需品を積載した米國船舶が獨逸軍側に撃沈され多數の米國人船員が生命を夫つた。それに鑑み抗争兩國何れに對しても米國船舶が軍需品を輸送する事は中立法の發動により米國々内法を以つて禁止されるやうになつた。

又抗争當事者兩國から通告あれば大統領の名に於いてすべてそれらの物資商品表を作製公告し、その表に該當する貨物は一樣に軍需品と見做される事となり米國船舶での輸送は不可能とされるのである。

次に歐洲大戰中、交戰國何れかの國籍を所有する旅客船で所謂平和な旅行をしてゐた米國人が可成りに死傷した、これに對しても今後は外交的使者軍人新聞記者等を除き一般の米國人は交戰國何れの船舶による旅行も禁止される事となつてゐる。

又軍需品を積載してゐた爲めにその軍需品受取國と反對側の抗争國により船ごとそつくり沒收され米國の船主は多大の損害を蒙り昂憤を禁じ得なかつた。故に若し現金を持つて來なければ賣らぬ且つ又買人側が船を持つて來なければ、品物を渡さぬと云ふ政策を確立すれば、それら歐洲大戰中に欲せずして加はらなければならなくなつたやうな脅威や昂憤の嵐を米國々内に捲き起さないですむと云ふ解釋が下されて居り、軍需品は勿論禁止であるが一般非軍需品ですら米國の海岸を放れる前に外國側

へ受渡し完了を目論んである。

又大戰の當初米國の金融業者達は英佛伊側へも、獨逸側へも軍需品買入資金の貸出しを行つた。勿論それらの貸金は米國から改めて英佛伊獨各國へ現送された譯ではなく、全額共米國自身の軍需業者を熱狂的に濕ほしたのである。

爲めに表面から見た米國經濟界は自己の關係せぬ交戰中の諸國へ貸出し重複する利益を殆ど獨占したかのやうであつたが、處が豈圖らんや當初三年程の黄金時代を除きこの貸金所謂「對米戰債問題」は歡喜時期に十數倍する長期の苦惱を米國に與へてしまつた事は衆知の通りである。

従つて最近の中立法は如何なる對外戰國に對しても或ひは又それら政府の代理機關に對しても、米國人は貸金する事を禁止される手順となつて來てゐる。

彼のウキルソン政府は歐洲大戰の勃發に際し米國の局外中立確保を苦心するの餘り、例へば米國商船が武装して航行する事の可否などに就いても幾度となくその政策を改變し却つて非難された程であるが、現今の中立法は米國船舶の海洋航行中交戰諸國何れの潜航艇より襲撃を受ける原因となるあらゆる要素の禁制や除去に萬全を期してゐる。

且つ又米國が未だ中立に在つた歐洲大戰當時英佛聲援資金とか獨逸後援基金とか交戰國何れか的一方に對する援助運動が、それら戰亂歐洲各地からの移民の子孫である米國市民間に入り亂れて氾濫し、爲めに國內到る處で小競り合ひを繰り返へした苦い經驗を各自未だに忘れきらず、そのやうな事に對

しても今後は政府から豫め特別の許可を受けない限り例へ戦敗國側に對する醫療寄附金の類ひとても絶對に認められない事となつたのである。

現行の中立法は西班牙内亂の勃發に關聯しても増補されたものでそれ以來一國の内亂に對しても適用される事となり、若し或る一國の内亂が米國に波紋を及ぼす懸念のある場合には隨時發動されるのである。

但し一つの途外例として中南米に於ける共和諸邦の一國が中南米以外に在る國と抗戰する場合、この中立法は適用されずその中南米の一國が中南米以外の或る國と提携を行はない限りは、米國として武器彈藥に至るまで援護し以つて中南米諸國の米國依存第一主義を強化せんと計りつゝある。

従つて中南米の或る共和國が歐洲或ひは東洋の一國と提携を企てると云ふ事こそは、その反面尠くとも米國の感情や勘定からは全く離反するものであると覺悟を極めなければならぬのである。

又來るべき米國中立法の改訂に際しては、中南米の一國に内亂勃發の場合に外國からの干渉を豫防すべく米國がその一國を積極的に封鎖する案も増補されるものと見られて居り、即ち米國としては革命の容易に突發する過去を持つ中南米諸國に黒赤兩獨裁勢力の活躍する間隙が多分にある事を心痛させられてゐるのである。

かの歐洲大戰は現代の米國人を誘導する唯一の體験であり彼等として見れば種々な外交戰に對しては兎に角、自分自身の血肉までを賭して東洋の風雲に突入すると云ふ可能性は稀薄に相違なく、寧ろ

それに近い程度の元氣さがあるとすれば英佛獨伊の角逐する歐洲第二次戰の方に一指を染める傾向が強いやうである。現に米國の感ずる物質的利害などにしても、東洋に對するよりも歐洲各地に對するものゝ方が遙に重大である事實は何人も否定出來ない。

即ち彼等米國人の大多數は、尠くとも歐洲に於ける争亂の趨勢を見通し得るのであるが、東洋に於ける紛争に關しては果してそれが如何なる分野を展開するものであるか見通しも不充分であり、甚だしい批評によれば彼等は東洋昨今の紛争に深入りする道順さへ明瞭に把握して居らないのである。

若し現在の米國に向つて、英佛へ組みするかそれとも獨伊へ組みするかと強ひて即答を求むるとすれば、大多數の常識論から推せば同じ民主主義政體の英佛側に同情し易いやうでもあるが、獨裁氣分濃厚な現ルーズェルト政權下に在る限り米國輿論が俄然として獨伊側に傾く氣配は必ずしも絶無ではない。

元來米國が事更に中立法を實施せずとも英吉利側に比較して輸送艦船の尠い獨伊であり、又英佛側に較べ買出し資力の劣る獨伊側としていざ米國を利用せんとする限り英佛側より誠に割が悪い立場に置かれてゐるのである。従つて三年間もみ抜いた中立法を今尙刻々とそれへ増補しつゝある米國自身の状態こそは、兎角に實質的不中立さを合法的に覆秘せんとするものであるとて外部から非難され易いのである。

歐洲大戰當時米國が未だ局外中立に在つた頃の歐洲各國から爲された對米宣傳振りは非常に深刻味

を帯びたものであり、遂にその影響を受けた米國輿論は二つの對立を形成し國內的困難に襲はれた事は一二に止まらなかつた。

現今はその時以上に外部からの對米宣傳は容易となつて來て居り、外來の新聞雜誌類を例へ強制的に沒收するとしても、大西洋を易々として超へるラジオ放送の電波までは沒收不可能である。

従つて自負心の強い米國の人々とは云へこれら自由自在に火花を散らせて放送される歐洲各方面からの宣傳に對し、飽くまでも耳にせない筈もなく、又全然不感性で押し通せる筈もなく、結局數多交戰國の何れかに好意を感じ或ひは反感を抱くやうになるのは當然の事で、勢ひ米國內はその好むと好まざるとに拘はらず分派をそれく生ずるに至り及んではその多數派に引摺られそうな前途は強ち否定出來ないであらう。

現行中立法は米國の關與せぬ交戰諸國何れからの要求をも容れて物資の輸出禁止の手續を採る事になつてゐる爲めに、これを實際に發動せしむる場合には先づ米國のあらゆる輸出物資が制限され禁止されるものと見るのが至當であり、従つて米國自身の經濟生活はその結果可成り悪影響を受けるものと考へられるのである。

然し中立法の信奉者達は、米國が實際に參戰させられて拂ふ犠牲に比較すれば、輸出貿易の停止による犠牲の方が遙に輕少なりと説いてゐる。

小麦や棉花栽培の農業者・銅鐵業者・石油業者などはとりわけ現行の中立法發動により直接の悲觀

材料を與へられる事は疑ひもなく、對外貿易の支障は如何なる中繼國利用の便法を急設するとも平靜の輸出量にすら達せなくなるのは免れず、勢ひ國內市場の暴落・貨銀の引き下げ・失業者の氾濫を招き結局中立保障の虎の子である中立法も、對外的に政治的價値を發揮するとは云へそれと同時に對內的に經濟的不安を誘發せずには置かなくなり、實施後幾何も經ずして戰時國向け物資禁輸制の撤廢を迫る輿論が沸騰するであらうとの見方も道理あるやうである。

然し乍ら例へ中立法の鐵壁を以つてしても米國は中立を保ち得ないと云ふ事は上院のポラー一派によつても強調されてゐる處であり、死物狂ひの爭鬪國（獨伊と假定される）は爆撃機を一氣に米國の諸港へ飛來させ今や米國の業者から現金引換へに軍需品を買ひ受け自分の船で持ち歸へらうと拔鎗しつゝある相手國（英又は佛と假定される）の輸送船隊目がけての襲撃戰が展開されるであらうと稱してゐる。故に例へ米國自身には嚴然たる中立法があるとしても、現金持參で品物を引取つて歸へらうとする國々は單に自己の運送船だけ引具して來ては實用をなさず、護衛艦の外に航空母艦さへも一一隨行させなければ安心な買ひ物は出來ない現狀となつてゐるのである。

このやうに近代の防衛意義の積極的解釋は例へ米國の海港内でなくともその領海外間際と云ふ殆ど米國沿岸にも等しい地域に於いて、米國が關與せぬ歐洲二ヶ國間の戰鬪が本格的に行はれ得る事は想像に難くなく、そのやうな場合に望んでもよく米國は吾れ關せずの態度により中立を持續し通せるのか、この點に就いては未だ米國識者達も確固たる答を鈍らせてゐるやうである。

且つ又産業方面の權威者達も、争鬪諸國への輸出禁止は結局めぐりめぐつて米國近代生活に不可缺な錫・ゴム・マンガンの必需輸入品に對して邪魔が入る事を豫想せねばならず、それらの不關知戰亂が永引いた場合米國は名目的な中立に踏み止まれるかも知れないが、中立法の發動により却つて不利を蒙らされた諸國は期せずして苦しまぎれにそれら必需品の對米流入を阻止せんとする事は有り得る問題で、結局現行中立法なるものは米國に政治的満足をもたらせ産業的空腹を惹起するものであらうと豫測しつゝある。

何れにしても米國社會に現存する中立法を最も有利に活用出來得る立場に在る國こそは英吉利であるが、その英吉利國內に於いては昭和十二年中ですら米國の孤立政策はこの調子であるから更新期の昭和十四年に至れば必然に一層孤立化し、結局現在でこそ獨伊に比較して稍々英國に有利な中立法を擁する米國へも餘り依存出來なくなるのではないかとの懸念する者が尠くない。

チェムバレン英首相が父子相傳とする保護貿易策の一部を例へ獨伊側からの重壓あるにもせよ、遂ひに米國へ對して讓歩せんとするに至つた事は實に英吉利として最も歐洲大陸の國際的危機と豫想する昭和十四年に、時を同じうして歐洲政局に多大の影響を及ぼす米國の具體的態度即ち中立法が更新される場合をも考慮して、先づ現實に善處して置こうと云ふ動きと解釋せられてゐる。

然らば何故に彼等米國朝野の大多數は擧げて斯くまでも中立法を繞り苦惱しつゝあるのであらうか、即ちそれは米國社會に於いて米國を歐洲第二次大戰の局外に保たうとする如何なる試みも熱心に取扱

はれると云ふ表はれの一端なのである。

けれど若し不幸にして歐洲に戰亂勃發せば例へその渦中に捲き込まれずとも、現状の米國社會は多大の被害を蒙る事は最早免れ難い成りゆきとなつて來てゐる。

それを充分に認識してかハル米外相は中立法よりも互惠通商條約の世界普遍化に全力を集注し、既に中南米を主として英吉利聯邦のカナダ自治領國をも包含した十六ヶ國との個別的な成果を獲得し、今又その普遍化途上の要衝の一つたる關稅屋英吉利の障壁低下を企てつゝあるのである。

幸ひにしてハル外相を矢面に立てるルーズヴェルト政權が、歐洲に於ける一二國家のみの政治的の勝とならず飽くまでも所志の國際自由貿易の再現に向つて公平な努力を続けるならば、たゞに英獨伊佛の尖鋭化を阻止するばかりでなく米國自身の慢性的に苦惱する局外中立問題をも自然解決するであらう。

但しなまじ歐洲の一二國家とのみの互惠條約を締結し以つて威壓平和事足りとするやうな邪道に迷ひ込むやうな事があれば、それこそ中立法の希求する處とは全く反對な事態を米國々内に惹起する必然さを米國要路の人々は重ねて認識して置かねばならないと思ふのである。

二、英米提携強化の二大障害

……吾々は反戦の立場を堅持し如何なる同盟協約に對しても不賛成であり、飽くまでも混亂歐洲の内部的抗争に捲き込まれる事を回避せんとする者である。……是は去る英王戴冠式に米國使節として渡英したジェラードが、倫敦に於いて折柄開催間際の英帝國會議を横眼で見乍ら挨拶した言葉であつた。

從來、英語常用國同志の間柄として又二大民主主義國と云ふ立場からして、或ひは又所謂富者の憐みを共通する人々として強調された英米二國の提携振りは、曾つて時により騎虎の勢威を發揮しかけたにも拘はらず最近では却つて逆行の徴さへありとも評せられ、尠くとも數年來足踏みのみを續けさせられて居る事は如何なる譯であらうか。

既に二十餘年を経過した今日未だに何ら根本的な解決を見ない例の戦債問題が、その英米提携強化運動に際し最大の障害となつてゐる事は云ふまでもない。

術を廻らし人事を盡くして借り出したものの歳月の遠さかるに従ひ、英吉利側の對米戦債に對する解釋も甚だしく變形されたものとなつてしまひ、その返済年額たる六億餘萬圓づゝもの巨資を毎年大西洋横斷させる事は直接に英米爲替相場を混亂に墮し入れ、勢ひ世界の國際貿易をあらゆる角度から

病的なものとしてしまふと云ふ點を重要視するやうになつて居るのである。

一方米國側として見れば、既にヤング案やドーズ案などにより一度ならず二度までも谷底へ飛び下りる氣持ちで特別減額してある戦債ではあり、例へ年を経てもその權利を當にする人情は一向に弱められる筈もなく、次々と起る國內經濟不安をやゝもすれば對歐戦債未回収と結びつけたがる傾向が強い。従つてその債務國側の音頭取りであつた英吉利は事毎に引き合ひに出される始末であり、問題が金の事だけあつてその前には英語常用國同志とか二大民主主義國とかの掛け聲も一先づお預けとされ易いのである。

この喰ひ違ひにも増して、現今の英米提携強化に直接の障害をなしてゐる要因が他にも大西洋上波浪の如く漂はされてゐるのである。

今や米國も英國もそれぞれ國內の社會問題及び産業問題に就いて共通した懸念を抱かせられて居り、而も兩國とも獨裁政治を嫌ひ來るべき戦争を極端に敬遠し、兩者共なるべく他國と懸り合ひにならないうやう或る程度の犠牲をも賭して萬全の努力を拂ひつゝある。

然し乍ら三十年前の情勢は現在の共通さとは全く異にして居り、當時英吉利は歐洲の戦雲深くとざされ且つ又その國內に於いても各階級の現情不満や失業や増税問題の悪化に悩まされ抜いてゐたのであつた。

それに反し米國の方は恰も米大陸の殖民事業を一段落せしめた時期にあり、且つ又彼等自身が非常

に強大となつた事を徐ろに自覺しつゝあつたのである。そして米國統治者達は一齊に南中米兩地方や極東の商權開拓を志し、或ひは又それらの地方に於ける米國の威信を發揮せんものとあらゆる機會を窺つてゐた。

一方歐羅巴全土に差迫る危機及び不安に對しその頃の米國は殆ど利害を感じる事なく、時に應じて歐洲各地の指導者達が米國當局の助言を用ふるならば、所謂舊式な世界の政治混亂なぞ容易に清算され得るものと簡單に考へてゐたのである。實に三十年前の米國は朝野共、そのやうな歐羅巴各地の不安に何ら煩はされる事なく獨り殖民完成期の繁榮を一途に辿る事が出来ると思つてゐたのであつた。

然し乍らその世界不況及び歐洲大戰は、初め歐羅巴の一地方に發生した經濟紛擾であつたにも拘はらず、最早それが單なる一地方のみに局限され得ぬまでに地球面が壓縮されて來てゐる事を現實に示した。

従つてそれ以來米國に於ける一部の人士達は、世界の平和こそは米國の平和なり繁榮なりとして對外的にあらゆる努力を傾倒し、時によつては必要以上の勞力すら惜しまなくなつたのである。次いで國際聯盟の有名無能化により、米國のそのやうな對外的傾向は益々拍車をかけたものと見られてゐる。そして現ルーズヴェルト政府も待望の政權獲得後程なく、通貨の安定及び關稅休戰の旗幟を掲げて英吉利側と提携を計り以つて國際經濟界の再建を企劃するに至つた。

但しこの計畫は大統領ルーズヴェルトよりも寧ろ外相格のコーデル・ハルの發意に基づくものであ

り、彼がルーズヴェルト大統領の下に引つゞき米國外相の地位に在る事は意外にも英米提携強化を、現情の儘で英吉利側の意向通り容易には實現させぬ反省米國の今日を招來してゐるのである。

従つて英米提携の現情に關する限り、コーデル・ハルその人の存在は甚だ重大な示唆を帯びてゐると謂はねばならないのである。

既に老齡の域に近いにも拘はらず、今尙活氣に充ち満ちた實行意志の強い政治家と云ふのが彼に與へられてゐる人物評で、民主黨内に在つて低關稅派の一群を永年に涉り一絲亂れぬ統制振りを示して來て居り、痛烈な批評家として高關稅本位の共和黨筋からは最も恐れられてゐた。

故に彼がルーズヴェルト政府の外相となるや直ちに年來の素志たる低關稅政策に據り、この騒亂國際情勢を先づ經濟方面から鎮靜させようとした事は寧ろ當然な歩みであつた。即ちそれが昭和八年の倫敦に於ける世界經濟會議となつて表はれたのであるが、當時は國元のルーズヴェルト大統領自身ですらも未だ國內産業復興の利便上、弗貨が定着せしめられず流動性を保つ事を欲してゐた爲め、遂ひにハル外相の通貨安定策を自爆するやうな結末を告げ、同會議に於ける米國不信の聲を昂らせたのである。

其後のハル外相は自己の自由貿易主義理想の具體化に對する方針を代へ、諸國と一堂に議する策を採らず各國と個別的に互惠貿易協定を取り、進めて彼我關稅の引き下げを計り今や米國はこの種の經濟取極めを十六ヶ國と締結するに至つた。

彼は現状不満國を爆發せしめず、置く最善の途こそ、彼等不満國民の生活水準を保持する爲めに絶對必要なその對外貿易の自由を確保させるに在り、外には全く打開策のないと云ふ事を認識してゐる。従つて世界富源の大部分とその貿易の多數を統制する米國及び英國がその認識の下に積極的に協同善處するならば、現今の所謂經濟國家主義時代を根本的に是正せしめ得るとの信念を米外相ハルは強く抱いてゐるのである。

英吉利は英帝國の範圍内のみならず、自由貿易主義に近い社會を形造つて居り、又米國は英自治領のカナダさへも包含して南北中米の國々とそれぞれ自由貿易協定に到達し、且つ又英米とは別箇に經濟國家主義に反對して關稅障壁撤廢運動を強行しつゝあるスカンディネヴィアの一群、これらの三系統さへ合體工作をすれば世界自由貿易主義時代への復歸第一歩は必ず實現され得るとハル外相は考へてゐるのである。

こゝに英米提携強化の實現性が根ざされて居り、それは最悪の場合ですらも歐羅巴に於ける民主主義が獨裁主義より優越點を維持し通せる事が彼等から期待されてゐる。

然るにこの英米提携強化の實現を兩者共熱望して居り乍ら、英吉利側に云はせれば冷やかな援助たる現金御持參品物御持歸へりの米國中立法の出現程度でそれ以上に具體化しないのは、やはり英吉利側で矛盾を捨てきれない事に多く原因づけられてゐるやうである。

即ち外相ハルを以つて代表される現今の米國當局と、首相チエムバレインを以つて代表される現今

の英國當局との對立こそは信念的に兩者何れも譲歩を夢想だに仕難いものなのである。

若し現代の各國から政治家二人三脚の選手を求むるとしたならば、恐らくチエムバレイン英首相とハル米外相との組み合わせより悪い一對は有り得まいとさへ酷評されてゐる程であり、ハルが一貫した自由貿易主義者である事は前述の通りであるが相手のチエムバレインも親譲りの保護貿易主義者として一貫して來てゐる事は一層に著しいのである。

チエムバレインは昭和五年以來英吉利を自由貿易國から保護貿易國へ九十度の大轉換を企て、偉大なる高壁關稅を築き上げた人であり、彼自身も父子相傳の理想を實際化しそれこそ彼の生涯中最大の國家奉仕であつたと確信しその感想は今日に於いても何ら動搖させられて居らないやうである。

従つて彼の強い自信が削り殺がれぬ以上、例へ英米提携強化に關する重大問題にせよ尠くともハル外相を矢面に立て、動ぜぬ現合衆國當局を相手としては、從來より英米提携を一步だに進め強める事は望み難い因果關係に置かれて居り、所謂暖か味のない援助にせよ親英的な米國中立法の改正出現などは過分であらうとさへ評せられて居る。

近來のチエムバレイン英首相は、例の國際聯盟より預つてゐる形式の委任統治領を英伊關係の如何によつては一石二鳥式に獨逸へ返還するかも知れぬ可能性を鮮明にして來てゐるが、それでも一方彼が終生の誇りとする英國の關稅障壁を米國に對して幾分なりと切り下げる事は、先づ現在の世界情勢が激變を來たさぬ限り期待出來ぬ態度と見られてゐる。

即ち英米提携強化運動の行き極みは戦債と云ふ問題が精神的にはどうしても解決され得ない物質利害の問題である點に深因が在る事を全然無視しても、尙自由貿易主義者ハルを表面に立てる民主黨の政權が續く限り、或ひは保護貿易主義者チエムパレインによつて代表される保守黨の絶對多數が謳歌される限り英米兩當局に眞の經濟的一致は望み得べくもないのである。經濟利害の一致を輕視しての英米提携の實用性が如何なるものであるかは、吾々よりも英米兩國人自身の充分に體驗させられた過去そのものが明快に説明してゐる。

但し英米提携の表面よりする強化運動は以上の如く英米兩國側の現状は甚だ望み渺いものには相違ないが、一朝政變の事あらばその將來は強ち悲觀材料のみとは限らなくなるのである。

例へば彼のジョン・ピエルボン・モルガンによつて主宰されるモルガン財閥の動向などはその尤なるものであり、元來ルーズヴェルトの大統領就任以來英吉利は米國政府から兎角に疎んぜられて居り、ロツクフェラウ財閥等の米國獨行派と對立する親英提携派の首領モルガン財閥も勢ひルーズヴェルトのニューディールを極度に嫌忌して來て居る。

従つて米國人である筈のモルガンが却つて英蘭銀行總裁のモンタギュー・ノーマン邊りから、自國のルーズヴェルト新政策に關する秘報を耳にすると云ふやうな事が屢々持ち上つてゐるのである。

故にモルガン達の歡迎する政權即ち共和黨が浮び上れば當然に親英提携の政策を實施すべく、又何よりも先づ第一に日用品價格の低廉策を講じたがる労働黨がウエストミンスターに多數を占めるやう

になれば對米提携の強化は容易となる譯である。然し乍ら米國に於ける政權も英國に於ける政權も、差し當り急變あらうとも思はれず、従つて當分の間現在の英米提携強化道に横たへられてゐる二大障害は頑として動かされ得ない大勢に在ると見る事が出來よう。(昭和十二年十一月臺灣日日新報所載)

三、英米交渉とハル長官の横顔

恰も羅馬伯林樞軸の強化に矢も楯もたまらぬやうに、今やそれに對し二つの反動的な試みが躍氣となつて行はれてゐるやうである。例の後れ馳せ乍ら巴里倫敦樞軸と銘打つた佛英親善の強調、及び經濟的に英帝國內の立場を賭しても成就させようと焦る英吉利の對米提携の強化、即ちそれらである。實に英吉利が對米提携強化を、今日程に希求し熱望した時代は未だ曾つてなかつたとさへ評せられてゐる。處がその相手たる米國側の方で、昨今の英米交渉に際し飽くまでも純經濟提携意識に一貫し、些かも英吉利側の政治的提携強化の誘惑に乗らないのは、どういふ譯なのであらうか。

餘りに經濟組織が複雑化して來た現代社會の一員として、歐亞の戦亂勃發に際し例へ參戦しようがしまいが何らかの形に於いて必ず不利を蒙らされるに相違なく、世界の平和にのみよつて米國は眞の繁榮を享樂出來るのであると云ふ見解が今や米國朝野に刻々強められつゝある。従つて近來やゝもすれば戦亂の温床ともされ易い對外政治的提携は極力敬遠しようとする底流が、

ワシントンにもニューヨークにも見受られて居り、この風潮あるが爲めに英米提携工作に對する米國側の態度は慎重を極めてゐるのである。

然しその事以上に當面の英米接近企劃に對し、飽くまでも經濟本位な態度を米國が泰然として持続出來得てゐる事は、現ルーズヴェルト政權中最も内外の信頼を有する代辯者コーデル・ハル國務長官に負ふ處多大なのである。

即ち現アメリカ政局に於いてハル長官の威信及びその影響力は、名實共にルーズヴェルト大統領に次ぐものであり、尠くとも保護關稅宗の總本山たるチエムバレイン英首相を積極的な一方の立役とする英米提携工作に關する限り、その相手方の立役たるハル米外相の存在は非常に重大な示唆を含んでゐる。

ハル米外相の好む運動はゴルフ等とは凡そかけ離れた筏乗りを第一としてゐるが、この趣向があれればこそ國際政治家として勇敢に濁流を乗りきる素養が積まれたとも稱せられてゐる。

彼は今から六十六年前、米國東南部テナシー州の山地々帯に産ぶ聲をあげ、十八歳になるまで汽車を見なかつたと云ふ程の奥地に育つた。父親はお百姓で冬期には木材の伐り出しを業としてゐたので、少年時代のハルはカンバーランド河を流し下す筏造りの手傳ひをしたのであつた。即ち彼が幼少の頃、氷塊の流れる河中で多くの丸太を巧みに集め手際よく導き下す呼吸を會得した事は、圖らずも四十年後にルーズヴェルト政權の對外最高官として混沌極りない國際政經界の流水に竿差して多難なく米國

丸を進め得たものと評せられてゐる。

彼は低關稅派たる民主黨内に在つても屈指の積極的な低關稅論者で、終始一貫した自由貿易主義の信奉者である。そして各國相互間により容易なより積極的な通商貿易と云ふものを土臺とする事のみよつて眞の國際平和は招來出來得るのであるとの言説を強硬に主張して來たのである。米國議會に在る事既に二十六年、六人の異なる大統領治政の下に終始撓ゆまず、「度量の廣大な關稅政策」を要求し續け遂ひに昭和八年永い歲月の理想を彼自身の手によつて實現出來得る機會を獲たのであつた。

先づ手初めに倫敦の世界經濟會議へ多大の希望を傾けて活躍したのであるが、利害の十人十色と異なる諸國を一堂に會合せしめて一舉に解決せんとするの愚を體驗し、爾來機會を逸する事なく各國と個別的に交渉を重ね兩米大陸を主として既に十六ヶ國との關稅休戰・貿易協定の締結に成功した。

次いで第十七ヶ國目の交渉相手としてハル米外相の面前へ漸く登場したが、從來ハル理想の實現を屢々阻んだ保護貿易主義者に施政されてゐる英吉利であつたのである。

相互關稅の引下げ等を骨子とする經濟提携はハル米外相の就任以來、米國當局として熱望してゐた處でありこの問題に關する限り、英吉利の對外接近は至極容易に成就される行き懸りを持つてゐる。

然し乍ら英吉利側としては對米貿易協定のみでは甚だ勘定に合はず、それを契機として密接な所謂持てる者同志としての政治的提携をも確立せねば、折角對米通商協定の爲めに敢へて對自治領諸國との關係を尠らす犠牲とする意味が成り立たなくなるのである。

處がこの持てる者同志と云ふ通稱に對し、最大の疑惑を抱いてゐる一人にハル米外相の名が見受けられるのである。事實、同じ持てる者同志とは稱せられても英吉利の持てる物と米國の持てる物とは形も内容も存在場所も全く異つてゐる事は、英吉利の持てる者團結論者ですら肯定せざるを得ない。

歐洲大戰以來、去る昭和四年度を最盛期とした米國の對外輸出入貿易は、昭和七年度に至り實にその三分の一と云ふ慘たる不況へ陥し入れられた。これは部分的に世界經濟一般の不況に起因したものであらうが、それにも勝した要因こそはかの所謂スミート・ホーリー法案の實施であつた事は其後の経過が立證してゐる處である。この法案は、對米輸出により一國經濟の均衡を辛うじて保つてゐた幾多の國々の商品へ高關稅を重加したものであつた。勢ひそれらの諸國は死物狂ひで報復的に高關稅を米國製品に對し、築き上げたのである。

當時在野民主黨の低關稅一派を指導してゐたコーデル・ハルは、この不幸な情勢に對し如何に確く他日を期してゐたかは未だに語り草とされてゐる處である。

米國と最も密接な關係に在るカナダの對外貿易もその當時スミート・ホーリー法案のあふりを蒙り、カナダの米國からの輸入は五割四分の激減を示し、カナダの對米輸出は六割六分と云ふ半減どころの騒ぎではない大萎縮時代に襲はれた。

然し乍らルーズヴェルト政權・ハル國務長官の登場により、當時英吉利側から白眼視されつゝも締結された米國とカナダとの通商協定の爲め、その協定實施前の昭和十年度上半期と實施後の昭和十一

年度上半期とに於ける米カ通商状態は確然と一變し、カナダよりの米國輸入は二割五分増加の五億五千萬圓となり、カナダへの米國輸出は一割三分増加の六億二千萬圓へ飛躍したのである。

米外相ハルは六尺の長身白頭無髭、元來法律家で故郷のテナシーに於いて判事を勤めたりした。非常に慎み深い人で例へば去る明治三十一年の對キューバ戰爭の折に、故郷の青年達を卒先糾合し義勇軍隊長として奮戦した事なぞ決して彼自身は言及せないと云ふ。

又彼は六正六年の四十五歳を迎へてからの晩婚を行ひ、やむを得ない公式の必要以外の接待などは殆どせぬと稱せられてゐる。

現在でも彼のアパートに訪れた人々は往々にして彼自身を玄關番と間違ひ易い程に形式張らぬ自然な日常生活に楽しんでゐる事は可成りに有名である。

去る昭和三年アル・スミス知事が民主黨候補として大統領選挙に惨敗するやハルは即座に、次期大統領候補としてルーズヴェルトの出馬を促した一人者であつた。

その事あればこそ政權を獲得するやルーズヴェルトは、ハルへ好む何れの地位をも提供するに吝でなかつた。事實彼コーデル・ハルが單なる低關稅主義者であつたならば、敢へて國務長官の椅子に着かずとも商務長官に就任する事により、その理想は實現出來たのである。

即ち茲にハル米外相の抱懐する國際經濟政策に對しては、ルーズヴェルト大統領の根深い對人的支持のある事が立證される譯で、考へようによつては海外の諸國が對米問題を繞り現米國の元首たるル

ルズヴェルト大統領を納得せしめたからとて、事成れりとするのは輕擧のそしりを免れず、寧ろハル米外相の納得こそ本位とされる内狀に在る。

而もハル自身は新聞記者達からは、萬事注意しすぎると評せられてゐる程で、何かの發表に際してもそれに關する理由を必ず附記せねば氣が済まないと云ふ几帳面さを持つてゐる。従つて外見經濟的なその實は政治的な英米提携の強化工作を遂行せんとする英吉利當局者として、その直接の交渉相手たる米國當局者のハル國務長官がそのやうに正確な慎重な性格の所有者である事は、とりも直さず最大の苦手と角力をするやうな立場に置かれてゐる。

傳へられる英米通商協定が英吉利側の目論む通りよく政治的提携にまで突進出來得るものであらうか、對米接近にも強ち本意を達せず各自治領諸國からは冷眼視されるやうな舞臺面を展開せねば英吉利の爲め幸とする處であるが、果してどうであらうか。(昭和十三年一月・北海タイムス所載)

四、英帝國を賭する對米提携の強化

ハル外相を矢面に立てたルズヴェルト政権の所謂自由通商主義復舊を根本とする世界平和確保運動の行く手を頑として遮つてゐた英吉利現政府が、恰も獨伊提携の強化に脅かされた善後手段でもあるかのやうに、我然從來固執した自説を擲ち關稅引き上げを表面上の主眼とする英米互惠通商協定を

容認したと傳へられた。

去る十月五日シカゴに於いて行はれたルズヴェルト大統領の所謂積極平和演説を、拍手歡迎した以上に英吉利朝野一部の人々が熱狂する程互惠通商の取り極めによつて、果して英米の關係が眞實に強化され得るものであらうか多大の疑念なきを得ないやうである。

例へ一部のにせよチェムバレン英首相の政治的生命とさへ云はれてゐる保護貿易主義を敢へて切り崩し、而も自治領各國から沸き上る對英不滿の動きを豫期し乍ら敢へて昭和八年以來自由貿易主義信奉のハル米外相を手古摺らせてゐたにも拘はらず、一變して寧ろその英吉利側から進んで米國との提携を要求するに至つた事こそは經濟的よりも政治的理由に基づくものに外ならない。

それに反し米國側特に農民層をより多くの支柱とする民主黨の米國現政府として見れば、國內に山積する農業問題解決の一助とすべく専ら經濟的要求に基づいたものであり、即ち英の政治的意圖に對し米の經濟的所存と云ふやうに、傳へられる處の英米提携強化の立脚點は英米それ／＼根本的に相異なる土臺の上に築かれてゐるのである。

英吉利と米國との相互依存關係を強化すると云ふ事は從來も英語常用國同志の間柄として、又二大民主々義國と云ふ立場からして或ひは又所謂富者の惱みを共通する兩國として屢々叫ばれたものであるが、貧乏人同志の一致よりなまじ物持ち同志である爲めに却つて容易に二人三脚は仕難いと云ふ結末を常に繰り返へしてゐる。

今回の英米通商協定が傳へられる通り經濟的なものであるならば必然に、逸早く濠洲聯邦政府がそれに對して釘を打つたやうに英吉利に對し米國農産品と同種類のもを従來引つゞき供給してゐる英聯邦内の各自治諸領國が既得權の擁護を高調して倫敦政府へ詰め寄るに相違なく單に英吉利自身の氣持がそれに向いたからとて背後の自治領諸國との抜き差しならぬ因縁をその儘にして獨り對米提携強化のよい氣持ちには浸れぬ筈である。

既に四半世紀を闊みした今日未だに何らの根本的解決を見ず返済もそのまゝ放置の形となつてゐる例の戦債問題が、英米二國を經濟的に提携強化させる運動の最大支障となつてゐる事は言ふまでもな

く。
貸した方の米國としては例へいくら古い昔の話とならうともその權利を當にする人情には變りなく、而もヤング案やドーズ案のと棒引きにも等しい割引してやつたにも拘はらず却つて棒引不徹底を非難する英佛側の態度に頗る納まらず、勢ひ次々と起る米國々内經濟の不安さをやゝもすれば對歐戦債の未回収と結びつけて考へたがる傾向が依然として根強いのである。

従つてその對米債務國の旗頭であつた英吉利は事毎に引き合ひに出される始末であるものゝ、英吉利側として見ればその對英友情振りを無暗に感激したのは當座の話で歲月のたつにつれ歐洲大戰に於ける米國の立場を再検討などして、勢ひ對米戦債に關する解釋も甚だしく改變されるに至り現今では寧ろその返済年額たる六億萬圓もの巨資を返へす事とは云ひ乍ら一方的に大西洋横斷させるやうな動

きはとりも直さず現在英米兩國がそれ〴〵八十億萬圓もの爲替平衡資金を擁し平靜を維持してゐる磅弗爲替相場を直ちに混亂させ及んでは世界の國際貿易界をあらゆる角度から見ても病的なものにしてふと云ふ點を重要視するやうになつて來てゐるのである。

即ち外ならぬ金錢貸借の事だけあつてこの問題の前には懸け聲さかんな英語常用國同志とか、二大民主々義國とかの運動も全く影が薄くされ勝ちなのは否めない。

英吉利も米國も勿論それ〴〵對內的に社會問題及び産業問題に就いてやゝ共通する不安を共に抱いて居り、且つ又兩國とも獨裁政治と來るべき戦争を成るべく敬遠しようとなつと極力他國と懸り合ひにならないやうに或る程度の犠牲をも賭して保安萬全の策を採つてゐると云ふ相似點は認められるやうである。

然し乍ら元來がハル外相を矢面に立てる米國の現ルーヴズエルト政権と、チエムバレン首相を擁する英國の現保守黨政府とは、よくよくの非常必要に迫られなければ一致出來難い政治的要素を持つてゐる。

即ち米國の現ルーヴズエルト一派が政權獲得以來熱意を披瀝しつゝある通貨の安定及び、關稅五割天引きから進めようとする國際自由貿易時代の再現運動こそは、大統領自身よりも外相格のコーデルハルの發意に基くものと云はれる程で、従つて英米提携の強化策の現情に關する限りハル米外相その人の存在は甚だ重大な示唆を含んでゐるものと謂はねばならないのである。

彼は老齡を忘れたやうな實行意志の強い政治家で低關稅本位の民主黨内に在つても隨一の低關稅派として光つて來ただけあり、痛烈な闘士として高關稅本位の共和黨方面から最も警戒されてゐた苦手であつた。

そしてルーズヴェルト政權の外相となるや直ちに年來の素志たる低關稅政策即ち自由貿易主義により、この騒亂國際情勢を先づ經濟方面から鎮靜させようとした事は寧ろ當然の歩みであつた。

去る昭和八年倫敦に開催した世界經濟會議はその手初めとされたものであつたが、利害の異なる各國を一堂に集めて即座に成果を獲んとするの無謀さを體驗させられたハル米外相は、爾來各國と個別的に根氣よく經濟提携の強化を進め既に十六ヶ國と關稅休戰を告げて今日に至つたのである。

彼は現情不滿の國々を爆發せしめないやうにする最善の而も唯一つ残された途こそ、彼等不滿國民の生活水準を維持する爲めに絶對必要とする彼等の對外貿易の自由を確保される事であり、外には全く打開策のないと云ふ事を認識してゐるのである。

故に世界富源の大部分及びそれに關聯する國際貿易の過半數を取扱ふ米國及び英吉利が、以上のやうな認識の下に積極的に協同し善處するならば現今の所謂國家主義群雄敢へて割據するの時代風潮を、先づその兵糧の方面から根本的に是正せしめ得るとの信念を米外相ハルは強く抱いてゐるのである。

既に英吉利は英聯邦の限られた範圍内のみに於いてやゝ自由貿易主義に近い社會を形成して居り、又肝腎の米國は南北中米を主とし英自治領のカナダ國さへも包含した諸國とそれ／＼自由貿易協定の

序門に到達し、且つ又英米とは別箇に現代の經濟國家主義に反對して關稅障壁の撤廢運動を強行しつつあるスカンディネーヴィアの一群、これらの三系統さへよく時潮を認識し提携の實を致せば世界へ再び自由貿易主義時代を實現する事は強ち至難の業ではないと信ぜられてゐる。

従つてこのやうな米國現當局者の心理に合致さへすれば英米提携の強化は豫想し得る性質のものであるが、從來英吉利側の方で容易に矛盾を捨てきらなかつたのは昭和五年以來藏相格として又現に首相として保守黨現政府部内に絶對的な聲威を有するチェムバレインが、父子相傳の保護貿易主義者として一貫して來てゐる事に負ふ處多いのである。

彼は昭和五年以來傳統の英吉利を自由貿易主義から保護貿易主義へと大轉換せしめ偉大なる高壁關稅を築き上げた人であり、親譲りの理想を自分自身の手で現實に施行し而も目先はその爲めに生産費割高の定評ある英吉利業界も可成りな盛況を讀へてゐる状態である。

故に超非常時にでも直面せぬ限りチェムバレイン首相は、自己の裏書きされてゐる自信を殺がれ得ぬ立場に置かれてゐるのである。

上述のやうなそれ／＼英吉利側の立場なり米國側の理想なり相一致せぬものを根底としてその舞臺に行はれる處の運動が所謂英米提携の強化音頭であり、純經濟的な要素を整へぬ經濟協同運動であればこそ一度英米互惠通商協定の報傳はるや英吉利自身の國內にすら各種の反對が起きた事は至極當然で、「英吉利の農耕産業又は各自治領諸國産業の何れにも何らの犠牲を強ひる事なくして外國（即ち

米國の意)との通商協定が相互に圓滿に行はれ得る程ならば今更オツタワ協定の再検討などと云ふ聲を聞かなくともすんだ譯である。」と詰め寄つてゐる。

米國側としては前述のやうに廣く世界各國との通商協定による經濟的平和を目標としてゐる爲めに、英吉利のみを接渉相手國に選んでゐる譯ではなく實に多くの交渉對象諸國中の稍々大きい相手の一人が英吉利であると云ふ感じなのである。

従つて米國當局は英吉利のみに止まらず英聯邦内の各地とも個別的に、相互關聯の引下げ交渉を進める手順となつてゐる。茲に帝國屋の老舗英吉利本國がたゞでさへ本國の意志を第一には尊重しなくたつた各自治領諸國と米國との間に挟まれ窮境を脱し得ない悩みを持つてゐるのである。

その正式な呼稱が英帝國から英聯邦へと塗り代へられた通り、既に今日では英吉利本國と雖も自身の考へのみにより自治領諸國から豫めの應諾なくして、獨斷で英吉利聯邦と米國との通商協定を取り極める権限を有しては居らない。

經濟工作により國際平和を再建せんとする理想は別としても米國の對英通商協定は、現實に米國農民へ利益を齎らすに相違なく農民層から多大の支持を受けてゐる民主黨のルーズヴェルト政權として見逃す事の出来ない工作の一つである。

そして英吉利と云ふ人口密集の消費地こそは米國農産品の機會あらば進出せんとする好市場である事は云ふまでもないが、その英吉利は近來特にオツタワ會議以來十重二十重と各自治領農産品の獨占

的市場たるの餘儀ない破目に追ひ込められて居り、にも拘はらず自治領側とすれば現状に満足しきれずそれら農産品を英吉利でもつと消費増加せしむるやう時節柄の國防問題と結びつけて英吉利當局に迫つてゐる有様である。

従つて尋常の事では自治領諸國からの輸入を減じその換りに米國から供給を受けると云ふ譯にはゆきかねる英吉利なのであり、比較的各自治領との關係が薄い棉花を新規に米國から輸入するとなれば、既に何十年來の相互取引關係に在る埃及が承知せず印度をも刺戟せずには置かないであらう。

今日の英吉利として地中海問題に對し埃及との緊密さを必要とする事は益々痛切なものがあつて、又ランカシアが印度綿の引取量を減じ米國綿を新に消化するやうな動きが萬一起きるとせば、それだけでなくも印度内地に機業の勃興氣運にあるものを一層強制的に獎勵するやうな皮肉な因果關係を展開するであらうと思ふ。

一方濠洲や新西蘭の兩自治領現在に於ける繁榮は専らその農牧生産品價格の昂騰に依存して居り、且つ從來の政經兩方面共に對英依存本位であつたのであるが英本國から充分に非常時の看護を爲しきれなくなつてゐる事と暫時乍らの好況に恵まれ次第に濠洲の地位自然に即した獨特の歩みを試みるやうになり英米を握手せしむる南太平洋上の理想境と自讀して濠洲聯邦國は、英吉利本國のみならず米國よりも同時に支援を獲んものと努力しつゝあるやうである。

カナダ聯邦國は英聯邦内の各國に對すると同時に大隣米國の存在を考慮せねばならない、特異な立

場に在り、而も農産品の市場価格のみならず産金価格の高低にも重大な利害を感じる現情に直面させられてゐる。

即ち米國は貿易業者及び生産業者に緊密な關係を有する世界の金の將來を統禦せんとする大勢を示して居り、従つてカナダ國がそのやうな強大米國と同じ歩調を取らうとする事は當然である。又農産品よりは寧ろ産金価格の高低を第一に重要視してゐる南阿聯邦自治領國も、多分に對米依存の要を認めつゝある近情に在る。

然るに現在では例へ各自治領が英吉利本國に對し親子である關係から兄弟姉妹の關係に昇格したとは云へ、未だ政治的にも經濟的にも對英依存主義を情勢によりオツタワ協定なる鑄型の中に強ひられてゐる有様であるが、今まででさへ不滿の叫びの溢れてゐる英聯邦内の互惠通商協定が若し傳へられる英米互惠通商協定の成立により不利を來たすとすれば、濠洲・カナダ・南阿・南ローデシア・新西蘭の英自治領諸國は堰かれた堤のさける如く各々自己の好む處により獨自な地歩を開拓せんとするやうになる事は必然で、而も彼等自治領諸國は經濟的に對米第一主義に轉換し利を得る處決して從來の對英本位に比較し劣らぬものであると云ふ見通しさへもつけられてゐるのである。

從來英帝國主義者は常に、英帝國内の結束とそして對米提携の強化策とを以つて世界指導の金科玉條とし來たつた。處が時勢の變遷は皮肉にも彼等を進退兩難に墜し入れつゝあるやうである。

尠くとも實質的に強固な英米提携の強化を欲せば英吉利は自治領諸國に何らかの因縁を含めて後に

爲さねばならない。然し既に今日の自治領は、何れもそれを温順しく納得するやうな前世紀そのままの自治領ではなくなつてゐる。否そればかりではなく寧ろ、内輪の者をそんな扱ひ方にするならこれを好機會に公然と米國側へ接近するとさへ氣色ばむ程成育しきつた英自治領各國なのである。

即ち互惠通商協定内交渉と云ふ形を以つて表はれた英米提携の強化こそ、英吉利側としては政治的に米國へ所謂英聯邦のひさしを貸す心算かも知れないが、若し倫敦の指導者達が自己近來の神經衰弱振りを忘れそのやうな企てを敢へてするならば却つて經濟的に英聯邦てふ主家全體の戸主權が不知不識の裡にひさしだけの管の米國の方へ移動して了ふかも知れない情勢なのである。

それのみならず經濟的に對印度關係を損じ、埃及との聯繫を亂すやうな事態を惹起する可能性を多分に含むのが、所謂鳴物はやし入りで傳へられる處の英吉利の對米互惠通商協定が完全に實現する場合に不可避とされる内幕なのである。

換言すれば英吉利は今日までの大英聯邦てふ背景を賭して對米提携の強化を企てるものに外ならず、果して英吉利本國朝野の大多數は冷靜にその時潮を考慮して而も尙英米互惠通商協定に隨喜の涙を流してゐるものであらうか、寧ろ一九三八年版世界不可思議の一つたる巷評を免れぬ所作事ではある。

(昭和十三年一月・福岡日日新聞所載)

五、英米提携とモルガン財閥

南京陥落を序幕として愈々本舞臺に入つた吾が對支問題も、從來やゝもすればのれんに力押しさせられ易かつた對外工作の轍を踏む事なく、本格的な耕作播種を了するものと期待してやまない。

元來日本人の大多数は日英とか日米とか日佛とか或ひは日獨とか、日伊とかの直接對外關係にばかり没頭しそれよりも寧ろ根本的な對日大勢をも決するに至る英米なり英佛なりそれら各列強相互の關係自體に對し餘りにも無關心の傾向がある。従つて波蘭の動搖と聞いて滿洲國への影響が如何なるものであるかを直感し、又はバレスタインの騒擾と聞いて印度への餘波等を直感する識者が、躍進東方國と稱せられる現代日本にどれだけ居るか。この一例のみを以つてしても今日既に世界的である筈の日本及び日本人の大多数が、如何に國際問題の常識涵養を怠つてゐるかを如實に暴露してゐる。

米國大統領の積極的平和演説や互惠通商協定の姿により高調される英米提携の強化などに對し、後退するやうな態度を採る者は勿論不心得千萬甚だしいが、又餘りに強がつて力み返へすやうな態度を採る者も凡そどうかと思ふ。何故ならばその對象の内幕は懸け聲が強ければ強いだけに一層空莫なものでありそれに對して所謂持たざる者の痰呵をきる必要は認められない。のれんに力押しとは寧ろこれら額に青筋連の形容でしかなく全力を傾倒すべき方面は他に横たへられてゐる。

古來ワシントンに於いてもニューヨークに於いても……北米合衆國の政界に於いても經濟界に於いても、米國富源統制の覇權を目指して米國獨自派と親英提携派との二大勢力が絶え間なく闘争を繰り返へして來てゐる事は餘りにも有名である。

處がその親英提携派の中には、別に英吉利を故郷ともせず英國以外の歐羅巴諸國から移住した人々が可成りに多く、異色な存在とされてゐる。例へば英吉利に於ける群少舊式な化學工場を統制し、以つて英吉利の化學工業をして曲りなりにも、獨逸の大化學工業に對抗せしめ得た、かの故アルフレツド・モンドは、皮肉にも獨逸産れの猶太人であつた。

又英吉利の人絹工業に多大の力を致したヘンリ・ドレイフスはスキス産れの猶太人であり、佛蘭西一族の方の血統を曳く在米ロスチャイルド分家も親英提携派に屬してゐる。

然し乍ら現代米國に於ける親英提携派の主力こそは、何と云つてもモルガン財閥に指を屈さねばなるまい。モルガン家の祖先は北米合衆國が未だ獨立せず英吉利の一殖民地であつた十七世紀時代に英國のウェールズから移住した。そして始祖マイルス・モルガンは眞面目な清教徒として、機會の均等な自由の天地を東部米大陸のニュー・イングランド地方に見出したのである。

それから百年後のモルガン一家は麥酒醸造、不動産投資・保險の三部門を營業範圍とし、既に巨萬の富を築いてゐた。そして一八九〇年頃に至り彼等の一族は、遂ひにロックフェラウ一族と米國統禦の覇權をめぐつて角逐を演ずる程になつて來た。

ついで一九〇〇年（明治三十三年）の十二月、カーネギーの創設にかゝる老大なユース・スチール會社の實權を握り、モルガン財閥は佛蘭西及び獨逸の鐵鋼界をも徐々に威壓し初めたのである。

モルガン財閥の當主ジョン・ピエルボン・モルガン（ジェー・ビー・モルガン）は、一九一三年伊太利の羅馬で死んだ先代の跡を襲つて、かの世界的財閥の中心となつた。

時恰も歐洲大戰勃發の直前であり、彼は四十五歳で奮き盛りであつた。彼は先代のモルガンが我武者羅であつたのとは反對に極めて物靜な而も快活な一面を持ち、好きは英吉利で嫌ひは新聞記者と寫眞班と猶太人とカトリック教であると傳へられてゐる。

ジェー・ビー・モルガンの英吉利好きはとりわけ有名で、倫敦や巴里等歐洲各地に幾多の傍系事業を擁してゐる關係もあるが、彼は一年に一度は必ず大西洋を渡り倫敦の自宅と農村地方の別荘と交互に滞在し、英吉利氣分にひたる事を樂しみにしてゐる。

その爲めか彼の言語は米國人であり乍ら、アメリカ・アクセントのない標準英語を話すと云ふ定評さへもある。

又彼は先頃創立三百年祭を催ふしたハーバート大學の學生に接する事も好み、その理由としては米國中でも最も英吉利風な都會とされてゐるボストンの雰圍氣に在るハーバート大學である爲めとか、こゝろゆふ點にもモルガンの英國好きが現はれてゐるやうである。

今やモルガン財閥はその反對勢力である米國獨自派のロックフェラウ金融及びフォード等數多の産業財閥と拮抗しつゝ、ルーズヴェルト政府當局のミシシッピ溪谷地方への電力供給策に應酬するかのやうに、ゼネラル・パワー會社と稱する大持株會社を創立した。

このゼネラル・パワー會社は瓦斯電氣動力運輸に關する三百三十餘の獨立企業を抱括したもので、その勢力範圍は米國々内のみに止まらず隣國カナダは勿論の事、中南米諸國に汎ねく及んでゐると云ふ。

總株數は十萬公稱資本は實に全米國産業資本の五分ノ一を占め、勢ひ今日の米國資本主義經營上見逃す事の出来ない一要素となつて來てゐるのである。

何故に米國のモルガン財閥が、敢へて米國獨自派と反して親英的な傳統を固守するのか。當主のジェー・ビー・モルガンが大の英吉利好きであるばかりでなく、英國のウェールズ地方を祖先發祥の地とし且つ前世紀の半以來モルガン一族の分家が再び逆に英吉利へ移住してゐる事なども理由の一つとして考へられる。

その外物質的な理由も幾多ある事は當然である。例へば一九一六年、聯合國側の英吉利宰相たるロイドジョージは對米起債運動の爲め、レディング卿とロンダ卿とを米國へ出向させた。

ロイドジョージは勿論ロンダ卿も生粹のウェールズ人であり、レディング卿は猶太系の英國人ではあるが、當時司法大臣の榮職に在つた爲め、彼等は感情的に既にジェー・ビー・モルガンを味方として

わた。

そして非常に困難視されてゐたレディング卿の六億磅起債もモルガン一派の盡力によつて成立し、又ロンドン卿は英吉利當局の代表としてその六億磅全額に相當する米國生産品を大量注文したのであつた。斯る經濟取引關係が米國側をして歐洲戰亂後半に中立持續を頗る困難なものに轉ぜしめ、且つ英吉利側の聯合國軍へ味方させるに至つた主因の一つとさへ數へられてゐる。

英吉利は、ルーズヴェルトの大統領就任以來とかくに米國政府から疎んぜられてゐる傾向が強い。勢ひモルガン一派も、現政權のニュー・デイルを極度に忌避しつゝある。その結果米國人であるモルガンが却つて大西洋の向ひ岸の英蘭銀行のモンクギュー・ノーマン總裁邊りから、米國當局の政策に關聯する新しい秘報を耳打ちされると云ふやうな變態的場面が屢々持ち上つたのである。

従つてモルガン一派の反ルーズヴェルト政權行動はいやが上にも昂められ、ルーズヴェルト第二次大統領選挙に際し彼と數年來仇敵の間柄となつたアルフレッド・スミスを擔ぎ上げて共和黨の大統領候補にしようと企てた事なども、その反ルーズヴェルト熱の一端を物語るものであらう。

モルガン一族の分家が英吉利に定住を初めた前世紀の中頃以來、モルガン財閥としての方策は、所謂英帝國の政策と漸次歩みよりの傾勢を示してゐる。殊に最近はその傾向が一層強く、モルガン財閥の新設したゼネラル・パワー會社と英吉利のアイ・シー・アイで通る英帝國化學工業會社との密接な提携振りなどもそれらの例證の一つである。

従つてモルガン財閥の存在及び活躍振り如何は直接に、ヲール・ストリートに於ける英吉利實勢力の指針とも見做され得る譯である。又積極的に大投資を行ひ以つてファツシヨ伊太利の復興産業界を實質的に支配して來た人こそは、ムツソリーニ獨裁官ならぬ米國のモルガン財閥であるとさへ通評された。即ち英伊の抗爭推移を見極める場合にも時としてはモルガン財閥の存在を無視出來なかつた程である。

然し乍らそれ程有力な親英的モルガン財閥ありとは云へ、現今の英米提携強化は餘り容易な途を歩み得ない支障が横たはつてゐる。即ちその當面の接渉相手として、英吉利側が保護貿易主義を未だに相當強く信奉する保守黨政府であり、米國側はそれとは全く反對に自由貿易主義の宣揚に今や大童の民主黨特にルーズヴェルト・ハル一派の政權で、何れも近來自己の政見を確守する事により政治的生命を完うしてゐるのである。

故にこの英米兩當局の何れかゞ下野し英米共に高關稅屋揃ひとなるか、或ひは低關稅屋揃ひとならぬ限り、傳へられる處の英米互惠通商協定も決して月並み以上のものでは有り得ず、よしんば高關稅屋の英國現當局が低關稅屋の米國現當局にうまく歩調を合せ英米提携の強化など、鳴物はやし入りで他國を威壓せんとしても、飽くまで經濟的見地に據る米國と政治的都合を考へる英吉利との根本的相違は必ず他の方面からでも故障が出で、理想的な英米二人三脚は期待出來ぬであらう。

即ち現情英吉利が眞に對米提携の強化を企てんとせば、先づ各自自治領との關係が全く一掃される經

濟的行懸りのある事を豫期せねばならず、又各自治領諸國を全然背景に持たぬ英吉利となれば押し出し振りにも多大の格下げされる事は必定であるからである。

而も米國現政權としての對外互惠通商協約の取極めは、強ち英吉利のみに限られた譯ではなく、實は第十七ヶ國目の接渉相手國が英吉利であつたと云ふ程度の代物である。

英米提携の強化が容易に望み得ないと云ふ現實は、英佛及び獨伊から挟まれ苦しまぎれに刻々とその條文を肥滿させつゝある米國中立法それ自體が何よりも雄辯に物語つてゐるものと思ふ。

六、英米佛提携強調の前途

米國當代きつての自由貿易主義者コーデル・ハルを矢面に押し立てたルーズヴェルト政府が政權獲得以來根氣よく實行しつゝある「自由通商主義復舊を基底とする世界平和の確立運動」の行く手を磐石のやうに遮つてゐた英吉利の保守黨現政府が、恰も獨伊提携の強化に脅かされた善後處置でもあるかのやうに從來あれ程に固執してゐた保護貿易主義の自説を例へその一小部分なりにせよ擲つて、相互關稅の引き下げを表面上の主眼とする英米互惠通商協定を纏め初めたと傳へられる。

或ひは又英佛兩國の首相相四人鳩首を集めての倫敦會談により愈々殖民地返還問題を獨逸と商議する事に決し、表面上英佛側の對獨融和を企て同時に伊太利の孤立化を計る等々と、所謂持てる者同

志の足並み一致即ち英米佛の提携強化振りは近來幾多の迷彩を施され矢次早と國際舞臺上へ登場させられてゐる。

然し乍らそれらは内實共に一糸亂れぬ足並みを進め得るものなのであらうか、吾等は徒らに瞬間的の昂奮に駆られて大局觀を惑はせられてはならない。

世の中はすべて十年を一單位として循環する……と云ふ古老の言は、近代の佛蘭西と伊太利との外交状態に關する限り正にその通りであつた。

歐羅巴大戰の終了した直後、獨逸・埃太利匈牙利等の舊領土處分問題などに端を發した佛伊二國間の反目對立はそれ以來數年前まで小競り合ひを繰り返へし、時として伊太利人の佛蘭西入國或ひは佛蘭西人の伊太利入國何れも吾々局外者の想像も及ばぬ程嚴重に取締られてゐたものである。

處が戰敗した筈の獨逸の急速な復活勃興振りは再び佛蘭西最大の恐怖心を呼び戻させ、一方又ナチスの埃太利合併策が伊太利の懸念とされる處となり、さしも執拗に続けられた佛伊の睨み合ひ状態は俄然一變し獨逸の果敢な新興勢力に對し共同戰線を張るやうな歩み寄りを示すに至つた。

それ以來特に佛蘭西側は、伊太利をして獨逸側へ接近させる事なく飽くまでも自分達と同じ反獨線上に踏み止まらせようとし、最大限の犠牲をも惜しまずあらゆる策略をめぐらせ地中海や北アフリカ大陸に於ける特權を伊太利側に默認する等その例は一二にとゞまらなかつたのである。

彼のエチオピア問題に際してすらも佛蘭西は、英吉利の熱烈な提携強化の懇談を敢へて聞き流し強

ち伊太利の大陸行動を阻止しようとはしなかつた。

開戦準備の最後の段階と稱せられる病院船隊までその當時地中海西口に待機させての英吉利側の眞剣な依頼にも拘はらず、佛蘭西は遂ひに一兵すら動員せず以つて相對的に佛伊友好關係の弱められる事を極力防止したのであつた。

然し乍らナチス獨逸の復興力は餘りにも強く元來その一舉手一投足を悉く恐威に感ずる佛蘭西としては、最早抽象的な伊太利との友好關係のみでは安全保障も心もとなくなり、且つ又同じやうな恐怖症に罹つてゐるチェッコスロヴァキアに強ひられて、帝政時代からその政體の變化を超越して一貫する因縁の深い露西亞との提携強化を進め遂ひに問題の佛ソ協約をでつち上げてしまつた。

その結果が却つて獨逸を一層硬化させた事は云ふまでもなく、次いではソ聯が唯一つの國際的玄關口としてゐたバルテイツクの制海權を新銳獨逸海軍に奪はれるやうな情勢を惹起し、従つてソ聯はやむなく必要に迫られた強さで懸命にその新玄關口を南方に求め遂ひに黒海から地中海への進出を企てるに至り、茲に地中海を自己のみの内海化せんと躍動しつゝある伊太利と餘儀なく對立尖銳を極める今日に到達したのである。

即ち佛ソ提携の強化は佛蘭西に出發して獨逸の積極工作を誘發助成し、次いでそれはソ聯をして死物狂ひの地中海進出を企てしむるに至り從來取行はれてゐたムツソリーニ・スターリン相互不攻撃てふ通評を一蹴し去り伊太利との利害不一致を現實に示し、遂ひに伊太利の態度をより以上に硬化せし

め結局佛蘭西はその豫期せるとせざるとに拘はらず愈々獨逸のみならず伊太利さへも向ふに廻はし拔身で受太刀をせねばならない現情となつて來たのである。

己れより出で、己れに還へるとは全く佛ソ協約を通して見た佛蘭西の立場を皮肉つた格言のやうなものであり、今や佛伊對立の深刻化は西班牙の戦線のみに限らず北アフリカに於いても險惡の度を加へ、佛蘭西は自領ツニシアのビザーク軍港を徹底的に強化仕直し以つてリビアへ刻々増兵される伊軍の精銳と對峙の姿勢を示すに至つてゐる。

一方英吉利はエチオピア問題以來、善隣友邦としての佛蘭西の實用價値を相當に見直させられ英佛彼岸の望見し得るドウヴァー海峡も強ち一衣帯水に非ざる事を充分體驗した譯であり、従つて其後の英吉利は舊戰敗國の領土問題などに對しても事更に獨逸側の方へ同情ある言動すら仄かし、以つて佛蘭西をも牽制するやうにさへ變つて來たのである。

近來羅馬伯林提携の強化に對抗し盛に英佛提携の強化が英吉利朝野一部の人々によつて稱導され例のサー・ノーマン・エンゼル達もそのお先棒を擔いでゐる程ではあるが、上述のやうな英佛間に掘られてしまつた溝は容易に超越しきれぬ大勢に在ると見るのが妥當のやうである。

勿論英吉利にも所謂持てる者共通の憐みを強調する親佛提携派は確然と存在して居り全く没却視は出來ないが、未だ朝野大多數の方面ではエチオピア問題當時に於ける佛蘭西側の冷淡な仕打ちを忘れさらぬ者多く、且つその頃飲まされた苦汁が主因となつて例の五ヶ年計畫特別支出二百六十億萬圓の

大軍擴張時代を遂ひに展開するやうになつた立場に置かれてゐる。

而も経過は最初の企劃豫定よりも早く進捗し、伊太利に劣らぬ空軍の擴張も佛蘭西を當にせずとも獨り歩み出來得る陸軍の増兵も、又海軍の積極的建て直しも或ひは國防第四軍と稱せられる英吉利島内の戦時に於ける食糧自給組織の確立施設も、それらの主要部分は何れも昭和十四年早々までに殆ど實現し完成の運びとなる近況を呈してゐる。

従つて英吉利側のみ都合からすれば如何なる急場凌ぎをしても昭和十四年初め頃までは、出來るだけ現状の儘ほうかむりで通過したい大勢に在るやうである。最近の一例としても佛蘭西の對伊硬化に對し専ら鎮靜劑の役目を買つて出ようとする英吉利の態度こそは、この間の推移を如實に反影するものに外ならないと思ふ。

英吉利の實勢がそのやうに動いて來てゐる以上、英吉利とはどうしても相容れ難い地中海の覇權獲得をのぞむ伊太利側としては、成るべく早く地中海工作を遂行して了はねば不利を増すに相違なく、ムツソリーニ首相が例の伯林訪問から歸國以來驍進的に對西班牙及び北アフリカ地盤の伊軍勢力の強化に全力を傾倒してゐる事は、その一半の要因こそは英吉利再軍備完成期の豫定繰り上げに對應するものと評するも過言ではないやうである。

然らば一朝有事の際に於ける英佛二國の足並みほどの程度に揃ふであらうか、世上多くの人々が評するやうに従來の不揃ひは別問題であり來る前途に於いては自然と二人三脚の快走振りを發揮するも

のであらうか。

一般には所謂持たざる國々に必然對抗を餘儀なくせられ持てる者同志の英吉利と佛蘭西とは、その好むと好まざるとに拘はらず協同步調を取るの外なしと云ふ判斷が下されてゐるやうである。

けれどもそれら個々の内情を考慮する時、佛蘭西とソヴィエト聯邦との相互依存性こそ宿縁とも稱すべき程に必然性を包含してゐるものゝ、英佛二國の關係は強ちそれと同等視は出來ないように思はれる。

即ち英吉利側としては對伊太利關係が自己に都合の悪い時期に最悪化せば裏面から對伊牽制を兼ねる對獨讓歩と云ふ切り札を持つて居り、この切り札こそは伊太利よりも寧ろ佛蘭西が英獨接近の幻を直感し最も恐怖を豫感せしめられてゐる代物なのである。

而もその切り札は愈々切端つまれば強ち一枚だけに限られる事なく今一枚準備されそうな雲行きを見せて居り、即ち英吉利の委任統治領たる東阿のタンガニカの對獨返還がその第一札であり、英聯邦の南阿自治領國の委任統治領となつてゐる西南アフリカ地方が可能性の絶無ならざる第二札と豫想され得るのである。そしてこのやうな動きは佛蘭西をして否應なしに、西アフリカのカメルーン・トゴランド一帯の舊獨殖民地から手を引かなければならぬ緊圍氣さへも生じつゝある。

果してこれら舊領土回收により獨逸がさう英吉利邊りで考へてゐるやうに、英伊の抗争激化に對しよく中立的な態度を期待し得るものかどうかは第三者の推測の限りではないが、英吉利側にその奥の

手があればこそ佛蘭西側として親英政策のみではどうしても落ち着けず、その反面親ソ政策をも充分に施して置かねば枕を高くして寝る處か僅かの假睡さへも出来かねる有様なのである。

既に十數年以來の英自治領各地はカナダにせよ南阿聯邦にせよ濠洲にせよ何れもその新住民の大部分は意想外にも、英吉利人自身ではなく英帝國から見れば全くの外國人である歐羅巴中部及び南部地方からの人々によつて占められてゐる實勢に在る。就中白人主義を高揚してゐた筈の濠洲聯邦國の如き殊に最近數年來英人移民は新來者よりも却つて英吉利へ引き揚げる者が多く、強ち純粹の白人種とも稱せられない地中海北部沿岸諸地方からの外國人移民（主としてギリシヤ・伊太利・ユーゴ・スラヴィア人）の來住により辛うじて開拓大道に雜草の繁茂するのを防ぎ止めてゐる程度にすぎず、これらの現實は英吉利朝野の思慮ある人々をして齊しくその前途を再考せしめつゝある問題なのである。

従つて英人識者の「英帝國」に對する觀念は内容的に甚だしい變化を來たし、日没する處なき云々と稱する徒らに屋臺の大を誇つたブリテイツシ・エムパイアから、一躍して過去の企業や特權に對する恒久的な利潤を確保せんとする國際的トラストとも見做されるブリテイツシ・コムモンウェルス・オブ・ネイションズに移行しつゝある。

この大移動は世人に餘り注視されなかつたのではあるが、最早「英帝國」なるものは公式上存在せず名實共に「英聯邦」と組織を變更し登記済みである事は、英吉利人自身ですら一般の人々は知らな

いである者が尠くない。暴落した舊株券を何時までも普通通りの尊い財産としてそのまゝ大切にさせて置くやうな近代英吉利當局者達の態度は、果して英吉利人民に親切なものと云へるであらうか多大の疑念なきを得ない。

額面通りの價值ありと信じきつてゐる英吉利大衆であるからこそ極東の問題等に對しても、徒らに高踏的な而も却つて自己の爲め利益を失ひ損害を招くやうな事態ばかりを惹起し易いのである。

何れにしても舊領地の對獨返還是認の英吉利當局の舉動に對し既に激烈な反對運動を行つてゐる南阿聯邦國の大勢を、本國對自治領の舊關係によく物言はせて英吉利側が東阿のクンガニイカ統治領をすら意の儘に處分する事は至難であらうと評する人々も多いが、それは英吉利朝野大多數の英帝國意識を舊來通りの絶對的なものとしての考察であり、最早今日では多大の修正が施されなければならぬものであると思ふ。

故に持てる者同志と云ふ觀點からして英吉利と佛蘭西が四圍の大勢に押され遮二無二と同一戰爭に立て籠るであらうとの豫測を下しきるには幾多の無理があり、而も英吉利の現に持つ物と佛蘭西の今所持してゐる物とはそれぞれ形態も内容も異にして居り、必ずしも英佛が同一のものを同様な態度で持つて居るのではないのである。

即ち地中海を繞る各種の問題や事件にしても英吉利が教圍く時には佛蘭西がなだめ、佛蘭西が血相を變へるやうな場合には英吉利が静め止まらせるやうな役廻りこそは、恰もその持てる者同志の八百

長的な計略でもあるかのやうに見受けられるがそれは餘りに穿ちすぎた解釋の仕方と云はねばならぬ。

英吉利と佛蘭西が各々持つてゐる物の存在場所や素質や體様がまち／＼であればこそ、第三者からの要求又は行動に對し、或る時には英吉利が積極感を抱くに反し佛蘭西は却つて消極的となり、又或る場合には佛蘭西が好都合と思ひ込んでも英吉利の方では一向に氣乗りしなかつたものである。

持てる者同志の一致を計る事の至難さは寧ろ持たざる者同志の團結を企てるよりも一層容易ならず、そのやうな實際情況は個人間の場合でも又國と國との場合でも眞理に差異のあらう筈とてなく、既に世界經濟會議に於いてもエチオピア問題に關聯しても將又西班牙内亂不干涉工作に就いても有力な示唆を吾々に示して來てゐる。

然らば英米二國間の足並みはどうであらうか、從來より以上に提携を強化させる事が可能な大勢に在るのであらうか。

英吉利にも先づ同人種てふ血縁關係を擧げ或ひは英語常用國同志として且つ又二大民主義信奉國同志としての、英米提携の強化を叫びそれを以つて世界絶對の安定力なりとする信念を抱いてゐる者も決して尠くはない。

果してその通りであらうか、華府會議にも倫敦會議にも英米共同で吾が日本に劣勢比率を押しつけたからは英米提携が絶對的なものゝやうにも見られ易い事は無理もない話であるがそれが、彼等の全

面的態度であるとしたならば何故に、かの歐洲大戰に際し米國はその勝敗の大勢が決するまで容易に参加なし得なかつたかと云ふ反問を生ずるであらう。

而もその參戰理由は表面上、獨逸潛航艇の局外中立國所屬船舶襲撃にいきり立つた米國清教徒一群の人道主義高調に發したものと傳へられたが、それ以上に強く米國當局に參戰の決意をせしめた主因こそは當時モルガン財閥の盡力により成立を見た英吉利政府の對米六億磅の起債に在り、且つその巨額全部に相當する物資を英吉利に供給したと云ふ經濟取引關係が、米國軍を遙々歐羅巴戰線に派遣し動せしめ且つ獨逸に反して英佛側に立たしむるに至つた經過は何人もよく否定なし得ぬ處である。

又數年前のエチオピア問題に際しても、英吉利からの乞ひを受けた米國ではあつたが、結局伊太利へ對するよりも英吉利に對して稍々友好的な中立法を發動させた位ひの事が最大限度であり、米國は英吉利の對伊工作に對し遂ひに一肌ぬぎきらなかつたのである。

それには現在米國社會を指導する人民の内に伊太利移民の系統を曳く者が相當に多く、彼等は期せずして絶へず米國當局の反伊行動を牽制してゐた事も要因とされてゐるが、その他にも例へば米國中きつての親英提携派と目されるモルガン財閥ですらその活躍の範圍が廣大であるだけに、當時伊太利にも多大の利益を有して居り強ち英吉利側の反伊工作ばかりに肩を入れない立場に在つた事なども見逃せない一因であつた。

即ちその頃復興伊太利の産業界を實質的に支配する者こそは、獨裁官ムツソリーニならぬ大西洋遙